

第45集 平成21年 厚木合宿レポート

# 日本への回帰









大学教官有志協議会  
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰  
(第四十五集)

—— 第五十四回全国学生青年合宿教室(厚木)の記録より ——



## はしがき

昨年八月末の総選挙で、「国民の生活が第一」との平明極まりない看板を掲げ「政権交代」を連呼した民主党は、衆院の小選挙区三百議席のうち二百二十一議席を獲得して政権を握った（比例代表と合せて四百八十議席中、三百八議席を占めた）。定員一名の小選挙区制の下では一票でも多く得票した者が当選となるから、その選挙ではドラスティックな政権交代の可能性は常に大である。それにしても自民党は嫌はれたものである（小選挙区制は大政党間で国防・外交・公教育など「国のあり方」に関する共通認識が前提となるが、今回それがまま票が動いた）。

米ソ冷戦下の昭和三十年、保守合同で発足した自民党ではあったが、いつの間にか、「改革推進政党である」と叫んゐた。何故の改革か——保守するための改革——の原点を見失つては、「改革のための改革」に陥るしかなかった。憲法改正の意欲は徐々に減じ、唱へたとしてもその視点はぶれた。この間、冷戦を日米安保体制で乗切つたのは、ある意味では賢い選択だったし、その経済効率優先路線は「高度経済成長」といふ成果を国民にもたらした。

しかし、その半面で農山村の疲弊、シャッター通り化した地方の街並、過疎と過密の両極化等々の目に見えるひびみに止まらず、家族親子関係の稀薄化、そこからくる非行・犯罪の

多発と低年齢化、基礎学力の低下など総じて規範意識の劣化も招来した。登下校の児童を保護者が順番でガードしたり、町内会の役員が深夜「わが町」を巡回するなどといふことがかつてあったであらうか。これらを全て政権の所為だなどと言ふつもりはないが、経済最優先の国政のツケが、ここ二十年余り、年毎に「人心の荒廃」といふ形で顕在化してきてゐる。

振り返ってみれば、経済優先路線の下で、国民の心に、とりわけ年少者の心に、重い影を落したと思はれることが一再ならずあった。例へば昭和五十七年、マス・メディアの誤報に端を発した「中韓による歴史教科書への干渉事件」(所謂「教科書問題」)では、場当りの「近隣諸国条項」を設けることで収束が図られた。それは「近現代史」の記述に関しては近隣諸国との友好の見地から事実上検定をしないといふもので、一面的な日本悪玉史観が教科書に載ることとなった(「近隣諸国条項」は今もそのままである)。その後も二度三度と外圧で歴史教科書は歪められ、何人かの大臣が更迭された。わが国にはまるで「正義」がないかのやうな迎合的な愚行が繰返された。並の国だったら内閣が潰れてもをかしくないほどの国威の失墜だったが、それで内閣が交代することもなく、つひには首相が靖国神社に参拝しないのが常態となつてしまつた。総理の靖国神社参拝こそ、国民道徳の根幹をなすものではないのか。かうした先人の歩みをことさらに足蹴にし無視することで今日的な保身に奔る大人の姿が、



少国民の心に暗い影を落さないはずがない。かてて加へて、ここ十余年、小学校での英語学習の広がり、国語の読み書きを相対化してゐる。国語の学習（読み書き）は、あらゆる学力の基礎であり、規範意識醸成の基をなすものである。「小学校英語」は平成二十三年度から必修化されるが、小学生の「心の涵養」にどれだけ資するといふのだらうか。

それでは、右に記したやうな種々の「ひづみ」への批判が民主党に政権をもたらしただらうか。必ずしもさうとは思はれないのである。

自民党に代つて政権に就いた民主党は、党の理念を示す綱領もなく、纏まつた安全保障政策さへ打ち出せない雑居政党である。それをカムフラージュするかのやうに選挙戦では、ひたすら内向きに徹して欲求不満や被害者意識を煽つた。曰く農家への戸別所得補償・子ども手当の支給・高校授業料の實質無償化・高速道路料金の無料化・ガソリン税暫定税率の廃止等々。財源はお構ひなしだった。それは私益追求の利己心に頼つた自民政権とは明らかに異質のものだった。自尊自助・自律自持とは裏腹の自卑的な他者依存の劣情を刺激する響きを伴つてゐた。その典型が政権公約の目玉ともいふべき「月額二万六千円」を一律に所得制限なしで支給するとした「子ども手当」である。それは我が子の養育は親の責任であり義務であると日々汗を流してきた数多の親達の「誇り」に水を掛けるに等しいものだった。問題

とすべきは金額の多寡ではない。一律支給となれば辞退する者はあつてもごく少数となるだらうし、初めは有難いと思つても暫くすれば、身心を腐す。麻薬にも似て貰ふことが当り前になる。もつと多く支給してほしいと願ふやうにもなるだらう。「子ども手当」は財源面とは別に将来金銭であがなふことのできない高いツケとなつて跳ね返つてくるに違ひない。

所得制限なしの「子ども手当」は「育児の社会化」への一里塚であつて社会主義思想によるとの正鵠を射た指摘がある。民主党は「扶養控除と配偶者控除」の廃止も政権公約に謳つてゐたが、「温ぬくき家庭の団欒」を嫉視冷視するが如く、それを税制面から否定しようとするもので、「育児の社会化」と同根であつた。その後政権に就いた民主党は世論の反撥を気にしてか政権公約から外してゐた「夫婦別姓」のための民法改正に意欲を示してゐる（「永住外国人への地方参政権付与」についても全く同じ）が、これも家族制度を壊さうとする社会主義イデオロギーからきたものである（民主党は内に旧社会党書記局からの移籍組スタッフを抱へてゐる）。

ともかくにも動き出した鳩山由紀夫民主党内閣であるが、その思想傾向からして自民党政権による「ひびみ」を匡正するどころか、内側からさらに国を蝕まうとしてゐる！。従つて外交も「外遊はすれども外交はなし」となるのは理の必然である。十月十日、訪中した鳩山首相は「今までややもすると米国に依存しすぎていた。アジアの一員として、アジアをも

つと重視する政策をつくり上げていきたい」（産経紙）などと語つてゐる。大陸沿岸に据ゑられた数多の核ミサイルは台湾だけでなく日本列島をも射程に収めてゐるといふのに……。今、われわれ国民は安全保障に考へ及ばぬ首相を戴くといふ寒心に堪へない状況下にある。しかし、それもこれも総選挙の結果であつてみれば新政権ばかりは責められない。

昨夏、私共は関係者の協力を得て十二年振りに神奈川県厚木市で宿泊研修をもつた。第一回の昭和三十一年八月から数へて五十四回目となる。時あたかも民主党優勢の予測報道が紙面を賑はす選挙戦の真つ最中であつたが、参加者一同はその喧噪から一步離れて「ものを見る眼」を養ふべく励んだ。自国の歴史と文化に根ざしてこそ「世界と日本」が見えてくることを学んだ。学問、人生、祖国の一体的把握に努めた。本冊子はその折の研修内容を収めたものである。行間からも私どもの願ふところをお汲み取りいただければ幸甚である。

最後にあたり、御多用の中をお運び賜り、さらには御講義要旨の掲載をお許しいただいた長谷川三千子先生、ペマ・ギャルポ先生に厚く御礼を申し上げます。

平成二十二年二月十一日

大学教官有志協議会  
国民文化研究会

# 目次

はしがき

## 講義

第一日目（八月二十日）

一人一人が国を支へる柱とならう

.....

（社）国民文化研究会副理事長

今林賢郁

1

『源氏物語』もののはれを知る

..... 昭和音楽大学名誉教授

國武忠彦

23

第二日目（八月二十一日）

民主主義と国体

..... 埼玉大学教養学部教授

長谷川三千子

47

アジアにおける日本の役割

..... 桐蔭横浜大学大学院教授

ペマ・ギャルポ

81

第三日目（八月二十二日）

体験と思想―千秋の人 吉田松陰に学ぶ

.....

福岡県立太宰府高等学校教諭

占部賢志

115

会員発表

「ミュンヘン de 寺子屋」の実施と欧州見聞録

私を支へる言葉、和歌	伊佐ホームズ(株)	小柳雄平	159
(株)寺子屋モデル講師	横畑雄基		141

講話

学問と友情	元富山県立富山工業高等学校教諭	岸本弘	173
-------	-----------------	-----	-----

短歌入門

短歌創作導入講義	東洋紡績(株)	庭本秀一郎	191
----------	---------	-------	-----

創作短歌全体批評

熊本市環境保全局環境事業部東部環境工場長	折田豊生	213
----------------------	------	-----

一年の歩み	若築建設(株)九州支店	池松伸典	229
-------	-------------	------	-----

合宿教室のあらまし			241
-----------	--	--	-----

合宿詠草抄			265
-------	--	--	-----

あとがき



講義

—合宿導入講義—

一人一人が  
国を支へる柱となろう

(社) 国民文化研究会副理事長

今 林 賢 郁



この合宿がめざすもの

演題の意味——二つの論点  
昭和天皇のご聖断

〈資料——終戦の詔書〉



### この合宿がめざすもの

この時間は合宿「導入」講義といふことです。最初はこの点——この合宿がめざすもの——について少しお話します。われわれは二千年以上の歴史を積み重ねてきた国家の、その最先端を共に生きる者同士ですが、「日本人らしい日本人」或は「真つ当な日本人」としてこの世を生き抜くことによつて、その人生が祖先に恥ぢない、又次代の者からは尊敬されるやうなものになれば素晴らしいことだと思ひます。そのためにはどのやうに己の心を定め、生きる姿勢を整へていったらいいのか、その学びと語らひの場がこの合宿です。日本の歴史を事実にして正確に知らう、日本の文化伝統をもつと広く、もつと深く知らう、そのやうなことがこの合宿では取上げられますが、それらを一片の知識として或はひとつの見方を身に付ける、といふやうなことではなくて、それらが一人一人にとって「身にしてみる経験」となるやうな知り方、わかり方をしたい。そのためにも合宿に臨むにあたっては、大学や会社や年齢などの外的差別に囚はれずに、お互ひにひとりの人間として、心をこめて語り心を聞いて聞く。そしてその経験を踏まへた学生、青年たちが、祖国日本を生き活きと心に抱きながら堂々

と生きて行つて欲しい。そのことを祈り願つてこの合宿は半世紀以上にも亘り続けられて来ました。そして今、五十四回目の合宿をスタートしようとしてゐるわけです。

### 演題の意味——二つの論点

さて、演題の「一人一人が国を支へる柱とならう」といふことですが、「国を支へる柱」といふことになれば、国民の生活を守る経済政策や一国の外交や安全保障のあり方、或は国家百年の計である教育制度の考へ方等々いづれも大事な問題が多くあります。しかし今日取上げようとするのはそのやうな、この国をどうするか、といふ大それたことではなくて、一人一人が、この「国を支へる」ことについて、自分の居場所を離れずに考へて見ようといふことです。結論めいたことを最初に言へば二点です。一つ目は「国を支へる」といふ観点から見た場合、われわれの日々の生活について気付いて直さなければならぬことがあるのではないか、といふこと。二つ目は戦後の物の考へ方、感じ方、それは今に至るまでわれわれの思考と心を縛り続けてゐるものですが、その幾重にもかかったヴェールを一枚一枚外していくこと。それは地味で困難を伴ふ作業ではあるけれども、その作業を通じて一人一人が「日



本的なもの」を取り戻すことが出来れば、それは「国を支へる柱」になるのではないか、といふことです。

最初の論点を考へて見ませう。今年は戦後六十四年、昭和も段々と遠くなりますが、この間われわれはいのちを捧げなければならぬやうな危険や事件に巻込まれることもなく平和を謳歌し、また充分過ぎるほどの自由を楽しみ、国民の努力のお陰でほどの豊かさや富も手にしました。そしてこのやうな日々を当然のことだと思ひ、この恵まれた状態がいつまで続くのか、といふことに思ひを巡らすこともないほどに恵まれた日々を過してゐます。そのやうな中で学生諸君は学生といふ立場を、会社勤めの社会人は組織人としての立場でそれぞれに忙しい日々を生きてゐる。その一人一人はまた家庭の父であり母であり子供でもある。そして自分の欲望の達

成や家族の幸せを願ひながらその日々を生きてゐます。その日々は一人の個人としてかけがへのないものであり又大切にしなければならぬものですが、しかし自分とその周辺だけを考へることだけでいいのか、といふ問題は出てきます。われわれが日本人だといふことです。この当り前のことが日々の生活の中では余り自覚されることもなく当り前でもなくなつてゐるのでないでせうか。

われわれは日本人として生まれ、物心ついた頃から日本語を語り、日本語で心を鍛へ、細やかな言葉遣ひの中にお互ひの交流を圖つてきました。又日本の自然は春夏秋冬、毎年違ふことなく巡つてきます。その自然に囲まれながらわれわれは生きてゐますが、それは祖先もさうであつたし子孫たちもそのやうに生きていくことでせう。そのことに改めて気付いて見れば、われわれ一人一人がどんな生き方をしやうとも、その一日一日の生活はこの国の営みの中の一部を担つたものであるし、この世での人生を終れば、帰つていくところは日本以外にはあり得ません。さうだとすればわれわれは自分のことだけでなく、自国の前途や運命について、お互ひに責任を分担しあつて生きて行かうといふ、国民としての自覚がなければならぬはずです。この自覚の感覚が国に対する責任といふものであり、広義の愛国心と言つてもいいでせう。それではその自覚をもつためには何が必要か。この点について福沢諭吉

の言葉——身独立する事——に触れて見ませう。

最初は「学問のすゝめ」——身独立して一国独立する事——からの引用です。「独立の気力なき者は国を思ふこと深切ならず」独立の気概を持たない者に限つて国のことをいい加減に考へる。逆に「深切」に国を思ふ者は「独立の気力ある者」といふことになる。それでは「独立の気力ある者」とはいかなる人格か。「自から物事の是非を弁別して処置を誤ることなき者は、他人の智恵に依らざる独立なり」気まぐれや他人任せや好悪の感情に物事の判断を委ねるのではなく、自らの鍛へられた常識で物事に処し自分の言動に責任を持つと云ふことですか。更に「既に日本国の誰、英国の誰と、其姓名の肩書に国の名あれば、其国に住居し起居眠食自由自在なるの権義あり。既に其権義あれば亦随て其職分なかる可らず」。日本人であれば「其国に住居し起居眠食自由自在」の「権義」（権利）があるが、その権義には同時に「職分」——国民としての義務、責任が伴ふ。「職分なかる可らず」との自覚を促す言葉は勁い。この「職分」の自覚こそが「独立した個人」を生み出す土壤であると云つていい。この国民であればこそ次のやうな福沢の「願ふ所」に応へることも可能となることとせう。「国の独立如何に係る所の事に逢へば、忽ち之に感動して恰も蜂尾の刺蝮に触るゝが如く、心身共に鋭敏ならむことを欲するのみ。」（「文明論之概略——自国の独立を論ず——」）——「蜂尾の刺蝮」とは蜂の針

のことで、国の一大事に遭遇した時には、蜂に刺された時に覚える痛い！といふあの感覚、それは精神の闊達さと云つてもいいが、そのやうな心身の鋭敏さを持つて欲しいと云ふことです。

それではそのやうな「独立した個人」に至る突破口はどこに見出したらいいか。これも大上段に構へることはない、今の日常生活から一步、半歩でもいいから飛出して見ること——合宿への参加もその経験のひとつです。そして飛出したところから自分を眺めて見て、自分に欠けてゐるものがないか、あれば何を取り戻したらいいのか、といふことを発見する。その発見をスタートにして各々研鑽を重ねて、「日本人である自分を自分の言葉で語ることができる」、そのやうな人間になつて欲しいと思ひます。それが実現できればその人は全体に所属しながら「独立した個人」であると言へるし、またそのやうな個人で構成された共同体は「国を支へる柱」となるのだと思ひます。

二つ目の論点——戦後の物の考へ方、感じ方への取組み——に移ります。この問題を考へようとすればどうしても先の戦争と敗北、それに続く占領を抜きにしては語ることは出来ません。占領政策の基本方針は日本が再び米国の脅威とならないやうにすることでした。この方針の

下に打出された歴史観—あの戦争はファシズムと民主主義との戦ひであり、民主主義は善、ファシズムは悪、日本はファシズムの一員として世界制覇をめざした侵略国家であり、世界に申し開きができないことをしてかした犯罪者である。犯罪を為した原因は戦前の封建思想にあった。その日本に断罪を下したのが占領政策であり東京裁判であった—そして六年八ヶ月の占領を経て日本は平和国家或は文化国家として再生を果した……。今も尚われわれの精神を呪縛し続けてゐる考へ方ですが、われわれは我々自身の眼でこの価値観をすべて洗ひ直してみる必要があります。戦争を美化したり、合理化したりするのはない、事実を事実として徹底的に知らなければならぬと云ふことです。その一つの手がかりとして「昭和の青春」ともいふべきものを考へて見たいと思ひます。誰にも青春があるやうに昭和にも青春はありました。その青春の日々をかれらはどのやうに生きたか。さう問ふことはそのまま、「では君ならあの戦時にどう対処したか」といふ命題にわれわれは迫られることになります。

最初に紹介するのは宝辺正久さんの「亡き友を思ふ」といふ一文です。宝辺さんは私どもの大先輩で今年八十七歳、山口県下関でお元気にお過しです。その宝辺さんが今から三十二年前のこの合宿で、慰霊祭を前に登壇されてお話しになったものです。このお話しに出てくる松吉正資まさしさんと宝辺さんは、二十歳前後の数年を共に過して、学問、人生、祖国といふ命

題に全身で取り組んだ心の友であり、また信じ合ふ友でもありました。読んでみます（『日本への回帰』13集）。

：今日の慰霊祭の御祭神の一人として私が心に念ずる故松吉正資君のことを少し申し上げます。松吉君と私は旧制山口高校以来、東大を経て出陣入団から部隊編制で別れるまでの約四年間を一緒に学び行動を共にした仲でありましたが、彼は昭和二十年五月、特攻出撃して沖縄海上に戦死しました。松吉君の遺した歌の中から「友に」と題する連作を読んでみます。

友に

なつかしきふるさとの浦船出してみたてとゆく日近づきにけり  
たづね来る友もなければひとり居てその日を持たむさびしけれども  
また会ふと知られぬ友のみなさけをしみじみおもふこの時にして  
数ならぬわれを上げます友どちのなさけにこたへていさみてゆかむ  
大君の大みめぐみと友の恩おもへばこの身惜しからめやも

昭和十八年の秋、神宮外苑で学徒出陣式が挙行されましたが、彼はこれには参加せずまっすぐ故郷



に帰ったと思ふ。…故郷といふのは、山口県の大島といふ瀬戸内海の島です。秋は、南に向いた山の斜面には蜜柑の熟れてゐる暖い島で、ここで十二月の入団までの一ヶ月位を過したわけです。丁度、満で二十歳の頃でなかつたでせうか。

「なつかしきふるさとの浦」と歌ひ出されて、二首目に「その日を待たむさびしけれども」と続きますがこの「さびしけれども」は、友とも親とも弟妹とも別れて、ひとり行くその日を思つて、そこに思ひが集中して、いのちの沁みゆくやうな淋しさであると同時に、「戦死の覚悟」と別のものでない感情が漲つてゐるやうに思はれます。ここから次々に「友のみなさをしみじみおもふ」とか、「数ならぬわれを上げます友どち」と歌ひついで「大君の大みめぐみと友の恩おもへばこの身惜しからめやも」と歌ひ終つてをります。最後の歌の「大君の大みめぐみ」といふことばには、実に痛切な、あたたかい情感と、日本の国柄の中心に天皇に対する極めて厳しい帰依没入の心持ちが籠つてゐて、松吉君がいのちをこめて歌つてゐるやうに思はれます。これは概念的道義の理解に発するものではない。彼の「友」に向つていづく恩の思ひと「ふるさと」に寄せる懐かしさと、この「大君の大みめぐみ」の実感とが連続してゐることが私達にもよくわかるではありませんか。

……大きく時代は変つた。だが松吉君のやうな、このやうな歌が歌へる青年は今ゐないのかと言へば決してさうではないと思ふ。戦争でなくなつた人と言へば、あなた方にとっては何だか遠い人のや

うに思ふかもしれないが、この歌を読めば、この松吉君が一人ふるさとのわが家に身を寄せて出陣前の数日を、かうして自分の生涯と訣別してゆかうとしてをる。そのひとり居の淋しさと、決死の覚悟から張り溢れる暖い心は、あなた方青年の胸に同じやうに伝はってくる、ちつとも変つてゐない心だと私は思ふ……

この一文を読みながら私は、さうだ、「ちつとも變つてゐない」はずだ、宝辺さんの言葉はそのまま今の若い諸君にも伝はるに違ひないといふ思ひがしきりでした。敗戦の年から三十二年経た昭和五十二年、当時の学生たちに宝辺さんは語りかけられた。それから更に三十二年経た平成二十一年、私も同じやうに諸君に語らうとしてゐます。昭和五十二年当時の学生たちにも、また今の学生諸君にもこの松吉さんの心とその歌を通じてわれわれの心に迫つてくるとすれば、戦前と戦後は断絶などはしてはゐないといふ何よりの証拠ではありませんか。昭和二十年八月十五日を境に日本は變つたといふ思想に抗する証がここにあると申し上げたい。

宝辺さんとの強い絆に結ばれてみた松吉さんの「友情」についても一つ紹介します。松吉さんは昭和十八年の一月末から二月にかけて高瀬伸一といふ友を新潟の弥彦山麓に尋ねて

みます。高瀬さんはそのとき叔母さんのところで病氣療養中でした。その滞在期間中に二人の青年がどんなことを語りあったか。「続いのちささげて―戦中学徒・遺詠遺文抄―」（国文研叢書20）から日記の一部を抄出して見ます。

（二月五日 午頃起床。昨夜の高瀬兄の話忘れず兄弟と題して八首作る。夕方スキ―。明日は去らんと思ひたれば暗くなるまですべる。夜諸国の友らに寄書す。二人とも暫くうたたねして覚めて後床に就く。寝ながら高瀬兄

君と二人語る夕もはやつひに今宵一夜となりけるかも

と口ずさむに自分もこたへてうたふ。口から出づるに任せて互ひに作ること何十首と知れず。思ひ出づるまゝ、記せば

（中略）

別れとは思ひたまふなこの世にてあひし我らのちぎりは深し

いつまでもつきぬ名残りを惜しみつゝ、別れゆくのもますらをなれば

あふれいづる思ひはあまりに多くしてうたはむとすれどうたとはならず

就眠五時近し。〕

日記には八首の歌が掲載されてゐますが、ここでは後半の三首のみを掲げました。「うたたねして覚めて後床に就」いた後、二人は「口から出づるに任せて互ひに作るまかこと何十首と知れず」、「就眠五時近し」といふのです。学問と人生を、そして国家の運命を語り語つたであらう数日間の最後の夜、思ふ存分に歌を詠み合ひ眠る時間も惜しいほどの二人の鼓動が伝はってくるやうです。美しい友情といふほかありません。この時松吉さんは二十一歳、高瀬さんは二十歳、そしてこの二人の青年は二年後に共に戦死、その「遺詠」はかうです。

松吉正資

うつそみはよし碎くともはらからのなさけ忘れじ常世とこよゆくまで

高瀬伸一

荒れ狂ふ海のはたてはますらをのいのちのすてどいさぎよくゆけ

二人の学徒のこのやうな青春を想ふとき、かれらは軍国主義の指導者に騙されて戦地に赴いたと諸君は思ひますか。また指導力もない指導者に死を強制された気の毒な犠牲者などといふ見方に同意できますか。自分を抜きにして他人事のやうにあの戦争を語つてはなりません。いのちを捧げた行為への畏敬と戦死者への共感と共鳴が蘇り、そこに自己を同一化する

ことができれば歴史の実体が見えてくるはずです。このやうな努力を通じて一人一人が自国の歴史を再構築すること、それは必ずや祖国への不信や疑惑の払拭に繋がると信じます。一人一人の努力が「国を支へる柱」になるといふ所以です。

### 昭和天皇の「ご聖断」

残りの時間が少なくなってきました。最後に、戦後はどのやうにして始ったのかについて「昭和天皇の「ご聖断」」に触れておきます。ご存知の通り、先の大戦は昭和天皇の「ご聖断」によつて終結しましたが、昭和二十年八月十四日の御前会議でのご発言は次のやうなものでした。末尾に添付した「終戦の詔書」を読んでいただくにあたり、参考になると思ひ長くなりますが、全文を下村海南『終戦秘史』（講談社学術文庫）から引用します。

外に別段意見の発言がなければ私の考えを述べる。反対論の意見はそれぞれよく聞いたが、私の考えはこの前申したことに変りはない。私は世界の現状と国内の事情とを十分検討した結果、これ以上戦争を続けることは無理だと考える。

国体問題についていろいろ疑義があるとのことであるが、私はこの回答文の文意を通じて、先方は相当好意を持っているものと解釈する。先方の態度に一抹の不安があるというのも一応はもつともだが、私はそう疑いたくない。要は我が国民全体の信念と覚悟の問題であると思うから、この際先方の申入れを受諾してよろしいと考える、どうかみなもそう考えて貰いたい。

さらに陸海軍の將兵にとって武装の解除なり保障占領というようなことはまことに堪え難いことで、その心持は私にはよくわかる。しかし自分はいかになろうとも、万人の生命を助けたい。この上戦争を続けては結局我が邦がまったく焦土となり、万人にこれ以上苦惱を嘗めさせることは私としてじつに忍び難い。祖宗の靈にお応えできない。和平の手段によるとしても、素より先方の遣り方に全幅の信頼を措き難いのは当然であるが、日本がまったく無くなるという結果にくらべて、少しでも種子が残りさえすればさらに復興という光明も考えられる。

私は明治大帝が涙をのんで思いきられたる三国干渉当時の御苦衷をしのび、この際耐え難きを耐え、忍び難きを忍び一致協力将来の回復に立ち直りたいと思う。今日まで戦場に在って陣没し、或は殉職して非命に斃れた者、またその遺族を思うときは悲嘆に耐えぬ次第である。また戦傷を負い戦災をこうむり、家業を失いたる者の生活に至りては私の深く心配する所である。この際私としてなすべきことがあれば何でもいとわれない。国民に呼びかけることがよければ私はいつでもマイクの前にも立つ。一

般国民には今まで何も知らせずにいたのであるから、突然この決定を聞く場合動揺も甚しかろう。陸海軍将兵にはさらに動揺も大きいであろう。この気持をなだめることは相当困難なことであろうが、どうか私の気持をよく理解して陸海軍大臣はともに努力し、よく治まるようにして貰いたい。必要あらば自分が親しく説き論してもかまわない。この際詔書を出す必要もあろうから、政府はさっそくその起案をしてもらいたい。

以上は私の考えである。

かうして翌八月十五日の「玉音放送」となるわけです。「終戦の詔書」にはご発言の内容がほぼ書込まれてありますが、「自分はいかになろうとも、万人の生命を助けたい」といふお心は直接的には触れられてをりません。終戦時の次のお歌はそのお心をお詠みになったものです。「詔書」と併せ読めば昭和天皇のお心がいよいよ胸に迫ってきて言葉もあります。

そのお歌を示します。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも  
身はいかになるともいくさとめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らむといばら道すすみゆくともいくさとめけり

海の外の陸くわがに小島にのこる民の上安かれとただいのるなり

この御製の内、昭和二十一の年初に発表されたのは四首目のみでした。前の三首については戦後二十三経った昭和四十三年、木下道雄氏の『宮中見聞録』によってはじめてこのやうなお歌があったことが明らかになりました。このお歌に始めて触れた時の衝撃は今でも忘れることができせん。そして、この三首のお歌を「宣伝的にならぬ方法」で昭和二十一年のはじめに「世上にもらすこと」の「御許可を得」てゐたことがわかつたのはそれから二十一年後の平成元年、同氏の『側近日誌』でした。何故この三首が昭和二十一年に公表されなかつたのか。恐らく占領軍の圧力があつたのでせう。しかし昭和天皇は終戦時にこのやうなお歌をお詠みになつてゐたのです。昭和の民も国家も、この大御心によって救はれたのです。そして翌年、「新日本建設の詔書」で日本の進むべき道をお示しになり、国民を慰め励ますために全国各地をご巡幸になりました。そのお姿を見て国民は戦後の復興に奮ひ立つたのです。戦後はこのやうにして始つたことをわれわれは決して忘れてはなりません。



「一人一人が国を支へる柱となろう」といふタイトルでお話ししました。合宿をスタートするにあたり何かの手がかりになれば有難く思ひます。

【資料】

終戦の詔書（昭和二十年八月十四日）

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告  
グ

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑々帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カザル所曩ニ米英

二國ニ宣戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スガ

如キハ固ヨリ朕ガ志ニアラズ然ルニ交戰已ニ四歳ヲ閱シ朕ガ陸海將兵ノ勇戰朕ガ百僚有司ノ勵精朕ガ一億

衆庶ノ奉公各々最善ヲ盡セルニ拘ラズ戰局必ズシモ好轉セズ世界ノ大勢亦我ニ利アラズ加之敵ハ新ニ殘虐

ナル爆彈ヲ使用シテ頻リニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及ブ所眞ニ測ルベカラザルニ至ル而モ尚交戰ヲ繼續セムカ

終ニ我ガ民族ノ滅亡ヲ招來スルノミナラズ延テ人類ノ文明ヲモ破却スベシ斯ノ如クムバ朕何ヲ以テカ億兆

ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕ガ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應ゼシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セザルヲ得ズ帝國臣民ニシテ戰陣ニ

死シ職域ニ殉ジ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セバ五内爲ニ裂ク且戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失

ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クベキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラズ  
爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レドモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ以テ萬世ノ爲ニ  
太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫  
ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ亂リ爲ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フガ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜  
シク舉國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信ジ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤  
クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レザラムコトヲ期スベシ爾臣民其レ克ク朕ガ意  
ヲ體セヨ

【語句の意味】

大勢（世の中の形勢）・鑑ミ（考へる）・時局（時世のありさま）・康寧（やすらか）・萬邦（あらゆる国）・  
皇祖祖宗（天照大神に始まるご歴代の天皇のご祖先）・遺範（先人から遺された手本）・拳々（うやうやし  
くつつしむ）・庶幾スル（こひ願ふ）・四歳（四年）・閱シ（経過する）・百僚有司（多くの官僚）・勵精（精  
を出してはげむ）・衆庶（国民）・無辜（何の罪もない人）・招來（呼び寄せる）・破却（やぶる、こはす）・  
赤子（国民）・盟邦（同盟国）・非命（思ひがけない災害で死ぬこと）・五内（五臓、全身）・厚生（生活を

ゆたかにする)・軫念スル(心を痛める)・衷情(まごころ)・時運(時世の動き)・萬世(よろづよ、永遠)・  
太平(世の中が穏やかに治っていること)・赤誠(まごころ)・信倚(信じたのむ)・事端ヲ滋クシ(事件を  
たくさん起す)・排擠(排斥)・篤ク(てあつい、固い)・志操(かたく守つて変へない志)・鞏ク(かたい、  
堅固)・精華(すぐれたところ)・発揚(さかんにする)

講義

『源氏物語』  
もののはれを知る

昭和音楽大学名誉教授

國 武 忠 彦



本居宣長

人の心とは

もののあはれを知る

柏木の悲劇

あはれ

数学者の藤原正彦先生が、「祖国とは国語」と題する講演のなかで、「もののはれ」といふ言葉を口にしたので、びっくりしました。

国語は、すべての基礎である。情緒力を育てるのに最も重要だ。論理も重要だが、論理の出発点を誤りなく瞬時に選ぶのは情緒力である。情緒とは、喜び、悲しみ、怒りなどの感情で、情緒力とは、ものに対する感動、「もののはれ」である。他人に対する敏感さ、かはいさうだと思つて同情する惻隱そくいんの情、卑怯を憎む心を、日本人は昔からもつてゐた。このすばらしい情緒力は、読書から得るのですと話されたのです。

### 本居宣長

『源氏物語』は、「もののはれ」を描いたものだといつたのは本居宣長です。本居宣長は、享保十五年（一七三〇）、伊勢松坂の生れで、家は木綿商人でした。母は、医師になることをすすめて、二十三歳のとき京都に上京。医者修業としての漢籍・医書はもとより、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『古今集』『源氏物語』などの古典・注釈書、契沖・荻生徂徠の書物などを、幅広く熱心に学びました。二十八歳のとき松坂に帰郷すると、ただちに『源氏物語』

の講義を始め、晩年に至るまで続けてゐます。いかにこの書を愛したかがわかります。本居宣長については、高校「日本史」の教科書には次のやうに記されてゐます。

『古事記』を綿密に実証的に研究して『古事記伝』を著述し、人間生活のもとになるのは自然の感情「真心」であり、真心を失わなければ神の意志になつた生活ができると説き、中国の国風や文化に心酔する「漢心」をすて、日本古来の精神に帰ることを主張した。儒学が古くからの教理をぬげることができなかつたのに対して、国学は新しい学問であるだけに、自由な研究も行われ、批判精神も強かつた。(高校「日本史」山川出版社)

宣長は、「真心」とは「生まれつきたるまゝの心」で、「さかしら」のない、利口さうにかしこぶることのない、純粹に受け入れる心であるといふ。また、学問をするには「まづ漢心をきよく除き去るべし」、理屈をつけないで「やすらかにみる」、あくまで事実にしたがつて明らかにしていく態度をとりました。

宣長が登場するまでは、『源氏物語』は誤解されてきました。儒学の立場からは勸善懲惡的に批評され、恋愛や好色を教へる淫らな書である。仏教の立場からは、現実離れのたはごと





あはれを  
国武忠義

を飾り言葉で書いた、「狂言綺語」を書いたために紫式部は地獄に堕ちたと批判された。宣長は、道徳的な是非善悪で見てもいけない。「いましめの心をもつて見る事なかれ」と儒仏の立場から離れて自由に接しなければならぬとして、「ものあはれ」を知らしむる以外に意味はないといった。「ものあはれ」を知るとは、何か。宣長の考へるところに従って見ていきたいと思ひます。

### 人の心とは

宣長は、人の心について、次のやうに述べてゐます。

「すべて人の心といふものは、からぶみに書きた

ること、一トかたに、つきりなる物にもあらず、深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだくだしく、め、しく、みだれあひて、さだまりがたく、さまざまのくまおほかる物なるを、此の物語には、さるくだくだしきくまぐままで、のこるかたなく、いとよくはしく、こまかに書きあらはしたる」(『源氏物語玉の小櫛』)

人の心は、漢文の書物に書いてあるやうに、一方的に善だ悪だと簡単に割り切れるものではない。宣長は、心を直観的に共感的に捉へてゐる。外から分析的に理的に考察するだけではなく、直接心の中に入り込み、心と一つになって心を直接に感じてゐます。およそ人の心の姿はこのやうなものなのか。私は、この文章に触れたとき、なんともいひやうのない感銘をうけました。ほっとした懐かしい親しみといふか、在りのままの飾らない、微妙な心の諸相を感じました。人の心を知ることが、「もののおはれ」を知ることなのです。「め、しく」とは、むしろ感性が鋭く、感受性が柔らかで豊かであることを内に秘めた言葉だと思ひます。

『源氏物語』は、このやうな人の心の「くだくだしきくまぐままで」、心に染み込、入り込み隠れてゐる隈々まで、残すことなく詳細に書いたものであるから、「やまと、もろこし、いに

しへ、今、ゆくさきにも、たぐふべきふみはあらじとおほゆる」と賞賛する。宣長は、この物語を読むと、「紫式部にあひて、まのあたりかの人の思へる心ばへを語るを、くはしく聞くにひとしく」といふ。

「源氏の君を始めとしてその外のよき人とても、みなその心ばへ女童のごとくにて、何事にも心弱く未練にして、男らしくきつとしたることはなく、ただ物はかなくしどけなく愚かなること多し」「人の実の情といふものは、女童のごとく未練に愚かなるものなり。男らしくきつとして賢きは、実の情にはあらず。それはうはべをつくろひ飾りたるものなり。実の心をさぐりてみれば、いかほど賢き人もみな女童に変わるることなし」（『紫文要領』）

これも私の好きな文章です。私たちの心の深い内面の風景のやうな気がするのです。不思議な風景で、神秘的な心の深層の姿です。漢文では、ただちに道徳的に善だ悪だときびしく判断し、理屈を持ち出し、自分こそ賢いのだといふが、これは偽善的です。人の「実の情」は、「未練に愚かなるものなり」。漢文では、これを女々しいもの、恥かしいものとして包み隠さうとするが、偽善的です。「源氏物語」には、道徳的な是非善悪の判断から、自由に接し

なければならぬのです。

「この歌・物語は、人の実の心の底をあらはに書きあらはして、物の哀れを見せたるものなり。人情のこまやかなところをくまなくはしく書きあらはせること、歌・物語にしくはなし」ただ自然と思ふところの実の情をこまかに書きあらはして、人の情はかくのごときものぞといふことを見せたる物なり。それを見て人の実の情を知るを、物の哀れを知るといふなり」(「紫文要領」)

「実の心」を知ることが、「物の哀れを知る」ことです。それは如何なる理由によるのであらうか。

### もののはれを知る

「おほよそこの物語五十四帖は、物のはれをしるといふ一言に尽きぬべし」世の中にある事とありて、目に見るにつけ、耳にきくにつけ、身にふる、につけて、其

よろづの事を、心にあぢはへて、そのよろづの事の心を、わが心にわきまへしる、是事の心をしる也、物の心をしる也、物の哀をしる也、其中にも、猶くはしくわけていはば、わきまへしる所は、物の心、事の心をしるといふもの也、わきまへしりて、其しなにしたがひて、感ずる所が、物のあはれ也」(『紫文要領』)

宣長はいふ。美しい桜が咲いてゐるのを見て、あゝ美しい花だなあと見るのは物の心を知ることである。美しい花といふことをわきまへ知りて、美しい花と思ふ。これが「物のあはれ也」といふ。

肝要なのは、「心にあぢはへて」「わきまへしる」といふこと。単に、知るだけではだめなのだ。心に味はひ、感じなければならぬ。「わきまへしる」とは、深く理解する。おしはかり、想像する。理解するだけではだめだ。想像力を凝らし、味ははれなければ、感じられなければならぬ。それでも足りぬ。生きる道につながらなければならぬ。これは、心の働きのすべてを駆使するといふことでせう。評論家の小林秀雄は、「(宣長は)知ると感ずるとが同じであるやうな、全的な認識が説きたいのである」といつてゐる。情と知が一体となった認識。それは、果して可能なのか。私たちの心が、日常生活のなかで意識し、体験してゐる道

を、さらに意識し自覺的に豊かにしていくことなのです。

「たとへば、うれしかるべき事にあひてうれしく思ふは、そのうれしかるべき事の心をわきまへ知るゆゑにうれしきなり。また悲しかるべき事にあひて悲しく思ふは、その悲しかるべき事の心をわきまへ知るゆゑに悲しきなり。されば事にふれて、そのうれしく悲しき事の心をわきまへ知るを、物のあはれを知るといふなり」（石上私淑言）

漢文は、悲しむことは、愚かな心の迷ひと考へるので、これを恥ぢ、強いて迷はぬ悲しまぬふりをする。物事をありのままに「わきまへ知る」には、まづ共感することが前提となつてゐる。子どものやうに心を開いて迎へられる。これは単なる批判精神の放棄ではない、大事なことなのだ。さらに大事なことは、「心にあぢはへて」「わきまへ知る」ことである。これは、まず批判的に吟味する儒教的思考法とは遠い世界である。儒教的思考法に限らぬ、現代の学問の思考法にも窺へることである。新解釈に走り出すのではなく、「心にあぢはへて」「わきまへ知る」。これは、無限の困難を意味してゐます。

「楫かじとり、もの、あはれも知らで、おのれし酒をくらひつれば、早く去なむとて、『潮満ちぬ。風も吹きぬべし』と騒げば、船に乗りなむとす」(『土佐日記』)

紀貫之が、四年間の土佐の国守の任務を終へて、都へ向けて船出しようとする時、友達は酒を持ってきて酌み交はし、歌も交換し合つて、別れを惜しむ。しかし、船頭たちは自分だけは酒を飲んでしまったので、「潮も満ちてきました。風も吹いてきました。さあ、出かけませう」と騒ぐ。これは、船頭たちが、「ものあはれ」を解さない例でせう。「もの、あはれを知る」といふ言葉が、すでに『源氏物語』の創作以前に在つたことがわかります。

「風の音、虫の音おとにつけて、もののみ悲しう思さるるに、弘徽殿こゑでんには、久しく上の御局うへのかつぱねにも参上まゐりのぼりたまはず、月のおもしろきに、夜更よふかくるまで遊びをぞしたまふなる。いとすさまじうものしと聞こしめす。このごろの御気色みけしきを見たてまつる上人うへびと、女房などは、かたはらいたしと聞きたり。いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ御方にて、事にもあらず思し消ちてもてなしたまふなるべし」(桐壺)

(風の音、虫の音を聞いても、帝は悲しく思はれてゐるのに、弘徽殿の女御は、久しく帝のお側にも参

上なさらず、月が美しいとて、夜ふくるまで管弦の遊びをなされた。帝は、このことを不快に嫌に思はれる。このごろの帝のご様子をご覧になる殿上人や女房などは、弘徽殿の振舞ひをいたたまれない思ひで聞いてゐた。弘徽殿は、たいへん気が強く角かどのあるご性格の方で、帝のお嘆きなど気にもかけないでいらつしやる。

桐壺帝の寵愛を、一身に集めた桐壺の更衣が逝去した。帝は、嘆き悲しんでゐる。「源氏物語」「桐壺」の帖である。ここで、宣長は、次のやうにいつてゐる。

悲しきときは、見る物聞く物がみな悲しきなり。風の音、虫の音を聞いても、物の哀れを知る人が聞けば、悲しい時は悲しくきこゆるなり。

一途に悲しいと帝は思つてゐる折りしも、心ある人なら月をおもしろいと見るであらうか。まして管弦などに興じたりするであらうか。弘徽殿の女御は桐壺の更衣に帝の寵愛を奪はれたことを恨んでゐるので、更衣の死を喜んでゐる。これは、物のあはれを知らぬ人で、悪しき人である。

哲学者の和辻哲郎は、次のやうにいふ。

彼女として喜びあるいは悲しみの心を持たぬ人ではない。彼女が帝の悲しみに同情しないの



は、彼女の競争者の死にもとづく故である。帝が悲しんでゐることに嫉妬するのである。嫉妬の故に心を硬くしてゐる。この感情を克服した心の広い、同情の心がもののはれを知る心なのである。

おほよそ「もののはれ」を理解したところで、こんどは「源氏物語」「柏木」の帖を中心にお話ししたいと思います。

### 柏木の悲劇

朱雀院は、出家を望むが、心残りはまだ十三歳の娘女三の宮の将来のことだった。頼りになる男に結婚させたいが、候補者として、夕霧や柏木なども考へられたが、思案の末に源氏に決めた。源氏は、三十九歳で准太政天皇である。断りきれずに結婚したが、その宮の幼さに失望する。幾度も結婚を申し出てゐた柏木は、その後も想ひは消えませんが。

春に源氏の屋敷で蹴鞠の会があり、二十五歳の柏木も参加した。たまたま子猫が御簾をめくり上げた。そのとき、そこに立ってゐた小柄で可憐な宮の姿を見て、ますます恋の気持ち

は燃え上がった。

その後、柏木は三十一歳のとき中納言に昇進し、女三の宮の異腹の姉にあたる女二の宮と結婚したが、女三の宮への想ひは増すばかりで断ち切れません。かねてから小侍従に手引きを頼んでゐたが、その機会がやってきた。宮は眠つてゐる。ふと気づくと男がゐる。宮は、気は動転するし、柏木は自制心を失ひ想ひを遂げてしまふ。その後、恐ろしい思ひで逢瀬を重ね、宮は、柏木の子を懐妊。柏木の宮にあてた恋文が源氏に発見され、柏木と宮は恐ろしさにおびえる。三人三様の苦悩は深まるばかりです。柏木は、試楽の夜に源氏に会ひ、皮肉な言葉に打撃をうけて、重い病に臥します。

六条院にも、いと口惜しきわざなりと思しおどろきて、御とぶらひに、たびたび、ねむごろに父大臣も聞こえたまふ（若菜下）

（源氏は、柏木の病氣を大変残念だと思ひ、お見舞ひに本人にはもちろん、柏木の父内大臣にもお見舞ひを申し上げる。）

源氏の苦悩もひとしほである。にもかかはらず、柏木を見舞つてゐる。見過しさうなこの

箇所、宣長はいふ。これは、柏木のわづらひ給ふを、このやうに源氏が残念に思はれてゐる。柏木に対する源氏の配慮である、と。「もののあはれ」を知る「よきひと」であるといふことでせう。

さて、柏木の病は回復せず、死を覚悟する。女三の宮に手紙を書く。

柏木「今は限りになりにてはべるありさまは、おのづから聞こしめすやうもはべらんを、いかなりぬるとだに御耳とどめさせたまはぬも、ことわりなれど、いとうくもはべるかな」など聞こゆるに、いみじうわななけば、思ふこともみな書きさして、

いまはとて燃えむ煙もむすほほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ

「あはれとだにのたまはせよ。心のどめて、人やりならぬ闇にまどはむ道の光にもしはべらむ」と聞こえたまふ（柏木）

（「いよいよ死も避けがたいことになりましたことは、自然にお耳になさっていらつしやいませうが、とうなさつてゐるのだらうとさへも、お氣にとどめなさらないのはわかりますが、とても辛くてなりません」と申し上げるに、手はわなわなとふるへ、思ふことも書き続けられず、

「もうこれが最後と思ひはくすぶり、あなたをあきらめきれない思ひの火は、この世に残ることとせう。

かはいさうとだけでも仰つて下さい。その言葉で私は心を静め、自ら闇路の光にしたいと思ひます」と申し上げた。

「あはれとだにのたまはせよ」といふ言葉の哀切さ。一言でもいいから、「かはいさう」とおっしゃつて下さい、とお願ひする。男の悲しい嘆きである。人は、これをめめしいと思ふかもしれない。しかし、柏木は、自分でもわからないままに、どうしようもなく、逃れられない心の内面に陥つてゐる。女三の宮の苦しきも、深刻である。苦しい思ひに耐へ抜いてゐる。「あはれ」といふ、一言がかけられない。かけられる状況ではないのである。

思ひ悩む女三の宮は、ついに短い手紙を書きました。

紙燭しきやく召して御返り見たまへば、御手ごてもなほいとほかなげに、をかききほどに書いたまひて、女三の宮「心苦しう聞きながら、いかでかは。ただ推おしはかり。残らむ、とあるは、立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだるる煙けぶりくらべに後おくるべうやは」とばかりあるを、あはれにかたじけなしと思ふ。

柏木「いでや、この煙けぶりばかりこそはこの世の思ひ出いでならめ。はかなくもありけるかな」と、いとど泣きまさりたまひて、御返り、臥ふしながらうち休みつつ書いたまふ。言ことの葉はの

つづきもなう、あやしき鳥の跡のやうにて、

行く方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち離れじ

（柏木は、明かりをお取りになつて宮のご返事をご覧になると、ご筆跡もまことに頼りなく、きれいに  
お書きになつて、「おいたはしく存じてをりましたが、どうお見舞ひ申せばよいのか。ただお察しするば  
かりで。お歌に思ひのなほや残らむとありましたが、私もあなたの煙と一緒に消えてしまひたい。私の  
物思ひに乱れる煙は、あなたに劣ることはないでせう。あなたの死に私は遅れることはないでせう」  
と書かれてゐるのを見て、悲しくもつたないことと思ふ。宮の「煙くらべに」といふ言葉だけが、こ  
の世の思ひ出であらう。はかないものであつたなあ。柏木は、はげしくお泣きになつて、宮への返事を  
臥しながら休みつつお書きになる。言葉の続きもあやしく、鳥の足跡のやうにおぼつかなく、  
行くへも知れない空の煙となつても私はあなたの側を立ちはなれることはありません。）

この日の夕方から、女三の宮は産気づき、翌朝男の子を出産した。源氏は、不義の子をも  
たねばならないことの運命に悩む。宮は、源氏が冷淡であることを感じ、父の朱雀院に出家  
を願ふ。源氏は反対するが、朱雀院は出家させる。重態の柏木は、出産や出家のことを聞き、  
泡の消えるやうに静かに亡くなつた。

親たちの、子だにあれかしと泣いたまふらむにもえ見せず、人知れずはかなき形見ばかりをとどめおきて、さばかり思ひあがりおよすけたりし身を、心もて失ひつるよ、とあはれに惜しければ、めざましと思ふ心もひき返し、うち泣かれたまひぬ。

（源氏は、柏木の両親がせめて子だけでも生れてゐたらと泣いてをられるだらうに、お見せすることもできなくて、人知れず実際はこの子が柏木の形見なのだが、この世に残して、あれほど氣位高くすぐれた人でありながら、自ら身を滅ぼしてしまつたものよ、とあはれに惜しまれて、けしからぬと思ふ心もひるがへして泣かれてしまふ。）

宣長は、「心もて身を失ふをば、物の哀れ知らぬ人はかえつて憎むことだが、（妻に不義をされた源氏が）かへりていよいよ哀れに召す御心、物の哀れを知るゆゑなり。めざましと思ふ心もひき返し、うち泣かれ給ふといへる、よくよく味ひて、物の哀れを知るべし」（『紫文要領』）といふ。

源氏は、柏木の死を深く惜しんでゐる。柏木の不義の行為を賞するのではない。「身をいたづらになす（死にいたる）ほどの物思ひの深き心のほどをあはれぶなり」といふ。このやうに受けとめる源氏は、心と行為がよくできてゐる人、物の哀れをよく知つてゐる人なのである。

普通だったら、この源氏の態度は、愚か者といふべきだが、おのれの恨みや怒りをさしおいて、物の哀れを先にし、源氏も柏木もよき人と描かれてゐる。

高きも下れるも、惜しみあたらしがらぬはなきも、むべむべしき方をばさるものにて、あやしう情をたてたる人にぞものしたまひければ、さしもあるまじき公人、女房などの年古めきたるともさへ、恋ひ悲しびきこゆ。まして、上には、御遊びなどのをりごとにも、まづ思し出でてなむ偲ばせたまひける。「あはれ、衛門督」といふ言ぐさ、何ごとにつけても言はぬ人なし。六条院には、まして、あはれと思し出づること、月日にそへて多かり。

(柏木の死は、身分の高きも低き人も、惜しみ残念がらぬ者はゐないが、すばらしい才幹はもとより、不思議なほど情け深いお方でいらつしやつたから、さほどでもない役人や、女房などの年老いた者などさへも、恋ひ慕ひ悲しみにくれてゐる。まして、帝は管弦のお遊びなどの折ごとにも、まず思ひ出しお偲びになるのであった。「あはれ、衛門督」(柏木のこと)といふ言葉を、何ごとにつけても言はない人はゐない。源氏には、まして、しみじみとあはれに思ひ出されること、月日の経つにつれて多くなつた。)

宣長は、次のやうにいふ。

そもそもこの柏木は、不義な振舞ひをし、そのため身を滅ぼしたのだが、これはどんなに善い人であらうと、世の常識をもってすれば、なんらあはれむべきことではないはずだ。これを、このやうにことにははれ深いさまに書きなし、世人に惜しまれ、源氏さへこれを惜しみ、あはれと思つてゐるやうにくり返しいつてゐるのは、恋の道に物のあはれの深く、また、善き人のあはれを知るゆゑんを深刻に述べたものである。とにかく物語の真髓は物のあはれにあることを知らねばならぬと。

### あはれ

宣長は、「物のあはれ」といふ言葉にどんな思ひを込めたのか。まづ、「物のあはれ」の物とは何か。

「物といふは、言いふを物いふ、かたるを物語、又、物もうで、物いみ、などいふたぐひの物にて、ひろくいふときに、添そふことばなり」といふ。

それでは、「あはれ」とは何か。

「あはれといふはもと、見るものきく物ふる、事に、心の感じ出る、嘆息なげきの聲にて、今の



俗言よことばにも、あ、といひ、はれといふ是也、たとへば月花を見て感じて、あ、見ごとな花ぢや、はれよい月かななどいふ、あはれといふは、このあ、とはれとの重なりたる物にて、漢文に嗚呼などあるもじを、あ、とよむもこれ也」〔源氏物語玉の小櫛〕

美しい花を見て、あ、美しい花だなあ、と思ふとき、そのものと心が一緒になつてゐる。すべて、見るもの聞くもの、事にふれて心が「感じ出る」とき、私の心はそのものと共感し合つてゐる。あ、とため息をつく。「嘆息なげきの声」にて、心に深く感じる。しみじみと感じる。感情とも、感歎のことばともいへるもの。「あはれ」とは、深く心に感ずることばなのである。歌の発生もここにある。宣長は、「ものあはれ」から歌は生まれてくる、といつてゐる。「あはれ」に堪へられないときは、「あ、悲しいよ」と声を長くして、言葉は自然に長く延びて、あや（いひまはし・工夫）が生まれる。これが歌である。ひたすら悲しい悲しいと悲しきの忍びがたく堪へ難いときは、自然にほどよくあやがあつて、その声は長くうたふのに似てゐる。これが歌であるといふ。

「阿波禮アハレといふ言葉は、さまざまいひかたはかはりたれ共、其意は、みな同じ事にて、見

る物、きく事、なすわざにふれて、情ココロの深く感ずることをいふ也。俗には、たゞ悲哀ヒタイをのみ、あはれと心得たれ共、さにあらず、すべてうれし共、おかし共、たのし共、かなしとも、こひし共、情ココロに感ずる事は、みな阿波禮也アハレ」(「石上私淑言」)

私たちの心は、動いてゐる。見て、聞いて、ふれて、普段に変化し、停止することがない。あはれとは、情ココロの深く感ずることばである。うれしとも、をかしとも、あはれと情ココロが深く感うごけば、それは、ものあはれを知ることである。そのあはれなる趣おもひきを心にわきまへて知るからである。しかし、なぜ、あはれは悲哀をのみ意味するやうになつたのか。

「人の情ココロのさまざまに感ずる中に、うれしきことおもしろき事などには、感ずること深からず、たゞかなしき事うきこと、恋しき事など、すべて心に思ふにかなはぬすぢには、感ずることよなく深きわざなるが故に、しか深き方をとりわけても、あはれといへるなり、俗に悲哀をのみいふも、その心ばへ也」(「源氏物語玉の小櫛」)

宣長は、「あはれ」は、本来悲哀の意味ばかりではなかつた、といふ。うれしいこと、おも

しろいこと、たのしいことにも使つてゐた。しかしそれが後世、悲哀の意味に使はれるやうになつたのは何故か。それは、嬉しい楽しい面白いことには、感ずること、感動が深くないからだ。それに比べて、悲しいこと憂きこと恋しいことなど、「思ふにかなはぬすぢ」には、感ずることが甚だしく深い。そこで、深い方をとりわけ「あはれ」と言ひ出したのだ。

私たちの経験で、うまく事が運ぶときはいいが、いったん行き詰まると、どうしようもなく思ふときがある。もがき苦しんでも解決の道が見出せない。自力で解決できない。ただ、わが身を、わが心を思ふばかりである。心が心に向き合つて、嘆き悲しむ。助けてくれ、と叫びたくなる。「あはれ」とは、「心の感じ出る、嘆息の声」であつた。

「もののあはれ」を知るとは何か。柏木の恋を選んでお話ししましたが、宣長は、つぎのやうにいつてゐます。

「人情に深くかかること、好色(恋愛)にまさるはなし。さればその筋につきては人の深く感じて、物の哀れを知ること何よりもまされり。」「この好色の筋ならでは、人情の深くこまやかなること、物の哀れの忍びがたく(閉ぢ込めにくく)ねんごろなる(こまやかで秘かな)

ところのくはしき意味は、書き出だしがたし」その好色の中にも、万よろこずぐれてわが心になふ人には、ことに思ひの深くかかるものなり。また逢ひがたく、人のゆるさぬ（世間では許されぬ）ことの、わりなき（道理に合わぬ）仲は、ことに深く思ひ入りて哀れの深きものなり」（『紫文要領』）

柏木の恋は、不義の恋でした。「逢ひがたく、人のゆるさぬことの、わりなき仲」の恋でした。それだけに、思ひは深く、「あはれ」も深いものでした。しかし、「忍びがたく」、閉ぢ込めることのできない感情は、恋だけではありません。宣長が、世態人情で体験する「ものなあはれ」に込めた思ひは、広くて深いのです。一概にはわかりにくい、大事な意味が窺へます。含みのある言葉なのです。私たちに、何とか理解させようと説明するが、一言では説明できず、これだ、あれだと繰り返し説明を重ねても満足できないやうです。私は、「ものあはれ」とは何か、「ものあはれ」を知るとは何か、宣長がこだはる魅力について、これからも考へてみなければならぬものが多いと思つてゐます。

講義

民主主義と国体

埼玉大学教養学部教授

長谷川 三千子



はじめに

五箇條の御誓文と民主主義

初の「主権」論、フランスでの「君主主権」と「国家主権」

フランス革命時の「国民主権」

アメリカ革命によるアメリカ建国

イギリスの政治の歴史―建国から権利章典まで―

試練をくぐり抜けて来た英知「古来の法」

民主主義の通弊「新しい権利・人権の要求」

「我が国の国体」流の民主主義の自覚とその発信を

はじめに

今、選挙の真つ最中ですからけれども、世の中では、もう民主党が政権をとるやうな話をしてゐる。民主党といふのは文字通り民主主義の党です。実は、自由民主党も同じ民主主義を標榜してゐる党です。しかし、両者を比べてみますと、明らかに民主党の方が、「民主主義の原理主義」と言つてもいいやうな民主主義への傾きを持つてゐる。さういふ党が次の選挙で勝ちさうな勢ひになつてゐる。といふことは、これから四年間、多分、皆さんは、民主主義の原理主義とも言ふべきものに晒されることになるだらうと思ひます。さういふ時に、民主主義といふものを、肚の底できちんと知つてゐるといふことが、非常に大事になるのではないかといふ気がします。

題としては「民主主義」と「国体」と二つ並べてみたのですが、話の本筋としては、「本当は怖い民主主義」といふ、そんな感じですが、実は、民主主義といふものと、我が国の伝統的な政治道徳思想としての国体とは、非常に似てゐるんです。民主主義の厄介なところは、そのやうな真つ当な政治といふ顔を一面では持つてゐるんですが、真つ当に見えるその顔を一

皮むいてみると、実は、その底には色々な危険な思想が蠢いてゐる。民主主義を奉じてゐる人達、あるいはおそらく民主党の人達も、その素顔をよく知らないで民主主義はいいものだと言つてゐる人が多い。その「民主主義」といふものの素顔を、今日は皆さんと眺めてみようと思ひます。

### 五箇條の御誓文と民主主義

皆さん、民主主義とは何なのかと尋ねられた時に、真つ先に思ひ浮かべるのは何でせうか。おそらく、あの有名なリンカーンのゲティスバーグでの演説のしめくくりの言葉ではないかと思ひます。“Government of the People, by the People, for the People”（つまり、「国民の国民による国民のための政治」と普通訳されてゐます。内容の意味を取つて言へば、国民自身が自分達で自分達を治める自治の政治といふことと、それが国民のためになる政治だといふ、さういふ意味合ひなんですが、いづれにしても「国民の国民による国民のための政治」といふのは、民主主義の非常に分り易い穏かな顔として我々によく知られてゐます。そしてこれ自体は、我が国の伝統的な政治道德の思想と非常に近いんです。





今日は、我が国の伝統的な政治思想といふものが簡潔に分り易くまとめられた一例として、「昭和二十一年の年頭の詔書」に掲げられた「五箇條の御誓文」のプリントを、資料として用意してみました。この五箇條の御誓文をリンカーンの「国民の国民による国民のための政治」といふ民主主義のスローガンと重ね合はせて見てみますと、非常に似てゐるんです。漢文調の堅苦しい文字の連なりなので分りにくいと思はれるかもしれませんが、読み上げてみると案外と分り易い文章です。読み上げてみます。

- 一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
- 一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
- 一、官武一途庶民ニ至ル迄 各 其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
- 一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

一、智識ちしきヲ世界せかいニ求もとメ大ニ皇基おうきヲ振起しんきスヘシ

「明治天皇、明治ノ初国是はじめトシテ五箇條ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ」と言はれてゐるやうに、鳥羽伏見の戦ひ直後の動乱の真つ最中に、これから自分達はかういふ近代国家を創つていくと言つて掲げたのが、この五箇條の御誓文です。出来上がった正文は、明治天皇が天地神明に誓つて下された文章なんですが、これを初めて起草したのは、三岡八郎みつせが（後の由利公正きみまさ）といふ福井藩士、言つてみれば、地方政治の現場で汗水たらして働いてきた地方官吏です。政府の中央の人達にも、これはいいぢやないかといふことになって、少し文章に手を入れて、このやうな形で明治天皇が天地神明に誓はれることになったものです。つまり、明治日本が正に「上下心ヲ一ニシテ」、上も下も全ての階層のコンセンサスを得て発したものの、これが五箇條の御誓文なんです。

この第一條に「廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ」といふことが謳はれてゐます。つまり、誰か一人偉い人が勝手に独断独裁で政治を行ふのではなくて、広く會議を興して皆の考へを集めて、そして、国にとって一番いい事を決めて行かう、「萬機公論ニ決スヘシ」といふのは、正にさういふことです。全てのことに関して、自分の私利私害を混へず、公の議論をしていかう、これが第一條の文意です。リンカーンの言つた「国民による国民の政治」を具

体的な形に表はしてみれば、正にかういふ文章になると言へませう。

第二條では、「上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ」といふ言ひ方をしてゐます。これは、「萬機公論ニ決スヘシ」の内側をさらに詳しく言つてゐるとも言へる。つまり、上と下が分離し対立して両方がそつぽを向いてゐるやうな状態では、国のために本当に良い議論といふのは出来ませんよね。上も下も心一つにして、日本が進むべき道はどれかを本当に真剣に討論する。「經綸」といふのは、もともと「經」も「綸」も政治を表はす言葉です。上も下も心一つにして政治を行つていかうといふことになります。「國民の國民による政治」の、さらにいっそう具体的な表現といつてもいいかと思ひます。実は、この「經綸」といふ言葉は、いはゆる政治だけではなくて、経済といふ意味も含んでゐます。本当に國民のための政治を行ふためには、しっかりと経済を作らないといけない。人々が飢ゑたり凍えたりしないやうにするには、経済活動がとても重要です。まことに行き届いた表現だと思ひます。

次の三番目はもつと行き届いた話と言つてもいいかもしれない。「官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス」。つまり、どんな地位についてゐる人も、それぞれに自分の志を遂げることが出来る、どんな職業でも誇りを持って、これこそが私の職業だと胸を張つて言へる、さういふ形で、皆が生き生きと眼を輝かせて自分の仕事に誇り

が持てるやうに――それがこの一文の趣旨です。それであつてこそ本當の國民のための政治であると言へるでせう。次の四條と五條は、さういふことが出来るためには、生き生きと新しいことを学びとり、そして「天地ノ公道」、つまり、狭く日本一國に囚はれるのではなくて、それこそ、宇宙全体、地球全体のあるべき姿といふものに基づいて政治を行つていかうといふ、かういふことが、五箇條の御誓文に書かれてゐるわけなのです。

実は、この昭和二十一年の年頭の詔書といふのは、いはゆる「人間宣言」と呼ばれてゐるものです。つまり、天皇陛下が、御自分は決して西洋に言ふ神様ではない、「人にして、しかも、神の子孫」といふのが日本の伝統的な天皇のあり方の理解なんだといふことを、当時日本を占領支配してゐた進駐軍にも分らせようといふことで起草されたのが、この詔書だったんです。ただ、これは、英語の起草文を翻訳した文部大臣が、その趣旨をとんでもなく誤訳しまして、かへつて逆に、日本古来の天皇のあり方を否定し、それを覆すやうな詔書になつてしまつたといふ、大変なミスのおつた詔書でもあります。これをお出しになつた昭和天皇御自身のお考へとしては、実は、一番大事なのは、この五箇條の御誓文を國民にもう一度示して再確認させることだつた。また、敗戦に苦しんでゐる國民達が、自分達の伝統的な政治思想といふのは、こんなにも立派なものであり、民主主義といふものは、決して外来のもの

ではないといふことを示したかったのだと、昭和の五十年代になって、インタヴューのなかで、昭和天皇がおっしゃっていらつしやいます。つまり、昭和天皇御自身が、これこそが、日本の民主主義なんだとおっしゃってるんです。リンカーンの言ふ「国民の国民による国民のための政治」、それを、より丁寧に語ったのが、この五箇條の御誓文といふ風に考へていいかと思ひます。以上申し上げたところまでなら、民主主義と日本の国体とはびつたり一致してゐるぢやないかといふ、そんな感じがしますね。これなら、民主党が民主主義を大いに日本に広めてくれれば益々いいぢやないか、と、そんな気がしてきます。ところが、怖くなるのは、これからなんです。

### 初の「主権」論、フランスでの「君主主権」と「国家主権」

さて、いましがたリンカーンの言葉から「民主主義」を考へたのですが、中学生になつてから民主主義とは何ですかと訊かれて、「国民の国民による国民のための政治」です、などと答へると、もう小学生ぢやないんだから、国民主権とか基本的人権とか、さういふことをしつかり答へないといけませんと言はれてしまふかも知れませんね。そして実は、この国民主

権とか基本的人権といふ言葉が出てくる途端に、民主主義が、いはゆるイデオロギーとしてのコワイ顔を表はし始めるんです。

国民主権といふのは、中学校の社会科の教科書では、ほぼこのリンカーンの言葉の趣旨に即した形で、つまり、政治といふものは、国民の一人ひとりに係ってくるものなのだから、国民も政治について自分の考へをしっかりと固め、選挙の時には棄権せずに投票しませう、といった具合に語られてゐるかと思ひます。ところが、この国民主権といふ言葉は、西洋の政治思想の言葉を翻訳したものでありますが、この「主権」といふ言葉、これはもともとは西洋の政治思想の言葉では、「最高の力」といふ言葉なんです。つまり、この主権といふ言葉の後ろには、力の発想が非常にはつきりと際立つてゐるんです。まづ、この主権といふ言葉が、どのやうに西洋の政治思想の場に現はれて来たか、これを理解しておく必要があります。

実は、これは最初は国民主権ではなくて、「君主主権」、つまり王様が最高の力を持つてゐるといふ思想として現はれてゐるんです。十六世紀のフランスのジャン・ボダンといふ人が、初めてこの主権といふ言葉を定義したんですが、このジャン・ボダンが主権といふ言葉を定義した時のフランスは、国内が非常に混乱してゐました。国内では新教と旧教の間に血なまぐさい宗教戦争が起こり、また、外からは、ローマ教会といふ大権力が、国家を凌ぐ力、勢

ひで襲ひかかるといふ形で、フランスの国は、船に譬へてみれば（実際、ジャン・ボタンは国家を船に譬へてゐるんですが）、舵取りをする人がゐないまま、荒浪に揺られまくつてゐる、さういふ状況だったんです。そこで彼は、とにかく、誰か舵取りをする人をしっかりと決めておかないとどうにもならない、外側に向かつては国家の独立を主張し、内側にあつては誰が舵取りをするのか、それをしっかりと定めておく、これが必要なんだといふことを強調するんです。そして、外に向かつての国家の独立、そして、国内にあつては王様が国全体の舵取りをする最高の力を持つ、そのことを指して「主権——スプレーマス——」といふ言葉を使つたんです。国全体が危機に瀕してゐる時に、しかも、それを誰が舵を取るかといふことで分裂して、誰が舵を取るのか定まつてゐないといふ、かういふ状況ほど国家にとって危険なものはない。その意味でジャン・ボタンのこの「主権」論は、危急に際して国家を救ふための、非常に大事な理論だったと言へると思ひます。そして、もう一つ、一つ一つの国家といふものは、それぞれに独立した権利を持つてゐるといふ、いはゆる現在「国家主権」と呼ばれてゐる考へ方、これも同時にそこで定義されてゐます。これも非常に大事なことです。例へば、我が国のことを考へてみれば、我が国には我が国の伝統があり、そして政治の歴史がある。これを一切無視して、いきなり全く関係のない国の人間達が、勝手に日本の法律を作つたらど

うなるか。実は、これが敗戦後の日本に起つたことなんです、これは大変な混乱と文化の破壊を招くことになります。どんな小国にも自分の国の政治の独立を保持する権利がある、そのことを既に十六世紀のフランスにおいて、理論として欧米人自身が作り上げてゐる。これは我々としても覚えておくべき非常に重要なことだと思ひます。

唯一問題なのは、君主主権と言つた時に、この君主主権の中身に、王様が自分で勝手に法律を作つてよいといふことが含まれてゐたことなんです。後の政治学者はこれを指して、いはゆる絶対王政を正当化した政治理論だと批判します。けれども、実は、ジャン・ボダンが君主主権を提唱した時には、これは決して、王様が勝手な政治をしていいといふことではなかつたんです。まだ十六世紀のヨーロッパにおいては、キリスト教の神様が、人間達の上にある唯一絶対の力、権威として敬はれてゐました。彼の主権論の中でも、王様は確かに人間達の世界の中では最高の力を持つてはゐる。だが、神様に対しては、王様はただの「しもべ」である。神様の作つた法、道徳といふものにはしっかりと従はないといけないといふ、そのことをジャン・ボダンは同時にしっかりと明記してゐるんです。そして、神様は王様にどういふことを命令するのかといふと、これも日本の国体に近いのですが、人民達が辛い思ひをしたり、飢ゑたり、凍えたりしない真つ当な政治を行はなければいけない。弾圧したり、苦し



めたりする、さういふことがあつてはならない。それが、神が全ての君主に下す命令なんです。すね。もし、それに違ふやうなことがあれば、神はたちまちに神罰を下すであらうと、ジャン・ボダンも言つてゐるんです。日本の国体の場合には、いはゆる神罰を下すといふやうな乱暴な形ではなくて、最初から天照大神が鏡をお示しになつて、この鏡を見る時には常に私を見るやうになさいとおっしゃつたといふ、そのことが、日本の政治道徳の一番源泉をなしてゐる神話であり、かつ歴史の源泉である、さういふ逸話として伝へられてゐます。これはどういふことかと言へば、日本の天皇といふのは、キリスト教世界の国王達と違って、直接に神々の子孫である、だから、罰を下すぞといふ脅迫によつてではなく、自らのあり方そのものとして民を「大御宝」として尊ぶといふ、その皇祖皇宗の教へを体现する、さういふ存在でなくてはならない。初めからさういふ存在として日本の政治道徳の世界では定まつてゐる。その辺りが、強いて言へばヨーロッパの君主主権の場合と日本の国体論の場合との大きな違ひと言つていいかと思ひます。フランスの場合、絶対君主制と言ひながら、そこには国王の振る舞ひ、国王の最高の力に、道徳的かつ正義の枠がきちんと嵌められてゐた、これが非常に大事なことです。

## フランス革命時の「国民主権」

ジャン・ボダンが「主権」を定義してから百年余り後に、フランス革命が始まります。実は、このフランス革命も、歴史を詳しく紐解くと分かるやうに、昔言はれていたやうに、フランス国王が国民を虐げたため、貧困に喘いでゐた国民達が已むに已まれず反対の烽火を上げたといふ類の出来事ではなくて、むしろ、時の国王ルイ十六世がイギリスの国政を真似て、自分達もイギリスのやうに国王と国民の会議とのバランスをとつた政治をしようといふ、いはば非常にリベラルな政策を考へ出したんですね。そして、三部会を招集しようといふことになった。その時になると、俄かに、それでは本格的に「国民の国民による政治」を目指さうといふ、さういふ勢ひが急激に膨れ上がつて来る。そして最後には国王を倒せといふ政治スローガンにまで膨れ上つていったといふのが、実は、フランス革命のあり様なんです。その時に主張されたのが「国民主権」といふ考へ方です。このフランス革命の前夜にシェイエスといふ、實際は僧侶の身分にあつた彼が、いはゆる第三身分、つまり、貴族でも僧侶でもない平民の代表として、フランス革命のイデオログとして活躍します。そして、彼の主張

したのが「国民主権」なんです。ここでは、正に、主権といふ言葉が「最高の力」といふ力の概念であるところが、存分に發揮されてゐます。彼の主張はかうです。「国民の意思が至上至高の意思である。何であれ国民が意思することは、至上至高のものであつて、これを妨げてはならない」。これは、ジャン・ボダンが君主主権について言った、その「君主」の代はりにそれを「国民」に置き換へた言ひ方なんです。そして、実際に君主が持つてゐた最高の力を国民が奪取する、これがフランス革命のスローガンになるんです。力を力でもつて奪ひ取ること、いはゆる文字通りの暴力革命です。それが正当化された理由は、国家理論の中心が「最高の力」といふ概念で出来上がつてゐる、とすれば、それを力で奪ひ取るのは当然のことではないか、といふことだつたんです。ジャン・ボダン自身は、まさかそんな風な展開で自分の理論が使はれることにならうとは思ひもしなかつただらうと思ふのですが、フランス革命といふのは、正に主権といふ言葉を持つ危険性——力の概念で政治の概念を作つてしまふといふ、その危険性が実際に現出したものだつたと言つていいかと思ひます。そして実際に、力でもつて君主主権が倒され、国民主権が実現するといふことになつた訳なんです。ちやあそこで、リンカーンがゲティスバーグで演説したやうな「国民の国民による国民のため」の真つ当な政治」が行はれたかといふと、実は、その正反対の状況がそこに出現して来たん

です。しかも、それは、ある意味で国民主権が内包する問題が産み出した、正にその状況だったと言つてもいいんです。フランス革命による死者の数は、実は、正確には分つてゐません。しかし、少なくとも、三十万人以下といふことはあり得ない、そのことは確実に分つてゐるんです。三十万人もの貴族や王様や僧侶達がゐたはずはないですよ。フランス革命で命を落とした人の大部分は農民です。それから、いはゆる都市の第三身分の人達も入つてゐる。ぢや、国民のための政治になるはずの国民主権の民主主義の下で、どうしてそんなことが起こつたのか。

一番の大虐殺が起つたのが、ヴァンデーといふ地方です。この地方での出来事については、いはゆる普通の一般の歴史で見ますと、いはゆる王党派がそこで反乱を起こして、その王党派を鎮圧する内乱で、革命政府と反乱軍との両方でかなりの死者が出たと、さういふ書き方をしてゐます。ところが、最近の歴史学者がもう少し詳しく実情を調べたところでは、王党派の反乱といふ一言で片づけられるやうなものではなかったと言ふんです。このフランス革命は、ある意味では明治維新に似てゐるんですが、それまで完全な地方分権だったフランスの政治を、一気に中央集権にまとめ上げようといふ革命でもあつたんです。つまり、地方政治を中央集権に変へるといふ大手術でもあつたんですね。その結果、地方では革命が起つて

それまでの「王様に虐げられてゐた生活」が一気に楽になつたかといふと、さうではない、むしろ逆だつたんです。地方によつては、税の負担が倍に増えたといふ所もあつた。そして、もう一つの特徴は、徴兵制が敷かれたといふことなんです。このフランス革命の時には、同時に多くの外国と戦争を始めてゐます。その戦争のために、これまでのやうな職業戦士達が闊ふといふ形ではなくて、正に「国民の国民による政治」ですから、国民達が兵士にならなくてはいけない、初めて徴兵制が敷かれるんです。しかも、その徴兵は地方の状況におかまひなしに、農繁期であらうとなからうと、かまはずに徴兵していく。そして、このヴァンデーの地方では、増えた重税に喘ぎ、それまでの、教会を中心に作られてゐたその地方のシステムがメチャメチャに壊されたといふ、それらに対する不満、それから、農繁期なのに農業の担ひ手を全部召し出せといふ、さういふ徴兵に対する不満、それらが一気に爆発したのが、ヴァンデー地方の反乱だつたんです。つまり、言ってみれば、正にフランス革命について言はれてゐること、つまり、弾圧され、虐げられ、もうこれでは生きていけないとなつた一般庶民達が、つひに反乱を起こしたといふのが、いはゆる「反革命」と呼ばれてゐるヴァンデーの反乱なんです。

これは何か非常に皮肉なことですね。「国民の国民による政治」になつた途端に、国民が国

民を弾圧することになる。これは、実は、「国民主権」といふもののもつ、厄介な根本問題でもあるんです。さつき申し上げたやうに、主権といふのは「最高の力」といふ言葉です。国王が君主主権といふ時には、話は簡単です。国王はどの国にも原則として一人です。たまたま二人ぐらゐる国王がゐるといふのは、本当に例外的な、それこそ国が二分して内乱を起こしてゐるやうな時だけです。ところが、国民といふのは、当時のフランスは大体二千数百万人の人口があります。といふことは、二千数百万人の人間が最高の力を持つてゐる。じゃあ、どうやって政治を決定したらいいのか、といふことになる訳です。いはゆる民主主義の原則に従へば、「多数決」といふことになります。しかし、多数決が本当に円満な解決法になるためには、国民全体がある程度のコンセンサスを持つてゐないとダメなんです。つまり、本当に国民達が二分してしまつて、あつちの連中が政権を取つたら自分達はもう生きていけないといふやうな、さういふ分裂の仕方をしてゐる時に、少数派になつた人間達は、果たして本当に安心して多数派に従つていくことができるか。これが、ある意味ではヴァンデーの反乱を作り出した原因とも言へる訳です。確かに革命中央政府は多数派を取つていたかもしれない。けれども、この多数派は、少数派に属するヴァンデーの住民たちのその暮らしぶり、それこそ、「官武一途庶民二至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス」なんて

いふことは、これっばかしも思つてゐない。ただ、自分達の政府が権力を持ち、そして外国との闘ひに勝ちたいといふ、それだけしか考へてゐないんです。ヴァンデー地方の住民達に對して思ふ存分の虐殺を行ふ。例へばその中の一つ、象徴的な有名な例を挙げますと、反乱軍が鎮圧された後も、この住民達を生かしておいたならば、また、その子供達が大きくなつた時に革命政府に對し反乱を起こすだらう、今のうちに根絶やしにしておかなければいけないと言つて、その残党の住民達を、子供、女性、老人に至るまで全部皆殺しにせよといふ命令が下るんです。それだけの規模の大虐殺となると、死体の処分といふのが大変な作業になります。ここで名案を思ひ付いた人がゐて、ヴァンデー地方の中央を大きなロワール河といふ大河が流れてゐるんですが、そこにボロ船を浮かべて、残党達を乗せる。一船に大体四、五百人詰め込めたといふんですが、詰め込んで河の中央に持つて行つて船の栓を抜く。さうすると、そのまま、処刑プラス遺体の処理全部が済むといふ、ものすごく効率的なことを考へ出したんです。ただ、これはさすがに反対派の格好の攻撃の的になるといふので、これを發明した当の人間も処刑されてゐます。ただし、その思想それ自体は、ボロ船に人を乗せて沈めるといふ処刑が廃止された後も、そのヴァンデー地方一帯にずっと続けられます。その結果、全体として少なく見積もつても三十万人の死者が出たといふのが、フランス革命なんで

す。

これを見てみますと、このフランス革命の時に出て来たデモクラシーといふ言葉が、ある時期までヨーロッパではむしろおぞましい言葉だったといふのも、少しも不思議ではない気がいたします。実際、このヴァンデーの大虐殺を指して、これは、いはゆる内戦ではなくてジェノサイドである、つまり、ある一地方の住民の皆殺しを意図して行はれた虐殺である、さういふ言葉遣ひをしてゐる歴史学者もゐるくらゐです。しかも、そのジェノサイドの歴史といふものが、決してデモクラシーの発生と無縁に起こつてゐるのではない。つまり、自分達多数派の国民の意思は至高のもの、至上のものであつて、これに反対することは許されない、これに反対する者は力をもつて弾圧することが許されるといふ、さういふ思想が、国民主権つまり、国民が最高の力を持つといふ政治思想の中にしつかりと組み入れられてゐた、と言ふことが出来る訳です。

しかも、ここで一番恐ろしいのは、君主主権の場合には、少なくともジャン・ボダンの当初の君主主権の理論の中では、その君主の上に立つキリスト教の絶対神といふものが考へられてゐます。だから、もしある国王がヴァンデーの大虐殺のやうなことを行はうとしたら、少なくとも、天に在しますキリスト教の絶対神が、それを黙つて見てはゐない、天罰、神罰を



下すといふ、少なくともさういふ抑制が働いたはずなんです。ところが、この国民主権を標榜したフランス革命は、同時に非常に厳密な「政教分離」——今も我々が民主主義のイデオロギーの一つとして受け容れてゐるものですが——この政教分離といふ思想が初めてはつきりと打ち出された、さういふ革命でもあつたんです。この国民主権を、天にゐて見張り、抑制し、手綱をかけるといふ存在が、もうこの十八世紀末のフランス革命の時には無くなつてしまつてゐたといふ、これがもう一つ非常に大きなことだつたと言へるかと思ひます。つまり、自分達の意見に従はない者は、力でもって弾圧し殺しまくつていいんだといふ思想が、国民主権の裏側にはびつたり貼り付いてゐる訳なんです。共産主義が恐ろしい思想だといふことは、もう二十一世紀の我々にはよく分かつてきたんですが、共産主義といふのは、ある意味では、この民主主義をもう一段極端に押し詰めたものなんです。フランスでは、この十八世紀のフランス革命の後、何度も何度も革命が繰り返されていきます。十九世紀に入ると、いはゆる社会主義革命、つまり、持たざる者が持てる者の支配をひっくり返すといふ、共産主義に非常に近い革命になつて行きます。そこでも、相変はず民主主義といふのは力の論理なんです。そして、その力の論理が極端なまでに引き継がれたのが共産主義だと言ってもいい。ボル・ポトの大虐殺にしても、毛沢東の大虐殺にしても、スターリンの大虐殺にしても、

振り返ってみると、皆、その原型は、このフランス革命のヴァンデーの大虐殺にある、と言つていいのではないか、さういふ出来事です。そして、このフランス革命によつてデモクラシーといふ言葉が出現してきたのです。

### アメリカ革命によるアメリカ建国

同じ時期、アメリカにも、もう一つ革命が起こつて、そこでもデモクラシーといふ言葉がほとんど同時に発生してゐます。その革命とは、我々がアメリカ独立戦争と言つてゐるもので、アメリカ人自身は、これをアメリカン・レヴォリュションと言つてゐます。アメリカ人にとつて、アメリカ独立戦争は、アメリカ革命といふ名前で刷り込まれてゐるんです。独立宣言といふのがありますね。「我々は次のことを自明のことと考へる。人間は造物主によつて全て平等なものと創られ、自由なものとして創られ、自由、生命、幸福の追求といふ、この譲り渡し難い権利を与へられてある」といふ、そんな台詞が有名ですが、実はこの独立宣言の、あとの四分の三といふのは、全部、当時のイギリス国王に対する呪詛、罵詈、罵詈雑言の連続なんです。つまり、アメリカ人は、イギリス本国から独立したといふ意識ではなく

て、時のイギリス国王に対して反乱を企てて、自分達の新しい国家を建設した—アメリカ革命によって自分達はアメリカを建国した—さういふ認識なんです。それを理解するには、イギリスの政治の歴史についてもお話ししておく必要があります。実は、イギリスの歴史を理解しておくことが、我々が民主主義とは何なのか、そして、民主主義を少しでも真つ当な政治に近づけるためにはどうしたらいいのか、我々の国体との接点を探るにはどうしたらいいのか、といふことを考へるための、非常に大事な手掛かりになるんです。

イギリスの政治の歴史—建国から権利章典まで—

皆さんも世界史で、イギリスの建国は十一世紀、一〇六六年で、ウイリアム征服王が第一代のイギリス国王になったと習ったと思ひます。何故征服王と言ふのか。実は、何のことはない、ウイリアム征服王といふのは、大陸の、つまり今で言へばフランスからやって来て、そして王位継承戦に勝った王様なんです。イギリスでは、外国の王様がやって来て、初めて、イングランドの統一国家が出来上ったといふことなんです。よくぞそんなものを「建国」と呼べるなどいふ気がするんですが、イギリス人は平気で「建国」を一〇六六年と考へてゐる。

ただし、このウィリアム征服王はたしかに非常な名君で、戦争に強いだけでなく、ものすごくバランス感覚のいい人だったやうです。つまり、確かに自分は大陸からやって来て、そして大陸の家来、兵隊達を連れてきてゐるし、大陸の裁判制度なども一緒に持ち込んでゐるけれども、全面的にこの大陸流をイギリスに押し付けたのでは、多分統治はうまくいかないだらう。だから、上手にイングランドの古来の制度を活かし、各地方の自治をうまく認めて、それによつて、また自分が連れてきた家来に対する牽制の力にもして、そして自分は、イングランド流と大陸流のそのバランスを、その真ん中であつて上手にとる——さういふ政治をしようといふのが、ウィリアム征服王の政治の根幹だったんです。この政治のバランスといふのが、概ね大体の時期を通じてイングランドの政治の中心原理になつてゐたんです。もしイギリスが、ずーっとそれで安泰のままであれば、おそらくイギリスのそのお手本をあちこちの国が真似をすることになつて、おそらく、さつきお話ししたやうなデモクラシーといふ極端な政治は、出て来なかつたであらうといふ気がします。

ところが、歴史といふのはむづかしいもので、なかなかさういふ名君ばかりではないんですね。この名君が出てから一世紀半も経つと、たちまち「気は優しくて力持ち」の正反對の王様が出て来ます。つまり、戦争をすると次々に負けてしまつて、大陸にあつたイギリスの

領土を全部失つてしまふ。しかも負け続けの戦争ですから、戦費はどんどん嵩んで、次々に約束以外のお金をイングランドの貴族や国民から取り立てる、さういふ王様、ジョン欠地王とかジョン失地王とか言はれるんですが、その王様の時に地方の貴族達が立ち上がってジョン王を捕まへて、そしてこの六十一箇條を認めると言つて突き付けたのが、有名なマグナカルタです。このマグナカルタは、言つてみれば「王様の詫び状」といふやうなもので、各條が、私はかういふことはいたしません、かういふことはいたしません、最後には、私が悪いことをしたならば私をぶつてもいいですといふ、そんな條項まである、ちよつと見てると面白い古文書がマグナカルタなんですが、しかし、これがある意味で遠い民主主義のモデルになります。つまり、国王がダメな時に、人民達が立ち上がって国王に対して告訴状を突き付けることが出来る。そして、そこで色々な権利、人民の古来の権利が守られるといふ、これが一つのパターンになるんです。一二一五年に初めて出されたマグナカルタは、やがて次々に修正を受けて、もう今では原形をとどめてはゐないんですが、しかし、歴代の王様達は皆、新しく改正されたマグナカルタといふものを確認して、自分達はこれを守る、そのことを誓ふのが、王が即位する時の大事な一つの手続きになる。さういふ形ですーっとチューダー王朝の間、十七世紀に至るまで、イングランドの国政は、王様の権力と議会の権力がバラ

スをとって、車の両輪と言ひますか、あるいは、焦点が二つある楕円形と言ひますか、そのやうな形態で続いて来たんです。

ところが、十七世紀に入つてスチュアート王朝のジェームズ一世が即位した時に、それが大きく崩れるんです。実は、大きく崩れた理由に、先ほどお話したフランスのジャン・ボダンの君主主権の思想が係はつてゐるんです。スコットランドはイギリス旅行をすると汽車でそのまま行けるので、イギリスの一地方みたいに我々感じてますけれども、かなり文化が違ふんですね。伝統的にスコットランドの文化は、大陸の文化と親近性があるんです。ジェームズ一世も、大陸流の君主主権の考へに、かぶれます。そしてそれまでのイギリスの伝統的なこのバランス政治といふもの、これは考へてみれば王様自身にとつては大変制約の多い不自由な王制ですよ。そこで、その制約を取り払つて「自由王制」なるものを主張するんです。つまり、議会のことなんか知ったことかといふ、王様の独裁を敷くといふのが自由王制なんです。これはもちろん、イギリス中に大変な騒乱を巻き起こします。このジェームズ一世の息子のチャールズ一世の時に、イギリス革命が宗教革命と重なり合つた複雑な形で始まつて、イギリスの歴史上初めて王様の処刑が行はれ、共和制が敷かれるといふ事態になります。これが、実は、ヨーロッパで起こつた最初の革命なんです。ただし、イギリス人といふ

のは時々極端なことをやるんですが、また元通りのバランス感覚を取り戻すといふ国民性を持つてゐるんですね。イギリス革命は、十七世紀のど真ん中を半世紀近く続くんですが、一番最後の、いはゆる名誉革命と呼ばれる一六八八年の革命は、名前は革命なんですが、一滴の血も流れなかつた。オランダからオレンジ公ウイレムを招いて、そして彼が来るぞーと言つただけで、もうイギリスの時の王様がギヴ・アップしてしまつたといふ形で、無血革命が行はれたのが、一六八八年です。これは、実は、非常に大事な革命だつたんです。この名誉革命でもつて、イギリス人達はもう一度、自分達の国体はどういふものなのかといふことを、再確認するんです。先ほど申し上げたやうに、イギリスには王様がある。ただしその王様は、外国から来てゐる王様です。今回の名誉革命の時はオランダからやって来た。しかし、その外來の王様が、イングランドの古來の慣習といふもの、これを尊び、絶対にこれを侵さない政治をする。そこで、名誉革命の直後の一六八九年に、權利章典といふ形で、イングランドの古來の權利といふものがどういふものであるか、それが、色々と規定されたんです。いはゆる人權と今言はれてゐるもの一つの源泉は、そこにあるんです。つまり、そこには、非常に殘虐な刑を科してはいけないとか、裁判を受けることなしに投獄されたりすることはないとか、それから、議会の相談なしに王が勝手に税金を取り立てることはしないとか、さう

いふ色々な基本的な約束がそこで為されてゐる。そして、大事なことは、たまたまその時の国民がそれを欲したからそれでいいのだといふことではなくて、長い歴史をくぐつて来て、「古来の正しい法」としてイン格蘭ドの土地の神聖なる権利として認められてゐるんだといふ、さういふ形でそれらの権利が認められてゐる、それが名誉革命と同時に行はれたことなんでしょうね。イギリスは、そこでもう一度、自分達流の、伝統的な政治の形を取り戻します。彼らはそれを民主主義とは言はずに、「コモン・ローの伝統」といふ言ひ方をするのですが、それが確立されたのです。

### 試練をくぐり抜けて来た英知「古来の法」

この「古来の法」といふ考へ方をしっかりと政治思想としてまとめ上げたのが、エドワード・コークといふ人です。これを、何でも古ければいいといふ考へ方だと捉へると、余りピンとこない。五箇條の御誓文にいふ「舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ」といふ、それと正反対の考へ方みたいな感じもしますよね。ところが、実はさうではないのです。ある一世代の人間達といふのは、これはちやうどフランス革命当時のフランス人達のやうに、思



ひ違ひをしたり、それから激情に駆られて怒り狂って間違つたことをするといふこともあり得る。ただし、長年に亘つて積み重ねられて来た法といふもの、これは、ある一時期の人間達が何か思ひ違ひをしたり勘違ひをしたりしてゐたら、すぐに次の世代の人間が、あ、やはりこれはダメだと言つて切り捨てる、さういふ形を取ることが出来る。そして、一人の人間では思ひ付かないさういふ英知が、長年に亘つて時間の経過を経て積み重ねられた時には、どんなすぐれた英知の持ち主よりも優れた知恵を発揮することが出来るといふ、これが「古来の法」が尊重される所以として、エドワード・コークによつて思想的にまとめられたんです。このことは非常に大事なことです。もし、かういふ「古来の法」といふ考へ方をフランス人達が引き継いでゐれば、おそらく三部会を開いた時に、ちやうどエドモンド・パークがフランスの友人にアドヴァイスしたやうに、その「古来の法」を上手にもう一度活かして、そして自分達の政治の柱にすることが出来たかもしれない。ところが、フランス人達は、その一番肝心な所を引き継がないで、イギリス革命の一番ダメな所を引き継いでしまった。つまり、国民達が怒り狂つて王様を処刑する、これが革命だとフランス人達は思つてしまった。そこがフランス革命の悲劇の元だったと言ふことが出来るかもしれません。本来、レヴォールションといふ言葉は、旧に復する、といふ意味をもつてゐます。この言葉のもとになつてゐる

動詞のレヴォルトといふのは、天体がぐるつとかう回る、その動きを言ふんです。つまり、イギリスの本来のバランス政治といふものが、一度スチュアート王朝でひっくり返されてメチャメチャになってしまった。だが、もう一度この一六八八年の名誉革命によつて、元のバランス政治が取り戻された、もう一度本来の政治が回復されたといふのが、レヴォルーションの意味なんです。ですから、さういふ意味では、実は、「日本の明治維新は革命である」といふ言ひ方も、確かにその通りだと言つていいかもしれませんね。明治維新といふのは維新であると同時に復古である、これが大事な特色なんです。それは、実は、イギリス人達が考へたレヴォルーションといふ考へ方と、正に軌を一にしてゐると言つていいかもしれません。

### 民主主義の通弊「新しい権利・人權の要求」

この権利章典において認められた様々の人民の権利といふものは、もう昔から認められて来てゐて、そして、さういふことを認めるのが、真つ当な政治を行ふ上で非常に大事であると判断された―さういふ種類のものです。つまり、何世代にも亘り試練をくぐり抜けて来たものとして、これらの人間の権利といふものが定められてゐる訳なんです。

ところが、今の時代は、人権といふものが次々に新しく産み出されようとしてゐます。恐らく民主党の政権になると、数年前に我々が若い力を結集して廃案に持ち込んだ、あの人権擁護法案といふものが、多分もう一度持ち上がってくると思ひます。あそこには思ひ付く限りの、ありとあらゆる事柄が権利といふ名前をかぶせて唱へ上げられてゐて、そして、それに違反した人間達は罰せられるといふ、さういふ法案として出来上がらうとしてゐます。しかし、権利といふのは、実は、これも元の英語で言へば「ライト」、つまり正しいといふ言葉の翻訳語が権利なんです。つまり、何か正しい基盤がないと、本当は「権利」とは言へないんです。ところが、今、「人権」といふ言葉が使はれるときには、その本来の意味―それが正しい基盤に基づいて正しいと認められてゐなければいけないといふことが、全部見失はれてゐます。そして、新しい何かに権利といふ名前を付けさへすれば、それでそれが確保されることになるといふ、ほとんどさういふ茶番めいた言葉でもって、権利、人権といふ言葉が使はれてゐます。環境権といふ言葉が出て来る。しかし、環境の恩恵を本当に自分達が国民として享受しようとするなら、自分達で汗水たらして環境を整へなければいけない。自分達には快適なハイウェイが欲しい、だから森林を切り拓いて平らな舗装道路を作つて欲しいと言つておいて、その一方で環境権といふことを口にし要求する。さういふことでは、権利と

いふ言葉を使つてはいけなはずなんです。ところが、今の民主主義といふイデオロギーの中では、何でも権利として主張していい、そして、権利といふ名前で国民に約束されるものが増えれば増えるほどいいといふ、かういふ競争のやうなことになってしまつてゐます。これも、民主主義といふイデオロギーが内包してゐる、もう一つのをかした側面と言つていいかと思ひます。

### 「我が国の国体」流の民主主義の自覚とその発信を

あらためて振り返つてみますと、我が国のやうに、天皇陛下御自身が「古来の法」の真ん中にゐらして、そして古来の政治道徳を作り上げてゐる。かういふ歴史を持った我々は、本当に幸せな国民だといふ気がします。この我々の幸せなあり方を体现して簡単な近代的な法則にしたのが、五箇條の御誓文だと言へるかもしれない。そこには、「上下心ヲ一ニシテ」と、さりげなく言はれてゐます。でも、これがどんなに大変なことなのか―正にイギリスも含めてアメリカもフランスも皆ヨーロッパの民主主義の歴史といふものは、この「上下心ヲ一ニシテ」が出来ないといふ、そこから出来上がつて来たものなんです。我々は是非と

も、もう一度我が国の歴史が、ヨーロッパの気の毒な歴史とは違ふといふことを再確認して、そして自信を持って、それこそ昭和天皇陛下が、敗戦の翌年に「民主主義は外来のものではない。国民が自信を失つてはいけなと思つて、これを示しました」とおっしゃった、そのことをもう一度噛みしめながら、「我が国の国体」流の民主主義といふものを世界に発信していく、さういふ気構へでゐるべきではないかといふ気がいたします。



講義

アジアにおける日本の役割

桐蔭横浜大学大学院教授

ペマ・ギャルポ



はじめに

アジアの現状と日本

過去のアジア情勢

未来に向けて日本がなすべきことは何か



はじめに

去年から今日のこの日を楽しみにしてをりました。今から三十七年前、私も一学生としてこの合宿教室に初めて参加しました。その時の私の班の班長が山内健生先生であり、今日、本厚木駅に迎へに来て下さいました。

合宿教室に参加して、私が一番得たものは沢山の友達です。そして長く日本で生活して、今も沢山の方々の御世話になってゐます。数年前に四十年の難民生活を終へて日本に帰化しました。そして、これまで日本で受けた御恩を少しでもお返しする心づもりで二年前の参院選に立候補した時も、国民文化研究会でご縁の出来た方々から大きな御支援を頂きました。この合宿教室では、短歌を創ったり、先生方からいろいろなお話をお伺ひすることも勿論大事ですが、何よりも友達を沢山作つて欲しいと思ひます。

今日の私のテーマは、「アジアにおける日本の役割」ですが、残念ながら日本においては、このアジアといふ概念すらしっかりしたものになってゐないと思ひます。皆さんが新聞やテレビなどのマス・メディアからアジアと聞く場合には、精々、中国・韓国そして台湾などの、東アジア辺りをアジアと思つてはゐないでせうか。そしてカレーライスを食べる時だけは、イ

インドもアジアに入るのです。今外務省のホームページを見ると、アジアには二十一ヶ国あるといふことになってゐます。西アジア（中東）のトルコまで含めると三十七ヶ国となります。「アジアにおける日本の役割」を考へる時に、先づ何よりもアジアといふ概念をしつかりと持つことが重要でないかと思ひます。本日は、「アジアの現状と日本」、「過去のアジア情勢」、そして最後に「未来に向けて日本がなすべきこととは何か」の順でお話をしたいと思ひます。

## アジアの現状と日本

### ①アジアの国際協力組織と日本

アジアのみならず、国連にも派閥がありまして国連の最大の派閥は非同盟諸国です。国連が出来た時には、加盟国は五十一ヶ国しかありませんでした。先の戦争の結果、勝った連合国を中心に国連が出来た当時、国家として認められた国は五十数ヶ国しかなかったのです。一九六〇年代までにアジア・アフリカで、独立が相次いで沢山の国が新たに誕生しました。現在は、百九十二ヶ国が加盟してゐます。

そしてアジアにおいても国際的な協力組織があります。先づ東から行くと中国、ロシア、そ



してかつてロシアの一部として占領され支配され一九九〇年代に独立して国名が「……スタン」となっている国々による上海機構といふグループがあります。これは当初経済的な交流を中心とするグループといふことでしたが、最近は軍事演習までやる政治ブロック・軍事ブロック化してあります。しかし、残念ながら日本はこのグループでオブザーバーのステイタスも得てみません。日本は完全に蚊帳の外に置かれてあります。

その次に東南アジアを中心とする、そもそもは共產主義の南下を防ぐために冷戦時代に、非共产圏の国々が結束して共產主義と戦ふためのイデオロギーをベースにした所謂アセアン(ASEAN、東南アジア諸国連合)の五ヶ国があります。後に旧共産党の或いは現在も共産党の看板を降ろしてはゐないベトナム

やビルマなどが加はって計十ヶ国のアセアンです。ここでも日本は、プラス3といふことで韓国・中国と一緒に、オブザーバー的なステイタスを得てゐるに留ります。

日本では、プラス3を大きく報道してゐますが、アセアンはインドとは八月に、自由貿易協定(FTA)を結び、インドもオブザーバーに迎へ入れられてゐます。このアセアンにおいては、日本はオブザーバーであるため、決定権はありません。アセアンで、東南アジアの政治・経済について毎年銀行の総裁、労働組合の委員長、或いは大臣らが、お互ひに協議する場合にも、日本は最終的には一票を投じる決定権の無い立場であります。ここでも蚊帳の外にあると言つても言ひ過ぎではないと思ひます。

南アジアには、南アジア地域協力連合(SAARC)といふものがあります。インドおよびその周辺のバングラデッシュ、パキスタン、ネパール、スリランカ、モルジブ、ブータンといふ七ヶ国の国々が地域協力を促進するために作った組織です。これに関しては、日本では余り報道されてゐません。しかし実際上は、アセアン以上に地域の統合・連合が進んでゐます。それは、かつてこの地域が二百年ほど英国の支配下にあつて、同じ制度、同じ教育制度等を持ってゐたからです。また、インド亜大陸としても歴史・文化等においても様々な共通点がありまして、この地域での協力、地域内の貿易、様々な資格の認定等々の共通化が進ん

でゐます。一昨年から日本・中国・韓国・アメリカ・EUをオプザーバーとして迎へ入れました。しかし、飽くまでもオプザーバーです。

## ② G8やAPECと日本

皆さんが良く知つてゐる日本が入つてゐる国際社会の派閥は、G8とかAPECでせう。G8（主要八ヶ国首脳会議）の一員であることを日本人は誇りにしてゐますが、皆さんが図書館に行つて探してみると分りますが、G8発足以来今日まで、何を決めて来たのでせうか。かうしたことを具体的に研究して頂ければ、今日日本が抱へてゐる失業の問題、或いはフリーターなどの様々な問題は、G8の共同コミュニケによつて、日本だけが儲かりすぎてゐるから怪しからん、日本はアメリカを中心とする世界に向けて車の輸出台数を制限しなさい、日本人は働きすぎるから労働時間を短縮しなさい、一年間に休みの日数をこれだけ作りなさい、そして日本の銀行は儲け過ぎてゐるから利子を取らないやうにしなさい等々、様々な条件を付られて、その結果、日本の弱体化が進んだと私は見てゐます。

また、APEC（アジア太平洋経済協力会議）にしても、当初は反共産主義の一つの機関として生れたアセアンが、地域協力連合として結束しさらに日本との関係を深めて、やがては円の経済圏として発展して行く現実的可能性を阻止する働きをしました。APECがアセアン

に網を掛けてしまひました。それまで、アセアンの国々、或いは香港や韓国、台湾を含めて日本の経済圏となりつつあったのですが、かつて戦争で成し得なかつたことを戦後経済を通して日本がアジアにおいて新たな存在として現れ力を付けたことに対する防止策であつたと私は思つてゐます。

G8のもう一つの役割は、何かといふと、日本・ドイツが先の戦争で負けたにも拘らず僅か二十数年で経済を復興させ国を再建し、そして強くなつて来たことに対して様々な制度を創設して足枷手枷を作ることです。さらには、そもそもアメリカの言ひなりになつてゐた国連が、新たにアフリカやアジアの国々が誕生し加盟したことによつて、アメリカ自身が国連委員会のメンバーにも選ばれない様な状況になつてしまつたことです。だから大きな物事を決める時に、国連の外で所謂金持ちの国々だけで新たな決定機関を作らうとして生れたものだと思つてゐます。

その様な状況において、日本のかつての先輩達は、あの戦争に負けた悔しさ・悲しさ、さういふものに全部堪へて何一つ言ひ訳をせずに歯を食ひしばつて頑張つた結果として、明治維新以来国家百年の目標を達成して、一九七〇年の大阪万博を境にして先進国の仲間入りを果しました。

③今の日本は病んでゐる

しかし、その後の日本はどうでせうか。四十余年前、私が日本に来たとき、一番驚いたのは、毎日通ふ駅のベンチに落書き一つ無いことでした。タバコ屋の店先にある赤い公衆電話はいつもピカピカに光ってゐました。中学校から帰つて来るとき、未だ埼玉あたりでは兼業農家が多く、私達が挨拶をすると、態々自転車わがわがから降りて頭の手拭ひを取つて丁寧な挨拶を返してくれました。家に鍵を掛けるなどといふ習慣はなかったと思ひます。私も、テレビをお米屋さんに見せて貰ひに毎週伺つてゐました。お風呂も頂きました。その折、「今晚は、御免下さい」と言つて、返事がなくても、もう家の中に入つてゐたものでした。そして、さつさと上がつてはお茶を頂いたり、お風呂を頂いたりしたものです。

風邪で学校を休むと、同級生が帰りに寄つて、「今日は、ここからここまで勉強しました」と言つて、読めない漢字には振り仮名を振つてくれ、そして宿題を教へてくれました。さらに、同級生のお母さんが、生姜の入つた玉子酒を持って来て下さつたのです。

最近、私の家内の甥っ子が日本に遊びに来ました。インドの田舎から来たのでエレベータに乗り合はせた人に挨拶をすると、挨拶をされた人達が吃驚してゐたのです。そして日本では、親が子を殺すことも、子が親を殺すことも、最早珍しいことではなくなつて来ました。た

いした理由もなく、誰でも良いから殺したかったと言つて、無差別の殺人も珍しくなくなつてしまひました。しかし、これらは全て私は一九七〇年代以降の日本の教育・日本のマスコミ、日本人自らが作り出したものだと思つてゐます。

私の恩師の小田村寅二郎先生(この国民文化研究会の創設者で前理事長、元亜細亜大学教授)は、授業中でも御自分の事を「僕」とおっしゃつてをられました。最近では、女性が「俺は、俺は」と言つてゐます。日本の文化、日本の社会が如何に病に苦しんで居るかといふことは、最近のテレビを見ても分ります。男のやうな女、女のやうな男が人気があるやうで、性別の判別も社会の秩序も逆の方がかつこ良いやうです。そして皆さんが短歌を詠まれて体験したやうに、私は日本語は世界一美しい言葉だと思つてゐます。特に人間の気持ちを表す言葉が非常に豊かです。

しかし、朝から流れるラジオ・テレビの番組を聴いて、そのままテープ起しをしても文章にならないものが多いのではないでせうか。勿論時代が変ると同時に、世の中も変化します。しかし、現代の日本人が使つてゐる日本語は、外国人にも難しいでせう。これが今の日本の現状だと思ひます。

④今の日本はアジアを、世界を戸惑はせてゐる



日本に近い、所謂中華人民共和国といふ国は、日本から多大な経済援助をもらひ、今では自ら航空母艦まで作る力を付けてゐます。そして日本の固有の領土を侵すまでになつてゐます。この国が、昨年はチベットで何をしたかといふことをご覧になつたと思ひます。今年も、ウイグルで何が起きたかをご覧になつたと思ひます。私達チベット人に同情的な人達でさへ「中国はあんなに広いのだから、別にチベットなんか取らなくてもいいのに」とおっしゃる。ここに、日本人の中国に対する大きな錯覚・幻想があります。

現在の中華人民共和国は、今の二十一世紀に於いて、世界で唯一植民地を抱へてゐる国です。唯一帝国主義的な政治を行つてゐる国です。何故ならば昨年チベット全土で私達からすると決起、中国からすると暴動が起きました。中国政府の発表では二十名が殺されました。私達が確認してゐる所では、百八十七名の性別・年齢がはっきりしてゐる人達が殺されてゐます。

一九六〇年代の当初、国際司法委員会は中国によつてチベットで計画的組織的大虐殺が行はれたとして中国を告発しました。そして今回、ウイグルで起きたことに関してトルコの首相は、あれは虐殺だと言つたのです。二十一世紀の今日においても、世間が言ふ、ナチスのホロコーストのやうなことを平気でやつてゐる国と付き合はなければならぬといふ現状で

す。或いはそれと喜んで付き合つてゐる経済界を中心とする人達の偽善的な態度。一方において平和・人道・人権と言つてゐるのですから。

今回私は、八月の上旬、広島・長崎についての報道を外国で見ました。私はベトナムにをりました。ベトナムといふ国は、アメリカにも負けなかつた国です。一九七九年に中国の軍隊が鄧小平の命令で侵略しましたが、これも抵抗して追ひ払ひました。ベトナムに行くと当然戦争資料館がありアメリカが如何に悪いことをしたかといふことを記してゐます。しかし、ベトナムを大人だと思ふのは、かつてベトナムはアメリカを敵として戦つたけれども、国交を結びました。最初にベトナムに赴任した米国大使は元軍人で元捕虜でした。そして彼を出迎へたベトナムの要人はアメリカの捕虜を虐待した本人でした。それに対してマスコミの人が「今どういふ気持ちですか」と聞きました。これに対して、ベトナムの要人は「今私は、友人としてアメリカのかつての将校を迎へに来た」と答へたのです。さらに、「もしあなたが、再びアメリカと戦争をするやうなことになるれば、同じやうな虐待暴行を加へるか」と聞かれると、「当然、行ふ」と答へました。「私が行つたことは、私の任務を果たしたまでだ」と答へたのです。

そして、アメリカの大使にも同じ質問をしました。「私の今の任務は、ベトナムと友好関係

を促進し両国の関係を維持することだ。しかし、再び戦はなくてはならなくなつたとしたら、私は戦ふであらう。しかし、今、個人的にはかつて私を虐待した人に対しては、何の恨みも持つてはゐない」と言ひ、それぞれが遣るべきことを遣つたまでだと答へたのです。

これが、恐らく世界の常識ではないかと思ひます。外国で見る、NHKを初めとする日本発のマスコミのニュースを見てゐますと、特に広島・長崎に関する人々の発言は、まるで日本が加害者であつたかのやうに話をしてゐます。「我々は二度と同じ間違ひを起しません」などと、本来であればアメリカが言ふべきことを日本人が言つてゐましたが、恐らく世界中の人達が一寸戸惑つてゐるのではないかと思つたことです。

勿論戦争は避けるべきことであります。戦争を美化することは出来ません。しかし、同時に戦争は国際法では認められてをり国家が持つてゐる権利でもあるのです。だからこそ、軍隊があり、訓練をしてゐるのです。軍人が戦争で人を殺しても殺人にはなりません。このやうな状況下で、日本の周りには北朝鮮のやうな全く何をするか判らない、他国の国民を拉致し、そして自国民を餓死させても平気な政権が未だに存在してゐるのです。その国が核を持つてゐます。この北朝鮮が東西ドイツと同様に韓国と統一してしまつたら、日本の隣に五千万以上の人口を持つ、反日的な核保有国が出来ることになります。そして日本が、唯一頼りに

してゐるのは、経済援助、経済力でした。しかし、その経済は、もしかすると今年中にGDPにおいて中国に抜かれるかもしれない。さうすると、何が残るでせうか。日本は、強い軍隊を持つてゐる訳でもありません。仮に保有したとしても、国を守る精神があるか否かが問はれてゐるのです。

## 過去のアジア情勢

### ①チベットと日本との関係

かつての日本人は、今と違ひました。例へばチベットの問題にしても然りです。チベットが中国の一部であるといふ根拠を作つたのは英国です。私は三十五年前、学生でしたがこの合宿教室で、当時は、文革（文化大革命）最中の中国において何が起きてゐるかを訴へたのです。あの時よりも、今日の状況は悪くなつてはゐても、決して良くはなつてゐません。「チベットは中国の一部である」といふことを英国に言はせた一番の要因は、日本が一八九〇年代から一九三〇年代に懸けて、積極的にチベットに接触をしたためです。当時のアジアを皆さんの頭の中に想像してみして下さい。アジアには、先程、三十七ヶ国と申し上げたのですが、当

時は何ヶ国であつたと思ひますか。独立国家は日本とタイで、他に辛うじてチベットとネパールが独立してゐました。

しかし、タイの独立には、仏領インドシナと英領マレー半島・インド亜大陸との間の、英仏相互の緩衝地帯としての意味合ひがありました。そしてチベットとネパールの独立は、同様にツァーリズムのロシアと英国の勢力均衡の中で維持されてゐました。アジアで自らの足で立つて独立してゐたのは日本だけでした。一九三〇年代の地図を御覧になれば、日本以外に独立国はありません。その時の日本人は、今日の日本人よりも、遙かに地球的規模でものを見てゐました。グローバルといふ言葉は使ひませんでした、今以上にグローバルにものを見てゐました。戦術・戦略・ビジョンを持つてゐたのです。

日本は明治大正時代からチベットに関心を示し、河田慧海師や青木文教師を初め、多田等親師、寺本宛雅師など仏典を求めてチベット入りした人や、また成田安輝氏、木村肥佐生氏や西川一三氏のやうに特務機関員もチベットに送つてゐました。チベットの国旗は、日本の矢島保次郎先生（青木文教師との説もある）の提案で作成された国旗です。そしてチベットの軍事顧問となつたのは矢島保次郎先生です。このやうに日本がチベットに接触したものですから、英国は一九〇七年の英露協商に初めてチベットの宗主権は中国にあるといふことを勝手

に書き込んだのです。その一番の原因は、アジアに新たな勢力として擡頭して来た日本からチベットを守るために（英国のために）行ったのです。

中国は、一八四〇年のアヘン戦争以来、国内に於いてさへ、外国人に対して通関税を払ふやうな悲惨な国情にありました。そもそも今日見られる広い中国、九四〇万平方キロメートルの中国は存在しなかつたのです。現在の中国の国土の中の、二二〇万平方キロメートルはチベットの領土でした。現在の雲南省・四川省・甘肅省・青海省等に併合されてしまひました。その他に、ウイグル、内モンゴル、満州等を地図で確認して欲しいと思ひます。自治区、自治州・族・自治県と書かれてゐる箇所を赤鉛筆でなぞつてみると、漢族の地は三七パーセントしかありません。つまりそれが、かれらの正當な領土なのです。万里の長城の内側が所謂中国の領土です。元朝も中国人がモンゴルを占領して元朝を作つた訳ではありません。モンゴル人が中国を占領して作つた王朝です。日本人は勘違ひをしてゐます。清朝も同じです。満州人が中国を攻めたのであり、中国が満州を攻めた訳ではありません。

ですから、そのやうな弱い中国にチベットの宗主权があると、当時の英国の悪知恵で英露協商の中に記入したのです。今日私達が見るパレスチナ問題、或いはインドのカシミール問題、これら全ての問題を深く探つて見ると、当時の英国の植民地支配が残した後遺症である

ことが分ります。意図的に彼らが去つても我々が団結出来ない様に様々な工夫が凝らしてあるのです。

## ②アジアの国々が日本から学んだこと

いづれにしましても、明治・大正・昭和初期の日本人は今日よりも国家として国民としての自覚と意識を持ってゐました。だから例へば、前の国連の事務総長のガリ氏は、彼がエジプトの外務大臣だった時も国連の事務総長だった時も、来日の度に東郷神社にお参りしました。勿論その後もお参りしてゐます。ご承知のやうに東郷神社の御祭神は日露戦争でロシアのバルチック艦隊を破った日本の連合艦隊司令長官東郷平八郎です。しかし、日本の新聞はそのことについて、一度も書いた事がありません。そして戦後の日本の先輩達は「男は黙ってサッポロビール」の如く言ひ訳をしないのです。だからあの戦争についても正当化しなかつたのです。多くを語らうとしなかつたのです。その代りに、黙々と働いて、先輩達の血と汗と尊い命による犠牲を無駄にしないやうに頑張りましたから、一九七〇年代に、明治以来日本が進んで取り組んで来た近代化の結果として、日本は技術大国・経済大国になりました。多くのアジアの国々にとって憧れの国となつたのです。そしてアジアの多くの国の経済発展は、日本の援助無しにはなし遂げられませんでした。これは、お世辞ではありません。歴史

的事実です。

多くのアジアの国々が日本からのODA（政府開発援助）を前提に国家予算を立てたのです。マレーシアのマハティール首相を初め、アジアの国々、インドのシン首相、皆さんが日本から学べといふ「ルックイースト」政策を行いました。このイーストは、決して中国や台湾ではありませんでした。日本から学ぼうといふものでした。日本は、世界一安全な国、世界一か二位の豊かな国、世界一安心して暮せる国でした。これは「でした」と言っても、百年・二百年前の話ではありません。僅か二、三十年前にさういふ日本がありました。世界で最も貧富の差の少ない国でした。世界一の長寿国家になり、世界一便利な国になりました。

私が、日本で勉強して一番得たものは、日本人の公共心、仕事に対する倫理観、他人に対する思ひやりです。そして日本には、「お陰さま」といふ素晴らしい言葉があります。この言葉は、辞書を引いて理解しようと思っても、中々理解できるものではありません。

日本に来て、スポンサーが経営する病院のポイラー室でアルバイトをしました。勤務交代の前に、それまでの勤務者は、きちんとタオルでポイラーを綺麗に拭いて、全部点検した後、業務日誌に記入して、次の勤務者に引き渡しました。私は、ポイラーはどうせ汚れるのだから、後で皆で清掃をすれば良いのではないかと思ひ、最初は何故日本人はこのやうにするのか



と吃驚したものです。その行為は無駄だとも思ひました。しかし、マーク・ツインといふ米国の皮肉好きな文化人が言ふ通り「面倒だと思つたら食事をするな、どうせまたお腹は空くのだから」です。成程、それも言へてるなと思ひました。

来日前は、英国系のキリスト教の学校に通つてゐました。その学校では、毎朝・毎晩祈りをするので、先生達からも、毎日説教をされました。私は仏教徒でしたから、家では毎朝・毎晩、五体投地をし、お祈りをしました。日本の学校では、先生はそのやうなことはなさいませんでした。しかし、人に迷惑を掛けるなといふことを良くおっしゃいました。社会や人に迷惑を掛けるなど。当時の日本では、いちいち友達や他人に相談したりクラスで決めなくても各々に価値基準がありました。常に一人よりも二人、二人よりも三人と、公の利益、仲間に迷惑を掛けない、職場に迷惑を掛けない、そして会社の物であれば鉛筆一本でも大事に使ふ、さういふ日本人の高度な倫理観がありました。これは、正に教育勅語を初めとする過去の日本の宝物として、残したいものであると思ひます。

留学生達は、教科書から何かを学ぶとか、暗記することよりも、今申し上げたやうな、何が日本人を僅か二十五年間で国を再建させ、世界第一か第二位の経済大国に、世界一の技術大国にさせたのかといふことを学ぶべきです。それは日本人の所屬意識です。

ある米国の文化人は、これを「玉葱シンドローム」と呼んでゐます。日本の場合には幼稚園の同窓会、小中学校・高校・大学の同窓会、県人会など、様々なグループを作つてそしてそれらの中において、自分がその一員としての帰属意識、「うちの学校」、「うちの会社」、「同じ県人」、特に私が御世話になつた亜細亜大学や拓殖大学は官僚になる卒業生は余り多くはありませんが、世界中何処へ行つても鞆一つ持つて行けば、誰かがゐます。そして、図々しく御世話になれるのです。かういふ文化がありました。

未来に向けて日本がなすべきことは何か

①もっと自信を持つべきだ

これから、日本が遣るべき事をお話しますが、非現実的なことではありません。日本人が、実際にやつて来たことです。

我々の先輩達は、世界のどの民族に対しても、誇れるやうなことをなし遂げました。日本人が優秀で、他の民族は劣つてゐるといふことはありません。しかし、日本人はもっと自信を持つべきだと思ひます。自信を取り戻すことが、今一番大事ではないかと思ふからです。

父親は父親らしく、母親は母親らしく、先生は先生らしく、男は男らしく、女は女らしくといふことも大事です。何故ならば、「らしく」は「ならでは」だからです。女ならでは、男ならではです。一部の人達が言ふやうにこれは差別ではありません。むしろ我々が持つてゐる、男・女、或る時は父親、或る時は学生、或る時は先生などと、それぞれのその時の役割、その役割における「その人ならではの」もの、それを維持するためには、多少自分自身にも言ひ聞かせることが、大事だからです。緊張感を持つ事も大事です。先生は先生らしく、学生は学生らしくが必要なのです。

テレビを見てみると、先生と学生が恋に落ちる、それは人間の社会だから有り得ることです。あつてもをかしくは無いと思ひます。しかし、それを当り前のやうに、或いはそれを美化するやうに扱ふのは、如何かと思ひます。先生に抵抗してゐる学生の方が何か今の流行であるかのやうにメディアがそれを報道する、さういふ番組を作つてゐます。それも事実であるかも知れませんが、しかし、その事実を報道して社会のためになるか否かといふ価値基準が必要だと思ふのです。

今回、東南アジアの国々、特にベトナムを訪問して思ったことは、アジアの国々は日本に期待をしてゐるといふことです。アジアの国々は決して日本が戦争の犯罪者だとは思つてを

りません。しかし、その日本自身がフニャフニャしてゐて、日本が自らの方向性を示さない限り、どうやって日本にリーダーとしての役割を求められるでせうか。

安倍元首相の著書『美しい国』の中にあるやうに、今暴走してゐる中国、そして今傲慢になつた資本主義、かういふものに対して、過去の経験からも人材の上からも貢献できるのは、日本だけだと思つてゐます。

その中国ですが、世界を制覇する野望がなければ別に問題はないのですが。現に中国は日本の領土を侵し、日本のあらゆる国内のことに關して内政干渉をしてゐます。かういふことを許してゐる限りに於いては、独立国家としての日本の存在はないと言つても言ひ過ぎではないと思ふのです。特に、日本の宗教家達、教育者達、社会のリーダー達も、政治家も同様に「私はかう思ふ」といふしつかりとした主義主張を持つべきだと思ひます。

世界で最も小さい国は、ローマ法王庁（バチカン市国）です。ローマ法王は、世界のあらゆる出来事に必ずコメントします。教義上の理由からでもありますが、夫婦が避妊器具を使つても良いかまで口出しをします。だから存在感があるのです。今の日本は、あらゆる責任から逃げよう逃げようとしてゐるやうに見えます。

四年生の学生に「卒業後何をするのか」と尋ねると「未だ考へてゐません」と答へるので、

「もうすぐ卒業でせう」と重ねて言ふと直ぐには返事が返って来ません。「親御さんは何と言はれてゐるか」とさらに聞くと、「親は、お前の好きなことを遣つて良いと言つてゐて、どうしても時は食はせてくれると言つてゐます」と答へます。これは親の愛情ではなく、父親・母親としての権利と義務の放棄だと思ひます。何時までも親が元気で居る訳ではないのですから。

フリーターも問題です。昔、フリーターが持て囃されたことがありました。「これからは、好きな仕事を好きな時に遣ればよい、素晴らしいことだ」と言つてフリーターを礼賛し<sup>そそのか</sup>唆すやうなことをマスコミがこぞつて報道しました。私は、それには反対でした。若い時は良いかも知れませんが。しかし、やがて結婚し家族を持つたらどうするのでせう。子供の教育や親の面倒を見るといふ責任もあるはずですから。だから今、そのフリーターの人達が、社会の大きな負担になつてゐるのです。

学生時代、小田村先生が黒板に大きな○を書かれました。それは地球上の全人口を表すもので、その中に、小さな点(ドット)を書かれました。そして「私達一人一人は、この点のやうな小さな存在でしかない。だから、謙虚な気持ちを持つべきだ。しかし、同時にこの地球上において私といふ人間は一人しかゐない。この私の存在は大きいのだ」とお教へ下さいま

した。私達は、一人一人が一人の人間として家族構成員の一人となるのです。生れて来る時には母親にお尻を拭いて貰ひ、やがてお母さんのお尻を拭くことは、当然だと思ふのが人の道です。鏡を見ると何時の間にか髪の毛が白くなつてゐる、皺も増えてゐる。若いと思つて居る内に、確実に老いが迫つて来てゐます。現実には甘くはないのです。

## ②インドにもっと目を向けよ

日本が地政学的に戦略的に考察するなら、敵の敵は味方であるといふ考へに立ち、そして対日感情が極めて良い国とより一層関係を深くして行くべきです。さうすることによって、関係の良くない国々までもが自然に付いて来ると思ひます。その為には、インドとより関係を深めることが大事です。さうすることで、アメリカだけではなく、それ以外の核保有国と深い繋がりを持つことになり、いざといふ時、日本が核保有国に負けないためにインドと組む意味は大きいと思ひます。

今、世界全体で見ますと、華僑と印僑といふ人達がゐます。華僑は所謂中国人で、インドシナに多く存在してゐます。先の戦争までは、中国国内で増え続けた人口は段々と南下して行きました。従つて、現在インドシナを中心に華僑が多くゐるやうになつたのです。最近では、これらをかモフラージュする為、「華人」といふ言ひ方をしてゐますが、合はせたら

四、五千万人位になるでせう。

しかし、印僑も負けてはゐません。インド人はかつて英国の植民地であった国々に、英国の手足として連れて行かれました。従つて中東からアフリカにおいては、印僑の方が強いのです。今、世界において二〇一五年から二〇二〇年位までに、インドと中国が世界第三位、四位の経済大国、或いは新たな国際社会のリーダーになるだらうと言はれてゐます。幸ひにして二〇〇二年に、当時の森首相から始つて、小泉、安倍の三人の総理大臣が訪印して、日本とインドの關係は、極めて良くなつて来てゐます。残念ながら、日印議員連盟の事務局長を長く務めた福田元総理は首相在任中、インドを訪問しませんでした。

インド及びその他の南アジアの国々を合はせたら、人口は中国よりも多いのです。教育水準は、中国よりもインドの方が遥かに高い。アメリカの宇宙開発には、インド人が二割から三割関わつてゐます。アメリカのシリコンバレーの三割は、インド人が支へてゐます。アメリカの産婦人科医は南アジアやインド系の人達が支へてゐます。アメリカにゐるインド人達は、選挙の時には大きな資金源となります。そのインドでは、幸ひにしてパール判事、或いは戦後のネール首相のやうに、非常な親日家が多いのです。ネール首相は日本に対して、インデイラといふ娘さんの名を付けたインド象を贈つてくれました。

終戦直後、当時は日本が訪問したくても受け入れてくれる国がありませんでした。今の天皇陛下が皇太子殿下時代に、御訪問を最初に受け入れたのは、インドを初めとする南アジアの国々だったのです。戦後初めて日本を訪問した外国の首脳もインドのネール首相でした。一九五七年のサンフランシスコ講和条約にインドは署名していません。何故なら、インドは折角日本を国連に加盟を認めて受け入れるのであるならば、国連憲章第五十三条の旧敵国条項を削除をすべきである、との意向を表明しました。敵国扱ひをしながら国連に迎へるのはをかしいと言って調印せず、日本とは別に二ヶ国間協定を結んだのです。このインドに対し、日本は礼儀を尽しました。ODAを出すことが可能となって、一番最初にODAの対象国をインドとしたのです。

最近、やうやく日本は、中国への援助よりもインドにODAを表向き沢山出すやうになりました。しかし、ここでまたリメイクを遣つてをり、中国にはアジア開発銀行を通して継続的に援助をしてゐます。援助して貰つたお金や日本の技術を使って、中国は空母を作り、やがて台湾、沖縄を「取り戻す」（中国の言ふ）作戦に出る準備をすべく動いてゐるのです。だからこそ、日本は南アジアの国々に対してもっと積極的に働き掛けをすべきだと思ひます。

③アジアの一員としての自覚と責任を！



次に、安全保障上から言へば、食料の自給率をどう上げて行くかといふ問題があります。もつと農業に対する関心度を高めると同時に、自ら国土を十分に活用して、せめて主食の米を中心とする主要な食料を自給出来るやうにしなければ、今後極めて危険な状況に陥るのではないかと思ひます。

日本は国連（安全保障理事会）の常任理事国となることを目指してゐますが、日本を積極的に支持したのはこのアジアでは僅か三ヶ国でした。モンゴル、ブータンとモルジブのみでした。中国・韓国は堂々と妨害をしました。そして米国は間接的に日本の希望を潰しました。米国は日本に対して、今の憲法のままでは集団的自衛権を初めとして、常任理事国の役割を十分に果たせないとして憲法の改正が行はれるまではお預けとしたのです。さらに、その暁にも拒否権のない常任理事国とするもしました。拒否権のない常任理事国では、意味がありません。もし、米国がさういふのであれば、逆に「天は人の上に人を創らず、人の下に人を創らず」であり、国家も然りであるとして、国連に拒否権制度の廃止を訴へるべきなのです。

現に、北朝鮮に対して非難決議をしようとしても拒否権を持つ中国が反対すれば、それが出来ません。このやうなハンディを背負つてゐるのが国連です。日本は国連中心主義と言ひますが、何の役に立つてせうか。勿論、世界の意見調整を行つたり、数年前のサース（SAR

S) や今回の新型インフルエンザなどの感染症防止には、大変役に立ってゐることは事実です。しかし、国連の本来の目的である平和の構築・維持に関しては、むしろこの拒否権が一番の妨害になってゐます。であるならば、日本が率先して国連の拒否権制度そのものの廃止を訴へるべきだと思ひます。さうして国連の常任理事国を目指すべきだと思ふのです。

それを目指すためには、国連の中の派閥があるわけですから、日本を支持する国が多くなければなりません。アジアブロックから選ばれるアジアの代表として、日本はしっかりとアジア観を持って、アジア各国との連帯を強めてアジアの一員であるといふ自覚と責任を果たさねばなりません。これが何よりも大事だと思ひます。

#### ④先づは国の安全保障の確保を

日本が世界の中の「普通の国」として責任を果たさうとする時には、必ず憲法第九条といふものが一つの障害になって来ます。その憲法を改正しようとする時に、どこからか横槍が入って来て、憲法の前文は残すべきだとか、第九条の二項は残すべしとかとなつたとしたら、そのやうな形で憲法を改正したとしても全く意味がありません。改正する場合には、一番癩となつてゐるものは何かを見定めて、それを摘出しなければ意味がなくなるのです。

私は、戦争を経験し難民にもなり、やがて大学を卒業し外交特権のない外交官を十五年間

遣つて来ました。中国の副首相や台湾の首相とも渡り合つて来ました。私の学問と身を以つて体験したことから言ひますと、民主主義自体を見直さねばならない時期に来てゐると思ひます。勿論、民主主義は今日在る制度の中では、一応一番良い制度であると思はれます。しかし、錆びて腐り掛けて来てゐます。選挙運動における各党のマニフェストを見ても、半徑四百キロ位のことしか眼中にないやうなものばかりです。我々人間は、確かに生きて行く上においては食べる事が大事です。住まひの確保も必須です。着る物も大事、その上、さらにより良い衣食住をも求めます。しかし、人間それだけで幸せでせうか。人間の幸せは、最低限の衣食住の確保、生きて行く上で恐怖のない安心して眠ることの出来る家の確保が必要です。国家の場合は、自分の国がいつ何時他国から攻め込まれるかも知れないといふ恐怖の気持ちで暮すのではなく、安全を確保した上で衣食住が足りること、これが最低限度の幸せの条件だと思ひます。

しかし、幸せの度合ひは精神的なものです。だから、幸せは物質的なものだけで満たされるものではありません。倫理・道徳・宗教、そして人間としての誇り、夢と言つたことが大事になつて来ると思ひます。共通の夢・目的を持つてゐれば、そのエネルギーが段々と大きくなつて、やがてそれが大きな力となり、時代を動かして行くのだと思ひます。共有できる

夢・目的、そして自尊心・誇りといったことがなければなりません。唯、お腹一杯食べて寝るだけであれば、熊でもしてゐます。人間は、それ以外の目的を持つてゐるのです。

各個人の夢、家族の夢・目的、国家の夢・目的、やがて地球人としての責任感、例へば環境問題であるとか、普遍的な価値としての人權であるとか、そのやうなことについて、一国だけでは最早生きて行くことは出来ないのが現状です。

話が戻りますが、そこに「お陰様」といふ日本人の生き方の意味が生きて来る気がします。「お元氣ですか」「お陰様で」、「商売は如何ですか」「お陰様でなんとか遣つてをります」、「試験はどうでしたか」「お陰様で」と、必ず「お陰様」といふ素晴らしい言葉を日本人は使ひます。

##### ⑤ 「お陰様の精神」を世界に

私の来日直前、インドはパキスタンと戦争中でした。従つて、夜勉強する時に、明かりが外に漏れ爆撃の標的にならないやうに、窓ガラスには新聞紙が貼つてありました。さういふ緊張感の中で勉強をしたのです。インドでは停電は当たり前です。日本では一度たりとも停電を経験したことはありません。

かうして留学出来たのも、スポンサーが私を呼んで下さりチャンスを与へて下さつたから

です。勉強が出来る環境を与えて下さったお陰です。本日、ここに時間通りに到着出来たといふのも、日本だから可能でありました。電車やタクシーの運転手さんのお陰であり、日本の技術のお陰であり、様々な方や物のお陰です。二十一世紀を本当に救ふのは、日本から発するこの「お陰様」の思想・考へだと思ひます。

世界にとつても大きな財産になる文化は国によつて異なりますが、私が学んだ亜細亜大学には構内に戦死した卒業生の御霊を祀つた興亜神社といふものがあります。神様とは形にしたものが多いかと思ひますが、しかし、日本では、私達の願ひ事「アジアを興す」といふスピリットが神様になつてゐました。それは戦死した先輩達が願つてゐた理想・目的でもありません。学生時代、何かあると皆で興亜神社にお参りしました。そこにこそ、亜細亜大学の精神がありました。手で触れるものでも、目に見えるものでもないのです。

人類にとつて大事なものは、物質的なものと精神的なものとのバランスです。日本は物質的なものでは、見事に高度な技術を通して素晴らしい達成度を示しました。それとともに大事なものは日本の精神文化です。アジアをリードする、世界をリードできる精神文化が「お陰様の精神」だと思ひます。謙虚であると同時に確固たる信念を持つて、一人一人が貴重な存在であるとの自覚を持ち、「らしく」の気概を持つことが大事だと思ひます。「らしく」ある

やうに、常に意識しなくてはなりません。

時間を守ることも日本に来て学んだことの一つです。約束の時間五分前を守れと先生から教へられました。

もっと自分の国に対して自信を持って欲しい。誇りを持って欲しい。日本だけが古くからずっと一つの国として続いてゐるのですから。米国による占領期以外に、日本は他国の侵略を受けてはゐません。他の国々はしょっちゅう奪つたり奪はれたりして来ました。戦争は、さう特別なことではないのです。何時までもあの戦争に拘る必要はありません。法律は犯人だけに責任を問ひます。家族に責任は及びません。友人にも同様です。しかも法律の目指すものは復讐ではなく更生です。何時までもそれを復讐しようと思つてゐるやうな国々を相手にする必要はないと思ひます。無視することが大事です。まして既に仲直りの条約を締結し国交を樹立して大使を交換してゐるのですから。

友達は財産です。観音菩薩は千の顔と千の手を持ってをられます。沢山の友人を持てば、我々も観音菩薩のやうになれるのです。自分の判らないことは友人に聞けば良いのです。自分が専門でない分野のことは専門家の友人に尋ねれば良いのです。知らないことを知らないとはつきり言ふ勇氣が必要です。知らないことを知ることが本当の知るといふことですから、

良い友人を出来るだけ多く作れば全部を知ることになると思ひます。  
加へて、普段から問題意識を持つことが大事です。





講義

体験と思想

——千秋の人 吉田松陰に学ぶ

福岡県立太宰府高等学校教諭

占部賢志



父直伝の尊皇心

兵学者としてのこのだはり

恥辱の体験から再起へ

尊皇思想、未だ途上

孝明天皇御製を拝す

内なる尊皇体験―「拝鳳闕」

みづから語る思想の転機

吉田松陰に、「万卷の書を読むに非ざるよりは、いづくんぞ千秋の人たるを得ん」といふ言葉があります。「千秋」といふのは、後世永久に残る人といふ意味です。私にとって松陰といふ人は「千秋の人」であります。

これまで吉田松陰は、教育者の鑑、稀代の兵学者、時代を駆け抜けた革命家等々、様々に評されてきました。ここではさういふ肩書きは一旦外したい。私には千秋の人で充分です。

さて、本日の主題は、内村鑑三流に言へば、「松陰は如何にして尊皇の士となりしか」といふものです。

長州藩の兵学師範であり、終生藩主毛利公に対する忠誠心が厚かった松陰が、如何なる体験過程を経て藩の枠組みから国家としての日本意識に目覚め、揺るぎない尊皇思想を抱くに至ったのか、その道筋を時間の許す限り明らかにしてみたいと思ひます。

### 父直伝の尊皇心

まづ始めに、晩年の東送の際に詠んだ漢詩の一節を読んでみませう。

家大人かだいじんに別れ奉る

平素趨庭訓誨すうていくんかいに違ふたが

斯こゝろの行独り識る嚴君を慰むるを

耳には存す文政十年の詔

口には熟す秋洲一首の文

小少より尊攘の志早く決す

「家大人」とは父母に対する敬称、ここでは父杉百合之助を指してゐます。安政六年五月二十三日、江戸護送に際して詠んだものです。

「趨庭」は子が父から教へを受けることの譬へ、「訓誨」は教へそのものを指しますから、「平素趨庭訓誨に違ふ」とは、日頃から父の教へを受けながら、これまでその教へに充分応へることが出来なかつたといふほどの意味でせう。

「斯の行」とは江戸への護送の一件、「独り識る嚴君を慰むるを」とは、この度江戸への呼び出しを受けたが、今こそ父の心を慰める絶好の機会としたいと私は密かに決意してゐる。さういふ心境を直叙した一句です。



このやうに覚悟を定めたとき、松陰の胸には、幼き日に父から度々聞かされた「文政十年の詔」が耳朶に甦るのです。我が尊攘の志はあの往時の体験のたまものだったのだと、今生の別れに追想する松陰の言葉に何の誇張もありません。

文政十年の詔とは、徳川家斉が太政大臣を拝した折、仁孝天皇が下された詔書を指します。この時、家斉は座したまま詔書を受けたくへ、近臣に礼を言はしめる不遜な応対に終始したと伝えられてゐます。

この家斉の振る舞ひを聞いた杉百合之助は憤慨、我が子に絶えずこの時の詔を読み聞かせ、ゆめ皇室尊崇の念を忘れまじと説いて已まなかったさうです。参考までに文政十年の詔全文を掲げておきませう。かういふ詔です。

「徳を旌あたらさざれば、則ち勸善の道欠け、賞を致さざれば、則ち報功の典廢すたる。征夷大將軍源朝臣（第十一代將軍徳川家齊）、武は四方を鎮め、文は萬方に覃およぶ。久しく爪牙の職（武臣の職）を守りて、重きを股肱ここうの任に荷ふ。黎民れいみん鼓腹こふくの樂ありて、蛮夷まつか猾夏うわしの患なく、朝家益安らかにして、海宇かいよ弥平よよかなり。曩さきに宮室きやうしつを新たにして、規模を古へに復し、交りを政典に修めて、祭祀の廢れるを興し、其の功はなは豊は盛ななり。已すでに武備の重職を極むるも、未だ文事の尊官そんくわんに如おらず。今太政大臣に任ず。宜しく左右近衛府各一人、近衛四人の隨身・兵仗を賜ひ、式もつて丕績ひせきを表し、普あまねく天下に告げて、朕が意を知らしむべし。主者しこう施行しこうせよ」

要約すればかういふ内容です。徳川の治世は外圧もなく天下泰平であり、何よりである。しかし乍ら、国民の道徳心は未だ不充分である。今、將軍家齊を国政一新のため太政大臣に任命する。どうか私の意を汲んで民心の安寧に努めて貰ひたい—さういふ趣旨にはかなりません。

ぜひ、辞書を引きながら熟読して頂きたいと思ひます。

詩に戻りませう。「秋洲一首の文」とは、加茂神社の神官玉田永教が著した『神国由来』を指し、これも父から教へ込まれ、成人しても諳んずることが出来る程馴染んだ文章でした。

玉田は全国を遊歴して神道の普及に努めた神道講釈師として名高く、その語りぶりは人として感奮せしめたといひます。『神国由来』の書き出しは、

「恭しくおもんみれば大日本国は神の国なり。神の国と申すは、天地開闢の時神顕れます。是を国常立尊と申し奉る。祭る所伊勢の外宮是なり。此神より七代を過ぎて、伊弉諾・伊弉冉尊淡路の国磯馭廬嶋（いのころじま）にて、天照大神を御誕生あれまし給ふ……」

といふ格調の高さで、神々の物語は少年松陰の心を捉へたに違ひありません。

序でながら、この玉田の後進、二代目玉田玉秀齋が明治後期に創出した講談本が一世を風靡した「立川文庫（たっかは）」であり、「猿飛佐助」はその代表作です。

以上、懐かしい思ひ出の糸を手繰りながら、「小少より尊攘の志早く決す」、私は父の教へのお陰で少年期から尊攘の志を抱いてゐたのだと回想したのです。

兵学者としてのこだはり

かうした少年期の体験が、松陰の尊皇心を生み出した源泉と見てよいと思ひます。しかし、その尊皇心なるものは、必ずしも我が国の歴史に精通した上で育まれたものではありません。その証左は二十一歳の時の書簡に窺ふことが出来ます。

「万一英氣挫け候様の事ども御座候も、古の英雄御覽成さるべく候。險阻艱難程大業を成すに宜しきもの之れなき様存じ奉り候。舜が歴山の險阻艱難は即ち他日の帝位を得られ候本なり。…本朝にても頼朝・尊氏・秀吉・徳川公の跡を見るに、皆艱難を経てこそ天下も定められ候へ」（嘉永三年九月二十九日付郡司覚之進宛書簡）

ここに見る通り、嘉永三年の時点では、かの足利尊氏を邦家の英雄の一人として認識してゐたのです。

そこには尊皇の片鱗は垣間見えません。史上における苦難を克服した人物のサクセスストーリーに共感する域を出るものではなかつたと言ふべきでせう。後年、

「武臣府を開くは頼朝にはじまり、陪臣命を執るは義時に始まり、逆臣国を奪ふは尊氏に起



る。三臣の功、其の罪を償ふに足らず」(安政三年「丙辰幽室文稿」)

と断じたやうな認識とはあまりに程遠いものがあります。

この点、松陰自身が江戸に呼び出しを受ける直前の安政六年春、野山獄中にて執筆した「坐獄日録」の冒頭に、国史に暗かった往時の思ひ出をかう告白してゐます。

「吾れ幼にして漢籍にのみ浸淫しんいんして、尊き皇国の事には甚だ疎ければ、事々に恥ぢ思ふも多けれど、試みに思ふ所と見聞する所と挙げて、自ら省み且つは同志の人々へも示すなり」

幼くして兵学修養の責務を負った松陰にとって、その教育プログラム上のテキストは漢籍が中心でした。それも兵学勉強のための読書でしたから、読み方もその方面に偏らざるを得なかったのもうなづけます。

かうした古典への姿勢はすっかり習ひ性となつて、青年期を迎へても染みついてゐたものと思はれます。

例へば、十九歳の時に『太平記』の会説を始めた折の一文に、「太平記の諸書は其の言、諺

なりと雖も、実に要且つ実にして、兵学に関係するものありて存す」(「未忍焚稿」)とあるやうに、あくまでも戦術戦略を記述した箇所到的を絞って読み取る具合なのです。

それで善しとする風が松陰にはあつたと見てよいでせう。

### 恥辱の体験から再起へ

以上のやうな兵学一辺倒の松陰に国史開眼の契機をもたらしたのが東北遊歴の旅でした。まづその遊歴に至る経緯を紹介しておきます。

九州遊歴から帰参した松陰は、翌嘉永四年三月、藩主の参勤交代に従ひ、初めて江戸へ赴き、寧日なく勉学に励みました。経学並びに兵学の師についての聴講、輪講は月に三十回、その上月二回藩主へ進講。同藩同輩のために大学や論語の会読も主宰、さらには兵書会読研究会を開く。

しかし、努めれば努める程、当地の学風は「江戸にて兵学者と申すものは尊程には之れなき様……」(六月二日付家兄宛書簡)に思はれて来るのです。

六月下旬に至ると、「江戸の地には師とすべき人なし」(中村道太郎宛書簡)とまで断ずるや

うになり、九州遊歴の折の感奮は見る影もなく、寂寥とでもいふべき心境に落ち込みます。その頃でした。この苦悩に追ひ打ちをかけるやうに、他藩の士から恥辱の一言を浴びせられたのです。こんな内容でした。

「且つ日本歴史・軍事類尤も力を用ふべきもの由、或る人に聞き候へども、未だ及ぶに暇あらず。其の人云ふ、「御藩の人は日本の事に暗し」と。私輩国命を辱むる段汗背に堪はず候」(嘉永四年九月二十三日 杉梅太郎宛)

時恰も国史に関する不勉強に恥ぢ入つてゐた時期でもありました。そんな折、「御藩の人は日本の事に暗し」と嘲笑されたわけで、痛棒を食らつた心地だったに違ひありません。この苦い体験は生涯忘れられなかつたはずで、

先に紹介した通り、後年の「吾れ幼にして漢籍にのみ浸淫して、尊き皇国の事には甚だ疎ければ、事々に恥ぢ思ふも多けれど」といふ回想の一句に明らかでせう。

かうして、再び新たななる模索の道を求めて立上がつてゆくのです。その機縁を得たのが九州遊学の折に知己となり、江戸にて再会した宮部鼎蔵です。この宮部と共に兵学者として東

北踏査を決意します。この時は脱藩しての遊歴でした。

松陰一行は相前後してまづ水戸に赴きます。水戸藩は、徳川光圀以来徳川斉昭に至る間、『大日本史』の編纂に当たり、この修史事業を基礎に水戸学と呼ばれる尊皇思想が勃興、注目を集めてゐた御三家の一つでした。

松陰はこの水戸に滞在。後にここでの強烈な思想体験を次のやうに回想してゐます。

「客冬水府に遊ぶや、初めて會澤・豊田の諸子に踵りて、其の語る所を聴き、すなはち嘆じて曰く、『身皇国に生れて、皇国の皇国たる所以を知らざれば、何を以てか天地に立たん』と。帰るや急に六国史を取りて之れを読む。古聖天子蛮夷を懾服するの雄略を觀る毎に、又嘆じて曰く、『是れ固に皇国の皇国たる所以なり』と」(「来原良三に復する書」嘉永五年)

「會澤・豊田」と言ふのは、ともに水戸学の中心人物である會澤正志斎と豊田彦次郎を指してゐます。水戸学双璧の傑物に見えた松陰は、その語る言葉の一言一句に身を乗り出して聴き入ったことと思はれます。傾聴して松陰は重大な示唆を与へられたのです。

それは、「身皇国に生れて、皇国の皇国たる所以」を知るといふ大事、すなはち、日本の国柄とは何かを知る道でした。自分のこれ迄の学問にはこの大事が欠落してゐたと翻然として悟るのです。

松陰は、新たな学問の一つとして水戸学を学んだといふことでは勿論ない。水戸学といふ学風を素材としながら日本が日本たる所以であるところの国柄を学ぶ大事こそ学問の勘所ではないか、と確信したと言つてよいでせう。

ただし、この体験は水戸学から与へられたといふより、みづからの内部に渦巻いてゐた欲求が顕在化したと見るべきだと思ひます。

その証左に松陰は水戸の学風にのめり込むことはなかつたし、會澤正志斎などとのその後の交流も殆どありません。当時評判の高かつた『新論』も幾度か読破してはゐるものの、その影響下に尊皇思想を深化させたわけでもないのです。

国史の大事に目覚めたとはいへ、兵学師範としての使命感には未だ確乎たるものがありました。

### 尊皇思想、未だ途上

さて、東北遊歴を終へ江戸に戻つた松陰は、脱藩の罪により五月以降郷里で謹慎、父百合之助の育はぐくみとなります。

その後の嘉永六年一月、十年間の諸国遊学を許されることになるまでの八ヶ月の屏居のあひだ、堰を切つたやうに国史関係の夥しい書籍を読破するのです。その消息はこの時の読書記録「睡餘事録」に痕跡を留めてゐます。

「嘉永壬子みづのえね五月十二日、国に帰る。爾後、屏息へいそくして首を一室の中に縮め、以て斧鉞ふまづの誅を待つ。昼は則ち暑を懼おそれ、夜は則ち蚊を憎み、惟ただだ睡ねを是れ愛す。然れども進みて一時に將相たる能はずんば、退きて聖賢を千古に尚友するは平日の志なり。ここを以て睡を愛するの餘、亦敢へて素志を廢せざるなり。

身皇国に生れて、皇国の皇国たるを知らずんば、何を以て天地に立たん。故に先づ日本書紀三十巻を読み、之れに繼ぐに続日本紀四十巻を以てす。其の間、古昔四夷しやうふいを懾服しやうふくせし術にして後世に法とすべきものあれば、必ず抄出して之れを録し、名づけて皇国雄略と為せり」

ここに明らかなやうに、江戸における屈辱、並びに愁眉を開く契機となった水戸体験は、松陰をして新たな課題に向かはしめたのです。

しかし、この時点でも関心の赴くところは「古昔四夷を攝服せし術」にあり、「皇国の皇国たる」ゆゑんを求める歴史体験だったとは言ひ難いものがあります。

抜き書きの「皇国雄略」を物したとありますが、これは今日残存していません。ただ、戦前の岩波版『吉田松陰全集』編集委員の一人玖村敏雄氏によれば、「屏居読書抄」と題した松陰手づからの抄録があり、日本書紀、続日本紀、日本逸史、続日本後紀、三代実録、文徳実録、職官志、令義解に関する抜き書きが纏められてゐると伝へられてゐます。

これらは全集に収録されてはゐないものの、松陰の所感や跋文の一部は活字化されてゐて、幕末の西力東漸を意識した兵学者らしい読み方が明瞭に窺はれる資料です。

例へば、日本書紀を読んで「古、聖天子の雄略を觀深く觀ずる所あり」と感奮しながら、日本三代実録の読書に至ると、「嗚呼、桓武崩じたまひて天覆遍からず、田村將軍薨じて地載闕くるあり、吾れ復た何をか觀んや。未だ六国史を畢らざるに長嘆して卷を掩ふ」と嘆く一文が見えます。

日本三代実録は、平安前期の清和天皇、陽成天皇、光孝天皇三代に及ぶ三十年の事績を叙

述した編年体の官撰史書です。

六国史のなかでも詳細を極め、ドラマチックな展開に乏しいこともあり、松陰が嘆息したのも無理はありませんが、それにしても「桓武崩じたまひて天覆遍からず、田村將軍薨じて地載闕くるあり」とは、穏当ではありません。

かうした読み方にも兵学者としての本能が顔を覗かせてゐます。古代史における外征や遠征に見られるダイナミズムには興味がそそられても、皇室を中心とする国柄の真髓を学びとらうとする態度は未だ途上にあつたと言へるでせう。

### 孝明天皇御製を拝す

松陰の論策に国体論を主題に据ゑて書いたものは殆どありません。古典の読後感や書簡、時務論、時には往復論争などの色とりどりの文章に自づと顔を覗かせてゐるといふのが、その特色と言へます。またそこがいかにも松陰らしいところですよ。

兵学者を任じて天下の動静を睨みながらも、みづからの拠り所を模索して行きつ戻りつ核心に迫つて行く。その生きた足取りが何にもまして松陰の魅力だと思ひます。世間によく見



られる道学者流の臭みなど微塵もありません。

この人が本格的に尊皇の心に開眼する契機となったのは、嘉永六年十月一日のことです。折しも、長崎に来航したロシア艦に乗り込み海外視察を目論んで西下する際、京都に足を踏み入れます。これまでも入京の機会があったにも拘はらず、敢へて立ち寄ることはありませんでした。したがって、これが初の京都体験となりました。

この折と二ヶ月後の十二月にも入京、いづれも勤皇の詩人として知られてゐた梁川星巖を訪ねてゐます。佐久間象山の勧めによるものと思はれますが、面会して朝廷の様子を具に聴いた松陰は、皇室に対して観念としてではなく、胸迫る体験として受け止める機会を得るのです。

どのやうな内容であつたか。のちの安政五年七月に書いた「時義略論」に、この時の体験が記録されてゐます。五年近く経てはゐましたが、余程印象に焼き付いてゐたに違ひありません。松陰の思想体験として極めて重大なことと思はれますので、そのくだりを引いておきます。

「草莽そうぼうの聞く所を以てするに、癸丑みづのえ六月、墨夷浦賀渡来以来、毎晨寅まいしんの刻より玉体を齋戒さいがい

し、敵国懾伏、蒼生安穩を御祈願なされ、供御一日兩度の外は、召上がられぬ程の御精誠にして、「朝な夕な民安かれと思ふ身の心に掛る異国の船」との御詠は、又是れより前の御事にや。

かくて安政改元の詔書、梵鐘を鑄換へて大礮小銃と為すの宣命等の事ありて、今戊午の春に至り、終に墨使の事に六年の宸怒を発し給ふこと、豈に容易の事ならんや。然るに、征夷毫も其の旨を奉承し給はぬこと、宸衷何程か苦惱に思召さるることにやあらん。然れば、一日も早く是れを安んじ奉らでは、臣子の道、いかでか尽せりと申すべきや」

冒頭の「草莽の聞く所」といふのが、梁川星巖から伝へ聞いた体験を指すのは言ふまでもありません。

「癸丑」は嘉永六年、「墨夷浦賀渡来」とはペリー来航事件のこと。孝明天皇は、寧日なく未明の午前三時から五時にかけて齋戒沐浴、列強を退け国家国民の安寧を祈願される日常を送られてゐたのだと、初めて知ったのです。

この時、梁川が示した御製は松陰の心中深く刻まれたはずでせう。ただし、この御製は幕末・明治期の有職家で子爵六角博通所蔵の叢書には、

あさゆふに民やすかれとおもふ身のこゝろにかゝる異国の船こしくに

とあり、現在はこの形で伝へられてゐます。松陰の場合、梁川からの仄聞だったため、表現上に微妙な異同が生じたのだと思ひます。

米艦来航に直面して幕府の要路にある者達が心痛の極みに達したといふのなら当然のこと  
でせう。ところが、江戸から遠く離れた都にあつて、旧態依然とした公卿らに十重二十重に  
囲まれてゐた孝明天皇が、他の誰よりも日常の全てを捧げて国難に立ち向かつてをられたの  
です。

この時の松陰を襲つた驚愕と感動のほどが惻々と伝はつてくる体験記です。時に松陰  
二十四歳、我が国が戴く天皇御存在の意味をつくづくと覺らしめられたひとときであつたに  
違ひありません。

内なる尊皇体験——「拝鳳闕」

こうして嘉永六年十月二日朝、松陰は皇居を拝し、感極まつて一詩を賦しました。従來の

観念的な尊皇心に生命が宿った瞬間でした。「ほうけつ拝鳳闕」と題した漢詩です。

山河襟帯自然の城、

東来日として帝京を憶はざるなし。

今朝かんせう監嗽して鳳闕を拜し、

野人悲泣して行くこと能はず。

鳳闕せうけつ寂寥にして今古に非ず、

空しく山河のみありて変更なし。

聞くならく今上聖明の徳、

天を敬ひ民を憐む至誠より発したまふ。

鶏鳴乃ち起きて親みづから斎戒し、

妖氛ようふんを掃つて太平を致さんことを祈りたまふ。

従来英皇不世出、

悠悠うゆう機を失す今公卿。

人生萍うきくさの如く定在なし、

何れの日にか重ねて天日の明を拝せん。

「鳳闕」は皇居の謂、「山河襟帯」とは山が恰も襟のやうに囲み、河が带状に流れる要害の地である都を表現したものです。

前日に梁川から教へられた孝明天皇の御深憂に衝撃を受けてゐた松陰は皇居に向向き、「盍嗽」すなはち身を清めて皇居を拝し、「野人悲泣して行くこと能はず」と言ふほかないほど感極まった。この一句に松陰の人となりが言ひ尽くされてゐると私は思ひます。

当時、天下国家を論じては国体の尊厳を叫び、人心を擱まうとする野心家も多かつたことであらう。今日とて似たやうな言論は至るところに見られます。

さうした概念思弁の風潮と松陰の思想が決定的に一線を画するのは奈辺にあるのか。「野人悲泣して行くこと能はず」といふ痛切な体験のありやなしやの一点にあるのだと、私は確信します。

「鳳闕寂寥にして今古に非ず」、皇居を仰げば、そのたたずまひは寂しげで往時の面影はなく、山河だけが空しく目に映るばかり。初めて皇居を拝した松陰にとってその森閑とした様子は胸が詰まるほどのものだったと思はれます。

しかし、さうした環境にありながらも、孝明天皇は黙々として天皇としての務めを果たされてゐる。「天を敬ひ民を憐む至誠より発したまふ。鶏鳴乃ち起きて親ら齋戒し、妖氣を掃つて太平を致さんことを祈りたまふ」の詩句こそ、梁川星巖から聴いた孝明天皇の御日常を表現したものです。

ところで、この「聞くならく今上聖明の徳」以下の詩句については後日談があります。

松陰門下の一人、品川弥二郎は明治を迎へて、この先師の漢詩を岩倉具視に見せたことがあるそうです。岩倉は読み終はるや、かう感想を語つたといひます。

「是あるかな、吾れ平素玉座に親近し、備つとさに先帝の御性行つまひらを審にし奉り、深く其の勵志刻行に感激し奉れり。先帝には毎朝鶏鳴の候に至れば必ず親みづから沐浴齋戒して、外敵膺懲ようちやう、皇威宣揚を祈り給はずと云ふこと無し。此の詩は実に先帝の御性行を写し尽して一字も虚飾を用ゐず。吾れ実に松陰の善く先帝を知るの深きに感ぜざるなき能はず」

文中の「此の詩」とは「拜鳳闕」を指します。孝明天皇の側近として仕へた経験を持つ岩倉にしてこの言あるを思へば、梁川星巖がいかにも正確な皇室情報を有してゐたかが判明し

ますし、また松陰の聞き取りの正確さも窺はれて興味深いものがあります。

かうして松陰の胸中には、尊皇の具体的な人格像が息づき始めたと言つてよいでせう。思想の画期といふものは、このやうにして訪れるものなのです。

### みづから語る思想の転機

さて、松陰の関心事は我が国体の真実を明らかにする方向へ向かひ始めます。翌安政元年以降の読書もその色合ひが濃厚となつて行きます。

主な文献を挙げると、頼山陽「日本外史」、浅見綱斎「靖献遺言講義」、青山延子「皇朝史略論」、藤田東湖「弘道館記述義」、會澤正志斎「新論」、山鹿素行「配所残筆」、山県大貳「柳子新論」、本居宣長「古事記伝」など次々と読破してゐます。

時恰も、下田踏海に失敗して野山獄に投じられ、その後出獄を許され萩の地で杉家の預かりの身となつてゐた頃です。時間は存分にあつた。その読書日記を見れば、昼間は訪問客と懇談或いは輪読、夜は父や兄と対読に励むといった読書三昧の日々が続いてゐます。

右の文献中「弘道館記述義」や「柳子新論」などについては、筋金入りの尊皇の士だった

父百合之助も関心が高かったのでせう、父と二人対面して読み続けてみます。安政三年秋を迎へた頃のことです。

かうした研究成果の一つと見られるのが、この間の安政二年正月に書き下ろした「士規七則」です。その第二則に、

「凡そ皇国に生まれては、宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし。蓋し皇朝は万葉一統にして報国の士夫は世々禄位を襲ぐ。人君は民を養ひ以て祖業を続きたまひ、臣民は君に忠にして以て父志を継ぐ。君臣一体、忠孝一致、唯吾が国のみを然りとす」

との一文があります。

我が国の上古における海外雄飛の事績にばかり心を奪はれがちだった兵学者が、皇室を中心に国民としての同胞感を築いてきた国柄の意義を説いてゐるのです。松陰の思想の成熟を示す証左と見ることが出来ます。

さて、この士規七則の述作から二年近く経た安政三年十一月、松陰はみづからの思想の転機に関して率直に回顧した注目すべき一文を草してゐます。



「天朝を憂へ、因つて遂に夷狄を憤る者あり、夷狄を憤り因つて遂に天朝を憂ふる者あり。余幼にして家学を奉じ、兵法を講じ、夷狄は国患にして憤らざるべからざるを知れり。爾後徧く夷狄の横なる所以を考へ、国家の衰へし所以を知り、遂に天朝の深憂、一朝一夕の故に非ざるを知れり。然れども其の孰れか本、孰れか末なるは、未だ自ら信ずる能はざりき。向に八月の間、一友に啓発せられて、矍然として始めて悟れり。従前天朝を憂へしは、並夷狄に憤をなして見を起せり。本末既に錯れり、真に天朝を憂ふるに非ざりしなり」

これは「丙辰幽室文稿」に収録の「又読む七則」と題した赤川淡水の時務論に対する批評文の一節です。

ここで論じてゐる「天朝を憂ふる」とは皇室を戴く我が国体の内的危機感、「夷狄を憤る」とは西力東漸の外圧から生じる危機意識を指してゐるのは言ふまでもありません。

松陰は言ふ。これまでの我が思考過程は、どうも本末が顛倒してしまつてゐた。すなはち、対外的危機感のみを前提として天朝を憂へてゐたに過ぎない。

先の八月に一人の友人から、この点を指摘され翻然として悟つた。確かに自分にはこの国の本質に思ひを致すところから見を起こす姿勢に欠けてゐたのだ。

考へてもみよ、折からの外圧がなかったなら、天朝を思ふこともなかったやも知れず、国民の一人として何といふ危ふい道を歩いてきたことか。さういふ自省の声が聞こえてくるやうな切実な告白です。

なほ、松陰に一大転機をもたらした「一友」とは誰であったか。松陰は具体名を記さなかったため、今に至るも不明ではありますが、松陰研究家の玖村敏雄氏はおそらく黙霖だったらうと推定してゐます。

いづれにしても、当時の志士たちのあひだには、攘夷実現といふ大義のためにその手段として尊皇を説くといふ怪しげな傾向が強かったのです。それが世俗一般の攘夷家、慷慨家の思考パターンでした。

さうした陥穽からみづからを救ひ出して行く紆余曲折の自問自答がそのまま彼の尊皇思想と化した。膨大な遺著はその結晶であります。

会員発表

「ミュンヘンde寺子屋」の  
実施と欧州見聞録

(株) 寺子屋モデル講師

横畑雄基





## 「寺子屋モデル」とは

合宿も三日目の日程が終らうとしてをります。実は大学二年生するとき、この厚木市七沢での合宿教室に参加したことが国民文化研究会との出会ひでした。その同じ会場で、かうしてお話が出来ること運命的なものを感じてみます。

さて、私が勤めてゐる「寺子屋モデル」といふ会社ですが、「寺子屋」と聞くと、皆さんどのやうなイメージを抱かれますか？多くの方は、江戸時代の子供達が「読み・書き・算盤」そろばんをしてゐる様子を想像されると思ひます。私達を取り組んでをりますのは、歴史上に数多くいらつしやる偉人の「言葉」や「勇気ある行動」「その人生」をお伝へすることで、いま生きてをられる人達の生き方のお手本にしたいだければといふことです。

例へば、今日、占部賢志先生から吉田松陰についての御講義を伺つて、皆さんも「こんな言葉を残されてゐたのか」「こんな生き方をされたのか」といった感動を覚えたことでせう。残念ながら現在の教育の現場では、歴史上の人物が残された言葉やその生き方について具体的に触れる機会が少ないやうに思はれます。そこで私達は、お宮、会社、幼稚園へと、あち

こちらに出向いて、様々な偉人の生き方をお示ししてゐるのです。

「お宮de寺子屋」では、二ヶ月に一度、はこみやう 筥崎宮といふ福岡市東区の、九州でも有名な神社の社務所で、氏子さんや口コミで集まられた皆さんの前で偉人伝を語ります。多いときは五十人を超えることもあります。「会社de寺子屋」では、社員研修の一環として偉人伝を語り、さらに参加者には「我が家の家訓」を作成してもらひます。偉人の生き方や古典の言葉から汲み取った、自分はこの言葉を大切にしたいと思ふものを自分の目標として、また家族の皆がその目標に向つて頑張つて行かうといふことで挑戦してもらひます。

私が一番楽しみにしてゐるのは「幼稚園de寺子屋」です。この仕事に就くまで私は全然気が付きませんでした。が、幼稚園児つて、どんなことでも吸収するんですね。例へば、漢字は難しいから子供には分らないだらうと思ふかもしれませんが、子供達は平仮名よりも漢字をすぐに覚えてしまひます。私共の偉人伝講座では、偉人の言葉そのままを子供達に伝へます。例へば西郷隆盛の場合、「幾度か辛酸を経て、志、初めて堅し。丈夫、玉碎、瓦全を愧づ」といふ言葉を示します。そして一緒に言つてみようと思ひ出して言はせてみます。すると、二、三回繰り返しただけで、もう一人で言へる子供がゐるのです。勿論、意味は分らないでせうが、記憶にとどめることで、成長するに従つてやがては意味内容を噛み砕くやうになるはず。

このやうに、子供の能力は本当に果てしがらないなあと日々気づかされてゐます。

### 寺子屋モデルと国文研の学び



いまの仕事に就くまで私は故郷岡山県の高等学校で社会科の講師をしてをりました。その頃の私が授業に取り組む姿勢は、やはり知識を伝えることが中心だったと思ひます。教科書の中身を覚えさせて、そしてテストで少しでもいい点数をとってもらふ、さういふことの繰り返しが多かつたやうに思ひます。今の寺子屋モデルでは、自分自身が偉人の言葉に触れてどれだけ感動したのかといふ、その感動や自らの心の動きを、そのまま聞き手に示していくことが必要です。教員時代とは大きな違ひです。

さて、その私が寺子屋モデルに勤めるきっかけと

なつたのも、この国民文化研究会です。私は国文研の学びの中でもっと深く勉強させてもらふために、正大寮といふ学生寮に入つて、四、五人の仲間と共同生活をしました。その当時の、国文研事務所の事務局長が私共の社長、山口秀範さんで、当時から厳しいご指導を頂いてをりました。海外勤務の長かった山口さんは日本の教育はこのままで本当にいいのか、何とか日本の教育を良くして行きたいといふ思ひを持つてをられました、当時からよくその話を伺つてゐました。私も故郷の岡山で何とか教育を良くして行きたいものと思つてをりましたが、なかなか思ふやうに行かないなあと感じてをりました。

講師生活が五年ほど続いたとき、山口さんから、「寺子屋」を始めるからお前も来ないかと誘はれました。「寺子屋」で「教育を良くする」と言つても、これから立ち上げる会社ですから、安定した収入が得られるかどうか分りません。随分と悩みました。けれども、私にもこの日本の教育を少しでも良くして行きたいといふ思ひがありましたので、入社を決断した次第でした。



## 創業期の寺子屋モデル

しかし、初めは自分自身、高校の教員時代の「教へ方」からなかなか抜け出せず、どうやって感動を伝えればいいのかといふ点で苦労しました。偉人の一生をそのまま平板羅列的に伝えてしまふ傾向が強く、偉人伝とは言ひながらも聞き手には「つまらない」ものだったはずで、うまく行かないことに葛藤がありました。

また、出来たばかりの会社です。最初の内はお客様がありません。山口社長の人徳のおかげでいくらかは寺子屋の出前授業を依頼してくださいさる会社はありましたが、無我夢中の日々が続きました。しかし一昨年あたりから、「偉人の生き方を伝えようと新しい事業を起した人がゐる」と、新聞などのマスコミで取り上げられるやうになり、その記事を見た方々を初め、人から人へとご紹介の輪が繋がって、会社を取り巻く人脈も事業の幅も広がって参りました。

そんな中で、ドイツ・ミュンヘンの日本人学校で理事長をされてゐた小泉公人さんといふ方から「ミュンヘンで寺子屋を実施できないか」といふメールが届いたので。ミュンヘン

はドイツの工業都市です。海外で寺子屋を実施できるかもしれないと聞いて、何かすごいことになってきたかと驚きました。と同時に、今迄やってきたことの成果をさらに示すチャンスなのではないかと思ひました。

### 「ミュンヘンde寺子屋」に向けて

ミュンヘンde寺子屋ですから、現地で生活してゐる在留邦人の方々にどの偉人のどんな生き方を語ったらいいのか、随分考へました。そこで選んだのが次の三人です。

一人目は小学校一・二年生向けに「紫式部」です。実施する時期が、丁度源氏物語千年紀を迎へてゐた昨年（平成二十年）の十一月でした。千年前から連綿と続く日本文化の深さや日本人の感性を同時に伝へたいとの想ひから選びました。

次に小学校五・六年生向けには伊藤博文、同じく三・四年生向けには北里柴三郎を選びました。伊藤博文は若い頃、ドイツで大日本帝国憲法の制定ための事前調査研究で大変苦心してゐます。北里柴三郎もドイツで破傷風菌の研究に取り組みます。異国で苦闘した彼等の生き方を、同じくドイツで学んでゐる子供達に感じて取ってもらひたいといふことから選びまし

た。

今回この合宿で特にお話したいと思つてをりますのは、北里柴三郎の準備した時の私の経験です。

北里柴三郎は今の熊本県小国町出身です。庄屋の息子で、後を継がなければならなかったのですが、柴三郎自身は政治家か軍人になって、日本の国をもつと良く、そして強くしたいと考へてゐました。家業を継がせたいと考へてゐる両親はそのことを許してくれない。しかし、医者になつて地元に残るのであれば、勉強のために一時期家を出てもいいと言はれたので、家を出るために仕方なく、熊本医学校に進学します。とは言つても医者になる気は全くない柴三郎は勉強にも身が入りません。このままでいいのか、そんな葛藤の中で医者になる決意を固め、そしてドイツに留学します。ドイツで学んだのが、細菌学の世界的権威であつたロベルト・コッホ先生なんですね。コッホ先生の下で大変な努力をされ、世界の誰もがさじを投げた「破傷風菌」の研究に取り組みます。第一回ノーベル賞候補者にも挙げられたほどです。

合宿教室での学びにも繋がりますが、私共が偉人のお話をする際、その偉人とどれだけ向き会へるかを大切にしてみます。やはり、生まれた場所に行つてみようと思ひまして、生ま

れ故郷の小国町を尋ねてみました。そして、北里柴三郎に関する多くの資料や本も読み、準備万端、講義案を整へて事前の社内勉強会に臨みました。

### 偉人伝を語ることは？

しかし、私のプレゼンを聞いた山口社長は一言「なんか、つままないね」と評したのです。ショックでした。なぜならば、私も精一杯、準備をしたつもりだったからです。何がまづいのかと振り返りつつ、もう少し細かく整理をして、再度挑戦しましたが、やっぱり余り変らないとの評価でした。数回やりましたが、「これでは駄目だ」と言はれ、つひには「本当にドイツに行く気があるのか」とまで言はれました。本当にショックでした。私も五年ほど高校で教壇に立ってゐましたし、三年間寺子屋モデルで頑張ってきたから、何で駄目なんだらうと本当に悩みました。

しかし何回やっても駄目なのは、何か自分に原因があるのだと考へました。何が違ふのかとよくよく考へてみると、やはり、どれだけ北里柴三郎といふ人間とつきあつてゐるのか、このつきあひ方が浅かつたんじゃないかと気づいたのです。

例へば先ほど言ひましたやうに、私は北里博士の生家を訪ねて、幼少の頃の姿を想像しました。そして本や資料を読んで、「北里博士はドイツに行つて苦勞しながら研究をされたんだな」と共感したつもりでゐました。しかし、実際に北里博士が背負つてゐたものは一体何か、そのあたりを余り感ずることなく話を組み立ててゐたのではないかと思つたのです。

北里柴三郎がドイツに留学してゐた時期、我が国はまだ日清日露戦争の前ですから、欧米諸国の根強い人種差別を受けてゐた時代です。「いくら北里が優秀でも、破傷風菌の研究なんか、黄色人種の日本人に出来るはずがない」、そんな偏見の中に彼はゐたのです。北里柴三郎は、ここで自分が失敗したならば、やっぱり日本人は駄目なんだと、すべての日本人が馬鹿にされてしまふ、それは絶対に許されないといふ気概を持ち、日本を背負つて戦つてゐたんだ。だんだんとさういふ部分にも気づいてきました。寺子屋で皆様に感動を伝えたいといふ気持ちを持つてゐたはずの私でしたが、偉人に焦点を絞つて話すならば、その人物と自分を重ね合はせてお話をする、そんなことが出来てゐなかつたのではないかとつくづく感じました。

そして何より大切なのは、ドイツで待つてゐる子供達が、何を期待してゐるのかだと思ひました。私はそれまで海外に行つたことがなかつたのですが、海外で生活をしてゐる日本人

にとつては、自分が日本人であるといふことをどれだけ誇りに思へるかが、日々の生活の中で心の支へなのではないかと思ひました。

実施の当日、昨年十一月十日です。自分なりの精一杯の偉人伝を用意して、日本人学校の子供達に語りました。その中身は、今迄お話ししましたやうに、北里柴三郎は「日本」を背負ふ気概をどれだけ強く抱いて、ここドイツの地で勉強に励んだかといふことを精一杯伝へました。話の途中で、ある子供が「へー、すごいなあ」といふ言葉を發してくれたのです。この言葉が耳に届いた時には本当に助けられたやうな氣がしました。今日、その子供達が残してくれた感想文の一部を持って来ました。一寸読ませていただきます。

「わたしは北里しば三ろうさんのお話しを初めて聞いて、たいへんえらい人だつてことがわかりました。せかいをすくつたしば三ろうさんは、コッホ先生に負けないくらいすごかったです。ヨーロッパだけそんけいしていたわたしは、日本の北里しば三ろうさんのことで日本のいいところのじまんになりました。……」(文字遣ひ・かな遣ひママ)

この子は小学校三年生です。私の話の中で、私が最初に思つてゐた、ドイツにゐる子供達

に何とか日本人としての誇りを持つてもらひたいといふ、そのことは伝はつたのではないかと思ひました。そして今回、本当に自分の言葉が出てくるまで悩みました。ドイツに行きたくない、事前勉強会でまたあの社長の顔を見なければいけないかと、本当に辛い準備期間でした。けれども、偉人に接して、その人物の生き方そのものに「スゴイなあ」と心が動いてゐるはずなのに、人物の胸の中に迫ることなく、例へば「ノーベル賞候補に挙げられたこと」がスゴイでせう、と話の腰を折つてしまふ、そんな構成をしつづけてゐたことにも気づきました。

寺子屋の講義では幼稚園児から社会人までいろんな会場でさまざまな年齢層の人達に語り掛けますが、その一回一回が勝負です。それにしましても海外の日本人学校で寺子屋授業を実践するとは、三年前には想像もできないことでした。海外に住む人達は折にふれて「日本人とは？」「日本人らしさとは？」と考へる機会が多いと思はれますが、その地の日本人学校から偉人伝講座の依頼が来たといふことは、寺子屋モデルの目指す授業内容改善の方向性が「国民教育の道筋」に沿つてゐることの一つの例証のやうに思はれました。自分自身、毎回の偉人伝講座に対して、待つてゐる子供達が何を期待してゐるのかを改めて考へさせられた貴重な経験でした。

## 欧州見聞…ポーランドで感じた「歴史教育」

さて、「ミュンヘンde寺子屋」の後、ヨーロッパの国々を少し回りましたが、その中で今回どうしても伝へたいことがあります。それはポーランドに行ったときのお話です。

ポーランドという国は、世界史上、地図から何度も消えてゐる国なんです。ドイツ、ロシア、オーストリアといふ大国に挟まれ、常に国土を侵略されてゐました。そんな国ですが、第二次世界大戦後には、昔から護り続けているポーランド語を母国語として国を再建してゐます。戦後六十年を経て、わが日本は大変な憂ふべき状況に置かれてゐますが、何故日本はたった一度の敗戦で弱ってしまつてゐるのか、ポーランドは何が強いんだらうと、昔から思つてゐたのです。

偶然にも、ワルシャワ大学で日本語を学んでゐる女子学生にポーランド各地を案内してもらへる幸運もあつて、日本語での通訳をしてもらひながら各地を巡りました。その彼女は父親と一緒に住んでゐまして、その家にホームステイした時、お父様から様々な質問を受けました。その中で「あなたはポーランドのどんな人を知つてゐますか？」と聞かれました。私



は、「コベルニクス、キュリー夫人、コシチュシユコなど、よく知ってゐます」と答へました。すると、「この人はどうだ、シヨパンは知ってゐるか、前のローマ教皇ヨハネパウロⅡ世は知ってゐるか」と人の名前をどんどん浴びせかけてくるのです。そして私が寝ようとするときにも「さつき言ひ忘れたけど」と部屋に入ってきて、「政治家でワレサつてのがゐるんだけど、知ってゐるか」とそんなことを聞いてくるんです。私は、あなるほど、ポーランドといふ国は、偉人を本当に心から尊敬してゐて、親が子に毎日のやうに語り伝えてゐるんだなど感じたのです。

もう一つあります。ワルシャワ蜂起記念館といふミュージアムに行ったときのことです。第二次世界大戦末期、ポーランドの首都ワルシャワがナチスに占領されてゐた時、間もなくソ連軍が解放に来るといふ噂を聞いたワルシャワ市民が、ソ連に頼らず自分たちでドイツ軍を追ひ払はうと立ち上がったことがありました。しかし蜂起したワルシャワ市民はナチスの反撃に遭ひます。そして一ヶ月近い攻防の末、ワルシャワは壊滅され破壊されました。合理的に見れば、ソ連が解放に来るのを待てば良いと思ふでせう。しかし、ポーランド人は、「自分の国は自分で護るんだ」といふ気概を持ってナチスに立ち向つたわけです。その英雄的な姿を偲ぶためにこのミュージアムがあるのです。

このミュージアムは、日本で言へば靖国神社の境内にある遊就館ゆうしゅうかん（戦没者の遺書や遺品などを展示）のやうなものではないかと思ひます。彼女にはそこでも通訳をしてもらひましたが、元々彼女はこのミュージアムの存在は知つてゐたけれどもきたことはないし、関心も無かつたと言つてゐました。今回、私と一緒に初めて足を運び、一緒に見学したのです。

ところが、最初は詳しく通訳をしてくれてゐた彼女が、気がついたら通訳しなくなりました。何と、彼女自身がしんみり写真や遺品と資料に見入つてゐるのです。私は英語もポラード語も解しませんから、その場は見入つた写真で状況を想像し、彼女の気持ちを偲ぶしかなくなりました。そしてその帰り際です。「ここには改めて私のお父さんと来たい」、さう言つたのです。この言葉は皆さんの胸にどう響くでせうか？それまで歴史や先人の行為に関心が無かつた人でも、誰かの生き方や、先人の功績業績に具体的に触れて心が動いたら、「家族と一緒に来てみたい、特にお父さんと一緒に来て、ここでいろんな話を聞いてみたい」と思ふものだ、さういふことを彼女は教へてくれたやうに思ひます。

をはりに

冒頭でお話したやうに、私達は多くの人達に偉人の言葉を知って頂き、そして生きる力にしてもらひたいといふ仕事をしてゐます。ポーランドで、女子学生のお父様に私の仕事内容をお話しすると、「何でそんな会社が存在してゐるか意味が分らない」と言はれました。当然です、ポーランドでは、日頃の家庭生活や学校教育の中で、偉人伝教育は当り前のこととしてなされてゐるではないですか。しかし残念ながら、現在のわが国ではそれが充分に出来てゐない。だからこそ、誰かが取り戻していかねばならない。そして多くの人が、家庭で、自分の子供や孫に偉人伝を当然のやうに伝えていく、そのやうな世の中を取り戻さなければならぬと、改めて強く感じました。

私達は、この日本の国がもっと良くなっていくために、様々な偉人の生き方や言葉を更に学ばねばならないと思ひます。そして、かつての日本のやうに、誰もが当り前のやうに自分達の先祖がどのやうな想ひで苦闘されたのか、立派な業績を残されたのかに思ひを致して、そのことを子供に伝へざるにはゐられないといふやうな思ひに充ち満ちた、そんな日本の国にしたいものと思つてをります。

つたない話でしたがこれで終ります。ご清聴ありがとうございました。



会員発表

私を支へる言葉、和歌

伊佐ホームズ(株)

小柳雄平





## はじめに

私は平成十八年に大学を卒業し、伊佐ホームズ株式会社といふ会社に勤めて今年で四年目になります。主に注文住宅の設計、施工を致してをります。

昨日、担当をしてゐます物件の上棟式を執り行つて参りました。お施主さまとそのご親族の方々、大工、鳶の職人の皆さまがとても和やかな空気の中で談笑をし、お酒などの飲み物を酌み交はす様子を拝見してをりますと、家づくりといふ仕事をさせていただいてゐる喜びと、緊張感が改めて感じられました。

その上棟式に、私の祖母の生家で造つてをりますお酒を祝ひ酒として持参し、皆さまに飲んでいただきました。すると、お施主さまのお父さまから「自分の故郷を大事にしてゐるといふ事は非常に素晴らしい。そのお酒を持ってきてくれたことが本当に嬉しい」といふこととに有難い言葉をいただきましたことが大変印象に残つてをります。

さて、「会員発表」といふことでお話をさせていただきます。

皆様は、各班で短歌の相互批評をされて、感じたことを正直に正確に和歌に詠むことのむ

づかしさ、相手に本当に伝はる和歌を詠むことのむづかしさを感じられたと思ひます。しかし、皆と一緒に自分の心を見つめながら、皆に伝はる歌を正確に詠めたとき、自分の気持ちにピッタリの表現になったときは、非常に嬉しく思はれたのではないかと思ひます。

私も学生時代にこの合宿に参加したことを契機として、和歌を詠み始めました。いつまでたっても、自分の気持ちを正確に表現することはむづかしいものだと思つてをります。

本日は体験発表といふことで、会社に勤め出してからの体験をもとに、私の心に響いた言葉、和歌などをお伝へできればと思ひます。

### 日本民族の心を表現する

ある時上司と飲んでゐる時、次の歌のやうな話しになりました。

石<sup>いし</sup>ばしる垂水の上のさわらびのもえ出づる春になりけるかも

志貴皇子の御歌です。「さわらび」の「さ」は歌の意味だけでいへば要らないのかもしれ





ない、しかし、『さ』がないとこの歌は美しさをなくしてしまふ。建築で、構造などに関係があるとかないとかではなく、ここには柱を入れる、といふやうなことはそれに近いんじゃないかな」といふことでした。志貴皇子はわざわざデザインをして歌を詠んだわけではなく、心から流れてくるやうにこの歌を詠まれたと思ひます。この歌のやうに清々しく、誰が見ても美しいと思つてくれる建築を、心に迷ひなく設計できればと思つてをります。もちろんその

為には多く細かいことも勉強もしていかなければなりません。

この度発表にあたって、私はこの合宿で何を学んだかを振り返つて考へ、大学一年生のときに参加した江田島合宿（平成十四年、第四十七回）のレポート『日本への回帰』第二十八集を読みました。

そこに私の祖父であります小柳陽太郎が担当しました「明治の精神」といふ講義の中に、明治時代の美術界を支へた岡倉天心といふ方のことが取り上げられてをりました。インドを代表する詩人でノーベ

ル賞を受賞したラビンドラナート・タゴールに岡倉天心が語った言葉です。インドのベンガルを訪れた岡倉天心はイギリスの植民地として茫然たる日々をおくるベンガルの人々のあまりにうつろな表情をみて、その時岡倉天心が身を寄せてゐたタゴールの家で

「すべての民族は、その民族自身を世界に現す義務を持つてゐます。何も現はさないといふことは民族的な罪悪と言ってもよく、死よりも悪いことであつて、人類の歴史において許されないことです。民族は彼等の中の最上のものを提出しなければなりません」

と言はれたさうです。この激しい言葉に私はあらためてびっくり致しました。私は住宅の設計・施工をする会社に勤めてをりますが、この講義を聴いた学生るとき以上に、ものづくりといふことはこのやうな覚悟のうへで行ふものなんだなと気づかされました。

短歌を詠むことも同じことのやうに思ひます。「日本民族の心を表現する」などといちいち考へてゐたら短歌を読むことも出来ないでせうが、自分の真心を我々日本人が表現するといふことは、それはすでに、日本人の心を表現してゐることのやうに思ふのです。

このやうに気付かされたのは、正岡子規の「歌よみに与ふる書」といふ文章の中の

「外国の語も用ゐよ、外国に行はるる文学思想も取れよと申す事につきて、日本文学を破壊する者と思惟する人も有之げこれあるに候へども、それは既に根本において誤りをり候。たとひ漢語の詩を作るとも、洋語の詩を作るとも、將たサンスクリットの詩を作るとも、日本人が作りたる上は日本の文学に相違無之候」

といふ文を読んだ時でした。

皆さんも短歌をつくる際に時に、この言葉は大和言葉ではなんといふのだらう、この外来語は日本語では何といふのだらうと考へられた方も多いいかと思ひますが、自分に無理な言葉を使つてもハリボテのやうなもので生きた言葉ではありません。

この子規の言葉を読んだときに本當に有り難いと思つたのは、建築といふ仕事をする上でも似てみると感じたからです。我が社は「日本の家」と看板や広告にかかけてをりますが、日本の家といひましても伝統的な茅葺・土壁の家といふやうなものではありません。無垢の木のフローリング材を使ふことは多いのですが、ときにはシート張りしてあるフローリング材を使用したり、外国産の石を使つたりもします。鉄筋コンクリートの住宅も施工します。一見、いはゆる和風建築でない住宅もあります。しかし、我々日本人が日本民族のいのちとも

いふべき日本の文化、日本の精神を大事にして、真心を込めて仕事をするそれが、本当の「日本の家」となるんだらうなと、しみじみと思ひました。

### 心を整理する

最近上司から言はれた言葉で「整理して仕事をしなさい」といふものがあります。

我が社の一日は、まづ掃除をして、皆で神棚に参拝して朝の会から始ります。この掃除もやはり心、頭の中を整理することにつながるのでせうが、ここで言はれたのは頭の中、心の中を整へて仕事に取り組みなさい、といふ意味でした。

私は、あることに没頭すると周りが見へなくなってしまうことが多いため、優先すべき仕事疎かになったり、時間的な無理が生じたりしてゐます。また、報告すべき内容と、質問すべき内容などが、整理されてゐないまま、口に出してしまつて、上司、先輩方を混乱させてしまつたりすることがあります。これらは、頭、心の中が整理されてゐないためだといふことでした。仕事をする上で、とても根本的なことではあるのでせうが、四年目にして、自分なりに整理をして、仕事をするやうに努めてゐるところです。

さらに上司は「整理されてゐないと、物事に気付かない」とも教へてくれました。整理されてゐないと、設計の良い点も悪い点も不都合が起きてゐる点、改良すべき点などに気付かず、またお客様との打合せの時間においては、何を好まれ何を好まれないのか、どこを気に入られ、どこに不満をお持ちになつてをられるのか、仰言らないけれども実はかう言ひたいのではないか、などに気付くことができなとのことでした。

建築の図面に関しても同様で、私が長時間かけて考へたものでも瞬時にここが変である、もつとかうした方がいいのでは、などと指摘されます。もちろん、経験の差といふのもあるでせうが、やはり心の整理がされてゐると、整理されてゐないのとの違ひからくる大きな差といふことでせう。

そして上司はつづけて、「小柳君は短歌を詠むんだらう。五七五七七に自分の気持ちを入れるなんてことは、心が整理されて、物事に気付かないとできないんじゃないか。他のどんな仕事も同じだと思ふよ」といふ旨のことを仰言しました。私は、この上司の言葉がとても嬉しく貴いものだと思ひました。

去年の二月頃から約三ヶ月間、明日の四日目の朝、登壇される岸本弘先生とメールのやり取りををさせて頂いてをりました。ほぼ毎日のやうにメールの交換をしてゐたのですが、ほ

とんどのメールに歌を添へて頂いてをり、こちらも歌を毎回のやうにつくってお送りしてをりました。毎日歌をつくるのは大変なことで、「今日は何の歌を詠めるだらうか」などと周囲をみつつ、考へながら生活をしてをりました。心が動かないと短歌は詠めません。歌を詠むことを続けてゐるうちに自然と感動するもの、美しいものに目がとまるやうになり、さらに両親の心のやさしさ、友人の嬉しさうな表情などにも思ひがとまるやうになり、自分の心がとても豊かになつてゐるやうに感じました。

上司の話を受けたのとはほ同時に、青森に御在住の長内俊平先生（国文研副会長）が執筆されました次の文章に出会ひました。

修身とは、真心によつて物事の本質を直覚し、それを己の生き方として身につける知恵を長養する学まなびのことであり、しきしまの道の修練であり、「物のあはれ（人の哀なる事をみては哀と思ひ、人の喜ぶをききては共によるこぶ、是すなはち人情にかなふ也、物の哀をしる也）」——本居宣長「紫文要領——」を知る生き方の奪回であり、自然と人生を自己の体験に照らし合せながら、その本然のいのちを感得し、それを我が生き方となるまで深めて行く修行いしんぎょうをひろく「修身」と仰せられたものと仰ぎまつるのであります。

明治天皇のそばにおつかひなされてみた元田永孚ながずねの、明治天皇への奉答の文を読まれたうへでの長内先生の御論考の一文です。心を整理し、物事に気付く能力を高めるやうな姿勢で仕事に臨み、また真心をこめて和歌を詠むことで、まごころを修練し、「物のあはれ」を感じ、人生の本質を見抜いて生き生きと生きていくための、人にとって最も大事な学問のあり方を教へられました。

### 大切な景色

仕事をしてをりますと、何だか気分が乗らなかつたり、不調であつたりすることが当然のやうにおきます。あるとき、しばらくの間、なぜか心が曇つてゐるやうな、何をしても辛いといふやうな時期がありました。電話などで察したのか、父からメールが届きました。「体に気をつけて頑張ってください」といふやうな文が添へられてをり、冒頭には次の短歌が記されてりました。

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ

明治天皇の御製（明治四十五年）です。父のあたたかな心が感じられる便りに涙がこみあげ、心配をかけたことを恥かしく思ひました。また、この明治天皇の御製は何度か読んだことはあったのですが、このときほど、厳しく、とても有り難い御製であると思つたことはありませんでした。曇つてゐた気持ちがあつといふ間に晴れていつたのを覚えてをります。

また、このやうな御心で全国民を見てくださつてゐる今上陛下をはじめとする御皇室のことを思ひますと、御皇室を仰ぐ国民として生きてゐる喜びを感じずにはゐられません。

折に触れて、この御製を思ひ出し、力をいただいてをります。

またある時、上司から「自分の心の中に大切な景色を持つてゐると大変な仕事も頑張れる。皆も自分の大切な景色を持つて頑張つてくれ」といふやうな言葉をもらひました。

小さい頃から母によく言はれてゐた言葉があります。「何をやって生きていつてもいい。ただ、迷つたりする時は、お父さんや、おぢいちゃん、おばあちゃん、兄弟の顔を思ひ出さない。その上で行動すれば、決して間違はない」といふ言葉です。自分にとっての「大切な景色」とはなんだらうかと考へた時、真つ先に家族の顔を思ひ出し、また、故郷の福岡の景色、友人との思ひ出などがその「大切な景色」だらうと思ひました。今でもその私の「大切な景色」は家族のこと、故郷のことを思ふことなのですが、次の御歌によってその景色が確



信的なものになりました。

はしけやし吾家の方よ雲居起ち来も

寄ましたけるのみこし  
倭建命が日本の東方を治めにいかれ、その帰り、神様に逆つて罰が当り、いよいよ故郷の大和には帰り着くことが難しくなります。そしてお亡くなりになる直前に詠まれた御歌です。「古事記」中つ巻、「国思歌」といふ章に出ています。

さて、私が大学を卒業して、社会人とならうとしてみた春の連休、故郷福岡から東京への新幹線の中で、「古事記」の丁度この「国思歌」の箇所を読んできました。故郷から離れて行つてゐるといふこともあつてか、非常に胸を震はせながら読み終へ、何となく窓の外を見ると、「この道を真直ぐ行くと我が家の直ぐ傍まで行ける」といふ道の上を列車は横断してをり、正にその道の先に雲がモクモクと立ち昇つてゐました。夕方が近かったので、雲はほのかに赤く染まつてゐました。一瞬のことでしたが何てきれいな景色なんだらう、と昨日のことのやうに心に焼き付いてゐます。

ある時、福岡の方角に向つて、この御歌を口に出しつつ、家族のことを思ひました。何と

も言へない、すがすがしく、暖かな気持ちになりました。家族からも、故郷からも、友人からも、そして、はるか昔に故郷を思ひながら亡くなった倭建命からも、自分の周りの自然全てからも、支えられながら自分は生きてゐるんだといふ確信が沸き起ってきました。

はるか悠久の歴史、文化のなかの大きな一筋の線の中に自分が生かされてゐる、といふ感覚です。この御歌を口にすると、ただひたすらに周りの人々、物事に対する感謝の気持ちがあふれ、今でも涙がこみあげてきます。

この御歌を大切な言葉としてもちつつ、人生の核をしつかりと見据え、紹介させていただいた文章など、こころが震へる素晴らしい言葉に触れながら、生き生きと生きて行きたいと思つてをります。

ご静聴ありがとうございました。

講話

学問と友情

元富山県立富山工業高等学校教諭

岸本

弘



- 一、はじめに
- 二、本居宣長の『うひ山ふみ』
- 三、天照大御神の道
- 四、天皇の天下をしろしめす道
- 五、高校生の歌集「母」
- 六、聖徳太子のお言葉

一、はじめに

今ほど司会の鷲頭祥平君（九州工業大学大学院一年）からご紹介がありましたやうに、私が若い頃からご指導をいただいたお一人に長内俊平といふ方がいらっしゃいます。今青森にお住まいですが、その長内先生をこの五月にお訪ねしたことがあります。私のお訪ねしたことを先生はとてもお喜びになり、帰った私のあとを追ふやうにお便りが届きました。そこには次の明治天皇のお歌が書き添へてありました。

惜春

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるるここちこそすれ（明治四十五年）

私どもの気持ちがある所に溶け入るやうな思ひがして拝誦させていただいた一首のお歌でありました。私が今から「学問と友情」といふことでお話し申し上げようとする思ひも、結局はこの一首のお歌に表現されてゐるところではなからうかと思はれてなりません。

さて私はこれから「学問と友情」といふことでお話し申し上げるわけですが、この「学問」といふことにしましても、「友情」といふことにしましても、皆さんはそれぞれに思ひをお持ちのところでありませう。そしてこの合宿をお過ごしになる中で、今までお感じになつてゐたことに、何か付け加へるべきものをお感じになられたかもしれませぬ。そのことは私もまた同様でありまして、自分のさうした思ひを、皆さんとともに振り返りながら話すことが出来ればと思つてをります。

## 二、本居宣長の『うひ山ふみ』

それでは資料に出てをります本居宣長の『うひ山ふみ』からお話し申し上げます。本居宣長といふ方がどんな方であつたかは、第一目の國武先生のご講義で詳しいお話がありましたので、そのことを思ひ起こしながらお読みいただきたいと思ひます。

『うひ山ふみ』は「初学<sup>つひまらひ</sup>」を「山踏み」にたとへた学問の入門書であります。本文だけから申しますと文庫本にして十頁に満たない小著であります。宣長はこの『うひ山ふみ』を寛政十年（一七九八）十月二十一日、宣長六十九歳の年に書いてをります。この年は、その六月

研  
と  
反  
話  
青



には、それまで三十余年をかけた『古事記伝』四十四巻を完成させた年でもありました。宣長にとりましては、『古事記伝』といふ生涯をかけた大事業を成し遂げたといふ感慨に満ちて、自らの歩んできた道を、己の信ずるところを、淡々と書きとどめたといふのがこの『うひ山ふみ』でありませう。

それでは少し本文を見てゆきたいと思ひます。

世に物まなびのすぢ、しなぐ有て、一やうならず。……然はあれども、まづかの學のしなぐは、他よりしひて、それをとはいひがたし。大抵みづから思ひよれる方にまかすべき也。……詮ずるところ學問は、たゞ年月長く倦ずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要にて、學びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみか、はるまじきこと也。

(引用文の中で……の部分は省略したことを示してあります。)

「世に物まなびのすぢ、しなぐ有て」といふことで、宣長は神学、古学、漢学、歌学など色々あげて、いづれから学ぶべきかといふことなど強制することでもあるまい。また学問の方法といふものも、これこれ云々と決めつけるものでもあるまい。大事なことは、いづれの学問から始めるにせよ、「たゞ年月長く倦すおこたらずして」といふことを強調してゐるのです。

このあたりは、私など、かなり耳の痛いことにも聞えるのですが、また別のところであれしいことも言つてゐます。それは「晩学」、かなり年を取つてからの晩学であつてもそれなりの成果はあるであらうし、「人の才不才」といふことも、「おこたらずつとめだにすれば」、才不才にかかはらず、学問の成果は得られるものだと言ひ添へてをります。

まあこのあたりはごく基本的に学問に求められる姿勢とも言へるわけで、宣長でなくとも言へることのやうに思はれます。そして宣長の本当に強調したいことは、このあとに続く言葉から始まるやうに思ひます。



其中その中に主しゅとしてよるところを定めて、かならずその奥をきはめつくさんと、はじめより志こころざしを高く大おほいにたて、つとめ學ぶべき也。

「其中その中に主しゅとしてよるところを定めて」、学問にはさまざまの種類があるが、その学問には中心となるべきものがあることに気付かなければならない。このあたりから始まって、次の短い一くだりに、宣長の言ひたいことが言ひ尽くされてゐるやうに思はれます。

さてその主しゅとしてよるべきすぢは、何れぞといへば道の學問まのまなびなり。そもく此道このは、天照大御神あまてらすおほみかみの道みちにして、天皇すめらみの天下あめのしたをしろしめす道、……此道このみちは、古事記書紀ふること記の二典ふたみふみに記されたる、神代上代かみよかみつよの、もろくの事跡ことあとのうへに備はりたり。

ここで宣長は主しゅとしてよるべきすぢは「道の學問なり。そもく此道このは、天照大御神あまてらすおほみかみの道みちにして、天皇すめらみの天下あめのしたをしろしめす道」であると言ひ切つてをります。これは宣長の考へるところであります。私も、自分自身のたどってきた道を振り返るときに、やはり宣長の言ひ切つてゐるところに尽きるやうに思へるのです。

そしてそのことは「古事記書紀の二典ふたみかふに記されたる、神代上代の、もろくの事跡のうへに備はりたり」、ここで「書紀」は「日本書紀」であります。古事記や日本書紀に書かれてゐる色々の事柄の中に「備はりたり」、主張されてゐるといふやうな表現ではなく、備はつてゐると言ふのです。「備はつてゐる」といふことであれば、私どもはいつでも、そこになつかしい祖先の心をたづねることができるといふことにもなりますね。

### 三、天照大御神の道

それでは「天照大御神の道」といふことに関連して、天照大御神と須佐之男命すさのをのみことの一節を本居宣長の『古訓古事記』でご紹介申し上げます。

天照大御神と須佐之男命、それにもう一方の月読命は伊邪那岐大神が「竺紫つぐしの日向ひじかの橘小門たちばなのをどの阿波岐原あはぎはら」といふところで夜見国の穢けがれを祓はらふために禊みそぎをされた。その禊の行為の最後に、天照大御神、月読命、須佐之男命の順にお生まれになった。つまりこの三みはしらの神々はご姉弟きょうだいといふことになります。

伊邪那岐大神は「吾われは子生みこみ生うみて、生うみの終はてに、三貴子みはしらのついで得たり」と大変お喜びになつて、

天照大御神には「汝が命は、高天原を知せ」―お前は高天原を治めなさい―、月読命には「汝が命は、夜之食国を知せ」、須佐之男命には「汝が命は、海原を知せ」と、それぞれに治めるべき国をお示しになるのです。

ところが須佐之男命だけが伊邪那岐大神のご命令にそむいて、「八拳須心前に至るまで、啼きいさちき」―髯が胸の先に至るまで―、つまり成人してかなりの年齢になつても泣いてばかりゐたといふことになるでせう。そのところから原文を読んでもみます（講話をお聞きになつた方には、次の『古訓古事記』のテキストは一切お示しせず、すべて耳からお受け取りいただきました）。

故、各依さし賜へる命の隨、知し看す中に、速須佐之男命、命さしたまへる國を知さずて、八拳須心前に至るまで、啼きいさちき。其の泣きたまふ状は、青山を枯山如す泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。是を以て悪神の音、狭蠅如す皆満き、萬物の妖悉に発りき。故伊邪那岐大御神、速須佐之男命に詔りたまはく、「何由とかも汝は、事依させる國を知さずて、哭きいさちる」とのりたまへば、答白したまはく、「僕は妣の國根之堅洲國に罷らむと欲ふが故に哭く」とまをしたまひき。爾に伊邪那岐大御神大く忿怒らして、「然らば汝此の國にはな住みそ」と詔りたまひて、乃ち神やらひにやらひ賜ひき。

国文研叢書に夜久正雄先生の書かれた『古事記のいのち』といふご本がありますが、夜久先生はその中で、この須佐之男命の一節について、次のやうに書いてをられます。

《スサノヲノミコトが、父神、万物の創成神イザナギノミコトの命令に背いたといふことは、道徳的にいへば悪です。しかし、その理由が、「死んだ母の国に行く」といふ理由であるならば、その動機は真実のものであり、不可抗のものとみることができます。そして、その母を恋ひしたって、「八拳ひげ胸前に至るまで泣きいさちき」といふのは、真情の絶叫です。それは道徳的の善悪をこえる力をもつてゐます。これが原始的生命といふものでせう。かういふやむにやまれぬ生命を身につけたい、かういふ生命の上に私どもの生活をうちたてたい、といふ憧憬をもつて、私は『古事記』のこのくだりを読んだのです。》

このあと須佐之男命は、「お姉ちゃんなら僕の言ひ分を聞いてくれるだらう」といふことで、天照大御神の住んでをられる高天原に上つてゆかれるのです。しかし須佐之男命は大変乱暴な神様でありますので、「山川悉に動き、国土皆震りき」といふやうに天地鳴動して大変な騒ぎになるのです。そこで天照大御神は「これは弟が何か悪い心をもつて、自分の国を奪はうとして上つてくるに違ひない」といふことで、勇ましく男装をして、弓矢も十分に備へて、地

面を踏み鳴らしながら、関の声を上げて須佐之男命を待ち受けられるのです。

故是に速須佐之男命の言したまはく、「然らば天照大御神に請して罷りなむ」とまをしたまひて、乃ち天に参り上ります時に、山川悉に動き、國土皆震りき。爾に天照大御神聞き驚かして、「我が那勢命の上り来ます由は、必ず善心ならじ。我が國を奪はむと欲ほすにこそ」と詔りたまひて、即ち御髪を解き、御みづらに纏かして、左右の御みづらにも、御鬘にも、左右の御手にも、各八尺勾聰の五百津のみすまるの珠を纏き持たして、そびらには千入の鞆を負ひ、比良邇は五百入の鞆を附け、亦いつの竹鞆を取り佩ばして、弓腹振り立てて、堅庭は、向股に踏みなづみ、沫雪如す蹶多散らかして、いつの男建踏み建びて、待ち問ひたまはく、「何故上り来ませる」ととひたまひき。

「何故上り来ませる」——なぜ上ってきたのか——といふ天照大御神のご質問に対して、須佐之男命は「僕は邪心無し」とお答へになる。さらに天照大御神は、「然らば汝の心の清明きことは、何にして知らまし」とご質問になつて、天安河を中に挟んでの「うけひ」の場面から、天石屋戸の場面へと「古事記」の物語は展開してゆくのです。

ここで「キタナキ」に対する「アカキ」といふ古語ふることばが出てまゐりますが、このことでは今の皇后陛下が、平成元年にフランスの哲学者であるジャン・ギトン博士との対談の中で、日本神道に話が及んだときに、「私共の祖先が大切にしてきた清く明あかい心」（竹本忠雄著『祈りの御歌』一六二頁）とおっしゃられたお言葉が思ひ起されます。このとき皇后様のお心の中には、この『古事記』の一節が思ひ描かれてゐたのではなからうかと、思ひが馳せられるのです。

#### 四、天皇の天下をしろしめす道

次に本居宣長が、『うひ山ふみ』に言ふ「天皇すめらみの天下あめのしたをしろしめす道」のことです。このことはいろいろな角度からご説明のできると思ひますが、本日は時間も限られてをりますので、私の心の中に強く印象に残つてをります御製を、一、三首ご紹介することで代へさせていただきたいと思ひます。

先ほど司会者からご紹介がありましたやうに、私は富山大学二年のときにはじめてこの合宿に参加し、そのときに山田輝彦先生の「天皇と天皇のみ歌」と題されるご講義をお聞きし

ました。その最初にご紹介になったのが、資料にあります明治天皇の「冬<sub>々</sub>泉」と題されたお歌でありました。私にとっては人生で最初に出会った御製といふことになります。

冬<sub>々</sub>泉

冬<sub>々</sub>ふかき池の中にもほとばしる水ひとすぢはこほらざりけり（明治十八年）

昨日、小柳雄平さんは「大切な景色」といふことをお話しになりましたが、私は富山に住んでをりますので、富山の冬の景色は私にとって大切な景色の一つであります。さうした富山の雪景色を思ひ起しながらこの御製を味はひ、「いいお歌だなあ」といふ率直な感動から、御製に親しみを感じてゆきました。

紅葉

うつろひて散らむとすなるもみぢ葉をうつくしとのみ思ひけるかな（明治四十四年）

この御製について山田輝彦先生は次のやうに述べてをられます（『日本への回帰』第一集）。

《微妙にうつろひゆく自然の一瞬の美しさの表現である。散る寸前の紅葉は自然のいのちの最後の残照である。古来職業歌人たちが、その美しさを表現するために彫琢ちやうたくの技を競ったところである。しかし、晩秋の蒼い空を背景にした紅葉の形容を絶した美しさは、御製においては「うつくしとのみ思ひけるかな」と表現されてゐる。この素朴な、うちつけの感動の表現。数多いみうたの中で忘れられぬ強い美しい印象を与へる名歌である。》  
今一首ご紹介したい御製は、次の後花園天皇（第百二代・御在世一四一九—一四七〇）の次の御製です。

独述懷

思へたゞ空にひとつの日の本にまたたくひなく生れこし身を

いつ頃出会った御製であったか忘れましたが、天皇のお歌であらうとなからうと、この日本に生まれて来たことを、これほど潑刺とした喜びとしてうたひ上げられた歌が、他にあるであらうかと思ひました。

このお歌に示されるやうに、私どもはこの日本に誇りを持つしかない。それはまた、この



合宿で講師の先生方が切実な思ひをこめて語られたところでもあったと思ひます。言葉を代へて言ふならば、私どもの心の中に、さうした大切な日本が息づくならば、何も恐れることはない、といふことにもなりません。

### 五、高校生の歌集「母」

次にご紹介いたしますのは、私が教員になって十年目（昭和五十二年）に、富山工業高校の一年生が創った「母」と題する作品であります。翌年のお歌会始のお題が「母」でありましたので、クラスでも「母」の題で短歌を創ってみようといふことになったのです。

朝早く起きてみれば台所の壁に母の影うつるなり

百円を差し出す母の手を見れば苦勞つづけた母の手のひら

なき母を思い起こせば涙ぐむ母の思い出日本一の母

スーパーで買い物している母の顔今夜のおかず何にするかな

夜遅く机に向かう我のため励ます母のことばがうれし

昔よく日曜日にはかあさんと町へ出ていき物をせがんだ

かあさんは朝早くから目をさまし朝めしを作るほうちようの音

小遣がないといつては金ねだりでも母の顔いつもにぎやか

冬の日々冬の寒さに氷つく水の冷たさ苦しかりうに

あかぎれのきたなき母の手を見れば苦勞の姿が目にしみるなり

いつの日も働く母をみているとかわつてやりたい今すぐにでも

先ほどからご紹介いたしました御製をはじめとして、この合宿でも多くの歌が紹介されるであらう。さうした中に高校生の作品をご紹介するのも、また新鮮な感じがしていいのではなからうかと思つて、なつかしい歌を持ち出してみました。そして、かうした素朴に歌ひ上げられた歌を見直してをりますと、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』（略称「太子の御本」・二一九頁）の中で、著者・黒上正一郎先生が、防人の歌さきもりについて述べてをられるお言葉が思ひ起こされるのです。

黒上先生は防人の歌を十首余り並べたあとに、『彼らの「うた」が個人的特異性を止めぬほどに、切實の全人生的感情をうたひあげたるは、その没我的感情に現實悲喜の動亂そのまゝ、

をやがて宗教的解脱に誘ふべき安慰のひかりすらも偲はしむるのである」と述べてをられるのです。

ここにご紹介した高校生の作品は、防人の歌同様に、すべて作者は異なるのですが、あたかも一人の作者の連作といつてもををかしくないやうな感じがいたします。それは「母」といふ題材によって開かれた、「没我的感情」のゆゑでありませうか。

## 六、聖徳太子のお言葉

最後になりましたが、今ほどご紹介いたしました「太子の御本」の中から、一つ二つ聖徳太子のお言葉をご紹介したいと思います。一つは「維摩経義疏」の中の

大士は其の身の苦を忘れて苦を同じうして化す

であり、いま一つは『勝鬘経義疏』の中の

我が子の稱は自他を別たず、唯善に在り

であります。それぞれ簡単に口語訳いたしますと、前者は「大士（菩薩）人を導く立場にあるもの」は自分の苦しみを忘れて、相手の苦しみを共に味はひながら導かねばならない」といふことになりませうし、後者は、「（我が子の中にすなはなるものを認めて）、あらためて我が子に呼びかけるといふことは、自他を別たず—既に我執を離れて—、み仏のこころに通ひ合つてゐることになる」とでも訳せば如何かと思ひます。

聖徳太子のお言葉の中に、この「善」といふお言葉はよく出てまゐります。大切なお言葉ではあるが、なかなか簡単には説明の出来ないお言葉のやうに感じてまゐりました。先ほどご紹介いたしました『古事記』の中で、日本人が大切にしてきた「あかきこころ」もまた、「善」といふものに一つの具体的な内容を与へるものであらうかとも思つたりしてをります。以上、何か分つたやうな顔をして縷々お話し申し上げてまゐりましたが、私に与へられた「学問と友情」といふタイトルに対して、私自身、どこまで踏み込めたものかまったく自信はありませんが、これからの日々の歩みの中で、私自身もまた考へ続けてまゐりたいと思ひます。まことにまとまりのない話になりましたが、これで私の講話を終らせていただきます。

短歌入門

短歌創作導入講義

東洋紡績(株)

庭本秀一郎



はじめに

一 なぜ歌を詠むのか

二 短歌の様式と作り方を  
はりに

## はじめに

皆さんこんにちは。今日の大山<sup>おほやま</sup>へのハイキングは相当暑くなりさうですね。このハイキングのあとでは短歌創作が待ってをりますので、ハイキングの中で、あるいはこれまでの合宿生活も含めて短歌の題材になることがないか探しながら行って下さい。

ところで、皆さんの中には歌ができるかどうか不安な方も多いでせう。そこでまづ最初に去年の合宿教室に参加された方の感想文をご紹介します（仮名遣ひママ）。

その一 短歌創作では素直さを表現するという日本の伝統のすばらしさに感激し、短歌相互批評では、班員の歌を味わいつつも、それをさらによくしていこうと班一体となつて議論する有意義な時間が今でも忘れられません。

その二 歌は、具体的に詠まないと、相手に伝わらない。またそれだけでなく、自分が、その時、何を、どのように思ったかをしっかり表現することにより、自分の心の鏡が見えてくるのだと感じたのです。

その三 私は今回初めて合宿に参加しました。（中略）短歌創作の時は、自分の感動を一

首に納めるのがとても難しく、苦戦していましたが、班で、班員それぞれに込めた感動をどのようにすれば、より伝えられるのかを、年齢も経験もばらばらな人達と語らいあううちに、「この短い一首でこんなにも人の気持ちを伝えられるんだ。」と思うようになつていました。

はじめての方も、短歌ができた後はきつとこんな気持ちになつていただけれると思ひます。そしてこの感想文の中には短歌を詠む際に大切なことがほとんど盛り込まれてゐます。それは「素直に」「具体的に」「感動（心の動き）を」「正確に」詠むといふことです。ちなみにこの四つの言葉の最初の一字をつなげて読んで下さい。「素・具・感・正」（すぐ完成）となりますね。

ここで明治天皇の御製の中から、歌について詠まれてゐるものをご紹介したいと思ひます。

をりにふれたる（明治四十五年）

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

「おもふこと思ふがままに」といふのは、自分の感じてゐること、つまり「心の動き」をみ





つめてそのままに詠んでみよう、表現してみようといふことです(明治天皇は歴代の天皇がたの中でも、特に沢山のお歌を残された天皇であります。公表されてゐるものだけでも八千九百余首。実にご生涯のうちに九万三千首の歌をお作りになったといふことです)。

もう一つ歌を紹介します。私は、学習塾で国語の講師をした経験がありますが、小学五年生に「母の日にお母さんにあげる歌を作ってみよう」といふことで詠んでもらった歌です。

お母さんほくがシユートを決めたときやったあと  
いって喜んでくれた

この歌の意味をわからない人はいないでせう。この歌は先ほど申し上げたキーワード、「すぐかんせ

い」の四つのポイントを全て押さえてゐます。このやうに、小学生でも人の胸を打つ歌を作ることができまゝるので、皆さんも肩肘張らずに取り組んでみて下さい。

— なぜ歌を詠むのか —

さて、この合宿教室ではなぜ「短歌」を詠むのかと疑問に思ふ方もをられるでせう。それは短歌が自分の人生と関りのある、大切な生活の一部だからといふのが私なりの答へです。

まづ、一点目、感動（心の動き）を追体験し自分のものにする事ができるといふことです。

義父<sup>ちち</sup>とともに庭の草引く夕暮れの時いとほしく過ごしつるかも（平成十八年）

これは私が詠んだ歌です。結婚当初、失業してゐた時お世話になつた義父が、私の住んでゐる社宅に遊びにきてくれて、ほうほうになつてゐた庭の草取りをしたことがあります。夕方四時ぐらゐの時間だつたと思ひますが、だんだん日が落ちてきて涼しくなり虫の声がし始めました。その時になんとも言へない温かい気持ち、この時間がいつまでも続いて欲しい

といふ気持ちがかみあげてきたのですが、どう詠めばいいのか悩んだことを覚えてをります。このやうに短歌を作る過程では一所懸命言葉を選びますので体験がすつきりと言葉にまとめられて心に残りやすくなります。また歌を読み返すと、その時の思ひをまるでアルバムを見ながらのやうに思ひ出し初心に返ることが出来る、すなはち永遠に残る心の記録ともなるのです。

二点目は、短歌を通して心が通じ合ふといふことです。実は、冒頭で紹介した小学五年生の母の日のお母さんにおける歌に対しては、お母さんからも返歌を詠んでもらひました。そのやりとりのいくつかをご紹介します。

○お母さんほくがシユートを決めたときやったあとといつて喜んでくれた

けいたくんいつもファイトでボールけるその姿見て母熱くなる（お母さんの返し）

○お母さん遠足の時弁当を作ってくれてごくろうさまです

ただいまの大きな声でカラッポのおべんと渡され笑顔でかえす（お母さんの返し）

○お母さんホッケーのときにこにこと笑っていたから安心したよ

ボール追う笑顔がとてものしげで見ているだけでうれしくなるよ（お母さんの返し）

親子の心の交流が目の前に浮かび上がるやうですね。

三点目は、歴史上の人物とも心通はすことができるといふことです。先ほど、心の記録が永遠に残ると申しあげましたが、これは詠み人の気持ちちが時空を超えて伝えていくといふことでもあるのです。

八雲立つ出雲八重垣妻込みに八重垣作るその八重垣を（須佐之男命）

今朝、長谷川先生が天皇の祖先は神様とつながってあるといふお話をされました。天皇の御祖先に天照大神といふ神様がゐらっしゃいましてその弟君がこの歌の作者、須佐之男命であります。この神様は天上の国である高天原で乱暴を働いて追放され出雲国（今の島根県）に流されたと伝えられてゐます。その出雲の国の斐の川（現、斐伊川）に行った時、櫛名田姫とその父母が泣いてゐました。聞いてみると、ヤマタノヲロチといふ怪物がゐる村の若い女性をさらって行ってしまふとのことでした。そこで、須佐之男命は見事にヤマタノヲロチを退治し、姫と結婚することになるのですが、ご紹介した歌はその時に詠まれたものです。幾重にも雲が立ち上ってゐる出雲の地で、幾重にも垣をめぐらせて、これから姫と一緒に新しい

生活をしていく、そのために作ったその八重垣であることよといふ歌であります。

私は結婚当初、五年の塾講師生活を辞めて失業してゐましたが、これは私にとっては一つの挫折でした。その挫折の中で結婚し、ほどなく新しい仕事について社宅に入れていただいた、その時に思ひ出されたのが先の歌です。私にとっては、幾度となく思ひ出しては初心に帰り元気付けられる歌であります。

## 二 短歌の様式と作り方

### ① 短歌の様式

短歌は、五・七・五・七・七の形であり、五・七・五の形をとる俳句とは異つてゐます。先ほどご紹介した歌を例に挙げるとこのやうになります。

(初句・五)

(第二句・七)

(第三句・五)

(第四句・七)

(第五句・七)

けいたくん

いつもファイトで

ボールける

その姿見て

母熱くなる

以下に音数の数へ方についてよく受ける質問について参考までに四点をまとめておきました。

ア 「今日(きょう)」など小さい「や」「ゆ」「よ」は前の字と合はせて一音と数へる  
イ 「ファイト」など小さい「あ」「い」「う」「え」「お」も前の字と合はせて一音と数へる

ウ 「シユート」など伸ばす音の「ー」は一音と数へる

エ 「切符(きっぷ)」など小さい「つ」は一音と数へる

とはいへ、あまり細かいことにとらはれず、声に出して読んでみながら作るのが一番かと思ひます。

それから俳句は一句、二句と数へるのに対し、短歌は一首・二首と数へるのですが、短歌には一首一文といふ大切な原則があります。この講義の最初に紹介した母の日の歌は、

お母さん(は) 僕がシユートを決めた時(に) やったあとといって喜んでくれた。(。)

といふ「一文」で表現されてゐます。中には、一首二文や三文のいい歌もありますが、基本は一首一文で作るといい歌が出来ます。なほ、俳句と違って「季語」はありませんので気にせずにつけて下さい。

言葉遣ひについては、無理して使ったこともないやうな言葉を使ふ必要はありませんが、できれば口語ではなく文語、現代仮名遣ひではなく、正仮名遣ひ（歴史的仮名遣ひとも言ひます）を使つて下さい。それから、できれば和語（やまとことば）を使ふやうにして、漢語やカタカナ語を避けるやうにして下さい。和語を使ふと、歌の調子が柔らかくなり、より深みのある歌が出来ます。国民文化研究会副会長の長内俊平さんのお歌を読んでみませう。

山の端はに日の落ちしよりひぐらしのなく音のいたもしげくなりゆく

この歌をあへて口語調、現代仮名遣ひにし、漢語を使つてみるとこんな感じになります。

稜線に日が落ちてからひぐらしのなく音がとても大きくなつてゆく

歌の感じが全然違ふでせう。下の句にある「いたも」とは「とても」の意、「しげく」（繁く）とは草木が密集してゐる、回数が多い、絶え間ないといふ意味です。

ところで長内さんの短歌は一首で終つてゐるのではなくて、三首の連作短歌、すなはち三

首で一まとまりの作品です。思ひを一首にまとめきれない時はこのやうに連作にする方法もあります。

山の端に日の落ちしよりひぐらしのなく音のいたもしげくなりゆく  
はかなかる命のゆゑか息をつくいとまなきがに鳴きつづくるも  
病める友集ひえぬ友のねむごろにたのむとのりしことばうかびく

この歌は、長内さんがこの合宿教室に参加されたときに詠まれた歌です。三首目の「ねむごろに」といふ言葉は心がこもってゐるとか、親身であるとか親しいといふ意味があります。「のりし」といふ言葉は、「のる」といふのが終止形ですが、本来は、神様や天皇が重大な事実を宣言する、あるいはそこから転じてみだりに言ふべきではないことを表明するといふ意味の言葉です。長内さんのご友人の真剣な気持ち、それを真剣に受け止められた長内さんの気持ちしがひしひしと伝ってくるお歌です。

## ②短歌を作る手順



まづ、題材選びですが、最も強い心の動きを歌にすることが一番大切です。二年前（平成十九年）の奈良県信貴山で行はれた合宿教室で、今日のやうな暑い日射しの中、法隆寺を散策した時の二人の参加者（学生）が詠んだ歌をご紹介します。

暑い中動き回りて玉の汗噴出し日陰に行きたくなりぬ

玉の汗ぬぐひつつ聞きたるおことばいにしへに古の匠たくみ想ひやるかな

二首目の「おことば」といふのは、合宿の講師であらうしゃった宮大工の小川三夫先生のお言葉です。古の匠とは法隆寺を作った七世紀の宮大工さんのことでせう。この二首は、どちらも心の動きを題材にしてみますが、二首目の方がより強く心に残る歌になるのではないかと思います。

歌の題材がきまったら、まづは自分の思ひをを文章にしてみても、それを歌の形に整へていきます。

「出生直後に分娩室から待合室に運ばれてきた吾が子は、しきりに手や足を上下左右に動かしてゐるが、この幼い命も、懸命に生きようとしてゐるのかと思つた」

といふ私の経験をもとにした作歌体験をご紹介しながら説明します。できたのは次の歌です。

#### 出生直後

手や足を右に左に上に下に吾子は動かす生きんとしてか  
とどまるを知らざる吾子の動き見てその激しさにただ打たれけり

最初私は一首目の歌を作らうとしたのですがこの一首だけでは、「しきりに手や足を動かしてゐる様子」といふのがなかなか伝はらないと思つたのです。そこで二首目をつくり、連作短歌にしました。

また、状況説明がないと二首の歌の背景がわかりませんので、最初に出生直後といふ言葉を付け加へました。この「出生直後」の部分を「詞書」といひ、歌に盛り込めない状況説明をする時に使ひます。

それから「字余り」は思ひが余るといふことでかまひませんが、逆に「字足らず」は思ひが足りないといふことになりまますので避けて下さい。一首目の第三句の「上に下に」は六音になつてゐて字余りです。「上下に」としてもよかつたのですが、あへて「和語」にして字余

りにしました。

### ③歌を作る時の留意点

では、冒頭で触れた、「素直に」「具体的に」「感動（心の動き）を」「正確に」詠むといふことについてこれから過去の合宿教室での学生さんの歌の添削例を引用しながら説明していきます。

第一に「素直に」、ありのままに詠むといふことです。

（添削前）講義では知らぬ事ばかり語り続き必死に動くペンの先々

（添削後）講義では知らぬ事ばかりなりければ我は必死にメモを取りゆく

「必死に動くペンの先々」とありますが「必死にペンが動く」わけはなく、必死なのは講義を聴いてゐるその人自身なのです。オーバーな表現、気取った表現、奇をてらった表現を避けませう。

第二に「具体的に」詠む、理屈や抽象的なことを避けるといふことです。

（添削前）やさしさと慈愛に満つる観音のお顔をながめ平和を思ふ

（添削後）やさしさと慈愛に満つる観音のお顔をあふげば心しづまる

「平和」といふのは非常に抽象的なことばなので、「平和を思ふ」といっても、作者の気持ち  
がわからないんですね。添削後の歌では「心しづまる」といふ具体的な言葉になってゐるの  
で良くわかります。

お母さんがほくがシュートを決めた時やったあとといって喜んでくれた

の歌では、「うれしい」と言はずとも「うれしさ」がよく伝はりますね。

第三に「感動」（心の動き）をよく見つめ、その焦点に絞って短歌を詠むといふことです。

（添削前）夏の日の暑さに咽ぶ皆の横五重塔は正然と立つ

（添削後）かぎろひの立つほどの夏日差し受くる五重塔は整然と立つ

添削前の歌では、上の句で「夏の日の暑さに咽ぶ」といひ、下の句では「五重塔は整然と  
立つ」といってをり、作者が言ひたいのはどちらなのかよくわかりません。五重塔が整然と  
立つ様に焦点を絞ったのが添削後の歌です。「咽ぶ」といふ言葉は、こみ上げる感情で息が詰  
まる、息を詰まらせながら泣くといふ意味ですから、夏の日の暑さで咽ぶといふのは、オー  
バーな表現ですね。

第四に「正確な」表現になるまで（もどかしさがなくなるまで）推敲するといふことです。皆さんがお持ちの『短歌のすすめ』の続編である『短歌のあゆみ』といふ本の中に次のやうな一節があります。

豊富な語彙を持っている人は、今の自分の感情は、この言葉によつて一番正確に表現できるといふように、選択の自由を行使することができます。（中略）しかし、初心の人にはそういうことはできません。ある一つの感情を表す言葉がない、あるいは持ち合わせが一つしかないという場合もあるでしょう。そこに表現の苦しみとか難しさがあつて、もどかしいなという気持ちになるわけです。自分の考えていることが正確に表現されれば、そこにある解放感がありますが、なにかもどかしいという気持ちがある間は、やはり自分の本当の歌になつていないわけです。もどかしさがなくなるまで推敲するといふことが大切です。初心の人にはむずかしいことですが、感動の波がそのまま言葉のリズムになつてゐるようになれば、その歌は必ず人の心に伝わつて行くと思ひます。

（夜久正雄・山田輝彦著『短歌のあゆみ』）

初心の人でも心配ありません。三日目の創作短歌相互批評の時間では、うまく表現出来なかつた「もどかしさ」から目をそらさずに、その時の気持ちを披瀝してみんなの知恵を借りな

がら自分の気持ちに添った歌になるやうに努めて下さい。私はかつて短歌相互批評がうまくいったときのことをこのやうな歌に詠んだことがあります。

清瀬麻衣さんの短歌相互批評

指揮班の仕事の後に集まりて夜更けに短歌相互批評をす  
アルバイト生一人も欠けず集りて午前二時まで語り合ひたり  
自らの心に沿ひし言の葉を見出して君すがやかに笑む

当時高校生で合宿教室事務局のアルバイトだった清瀬さんの「すがやかな笑み」を私は忘れることが出来ないのです。もう一つ歌を紹介します。去年の合宿教室での短歌相互批評を詠んだ国民文化研究会会員の歌です。

歌一つ出来上がるたび拍手わき喜び合ひしことぞうれしき（黒岩礼子）

この歌のやうに普段の生活ではなかなか味はへないやうな体験がこれから待ってます。

目で見たことは写真を撮るやうに、耳で聞いたことは音や声が蘇るやうに、具体的な言葉で生き生きと詠んで下さい。

④歌の題材が見つかりにくい時は…

もし歌を詠む題材が見つからない人は以下の文章を読んでみて下さい。ヒントになるでせう。

体験したことを詠めば、なんでも歌になるかというところ、そうではないのです。そこにはやはり選択の行為というものが残ります。深く自分の心に残ったことを詠まなくてはいけない。しかし必ずしも深く心に残る体験ばかりがあるわけではない。選択に値するやうな経験がないという人もあるでしょう。しかし歌を詠もうと思つて物を見ると、今までみえなかったやうな自然が見えたり、今まで気がつかなかったやうな人の心の微妙なゆらぎが分かったりする。そして歌の源泉である感動をキャッチできるといふ逆の現象もあり得るのです。見たり、感じたりするということも、修練によつて深くなつてゆくので、感覚は人間に与えられた普遍的な本能だといふやうに簡単に片付けられるものではありません。最初から感動的な経験だけを詠めといつても無理なので、できるだけ自分の経験を正確に

見つけてゆくという姿勢が必要です。

(夜久正雄・山田輝彦著「短歌のあゆみ」)

をはりに

最後にこの講義のまとめとして、二点お話しします。一つ目は、日本語を使ひ物事に感じる心のある人なら誰でも短歌を詠む喜びを味はふことができるといふことです。

二つ目は、よい歌は心に残り、心に力を与へてくれるといふことです。明治天皇の御製に  
まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

といふのがあります。まごころとは偽りのない真実の心、素直な心です。私は一回聞いて忘れないといふことはなかなかないのですが、心のどこかに残つてゐて折に触れ読み返してゐるうちに、諳んじるやうになりました。さういふ歌が、心に力を与へてくれるのです。



たゆまずも進むがををし道を行く牛の歩みの遅くはあれども

といふ昭和天皇の御製があります。私は塾講師を経て畑違ひの新しい仕事につきましたから、一年目はつらい思ひをしました。そんな時私はこの御製を心のなかに口づさみました。昭和天皇は牛の歩みにたとへて、弛んではいけない、そして弛まざる歩みはそれがたとへ牛の歩みのやうに遅くてもををしく、尊いのだ、だからがんばって下さいとお示しになってゐるのだと感じたのです。

この合宿教室を機に、是非心に残った歌を愛唱し、また自分でも歌を詠んで先生や家族、友とやりとりして下さい。無限の心の世界がさらに広がります。

ご清聴ありがとうございました。



短歌入門

創作短歌全体批評

熊本市環境保全局環境事業部

東部環境工場長

折田豊生



はじめに

批評と添削

「しきしまの道」について

をはりに

はじめに

全体批評に入る前に、「何のために歌を詠むのか」といふことから話を進めさせて頂きます。先づ必携書『短歌のすすめ』をお開き下さい。

「私は、短歌といふものが、いまの世の中では、専門歌人と特殊な愛好者に独占されてしまつてゐるのではないかと懸念してゐます。このいはば敬して遠ざけられてゐる短歌を、全くの素人や初心者我身边にまでひきもどすこと、これがこの書物の一つのねらひでした」(三頁・原文は現代仮名遣ひ)「私は、現在の日本の短歌誌や新聞の歌壇にのせられる短歌が、主として個人の『生』の断片的な表現に終始してゐる状態であることについて、ある疑問を感じてゐます。それで、短歌といふものの本来の性格、すなはち、人の心と心の相互の交流といふ側面を、もう一度よみがへらせたいといふ願ひに立つて、この第二部を書きました」(四頁・同前)。

著者の夜久正雄先生、山田輝彦先生は、この数年の間に相次いでお亡くなりになられました。この『短歌のすすめ』は短歌の手引書としては類を見ない名著です。短歌の手引書で、

御製を掲げ、国家のために命を捧げられた人々の遺歌を掲載したものはほかにありません。日本人としての生き方はいかにあるべきかが随所に説かれてゐる、まさに「しきしまの道」の手引書と呼ぶべき素晴らしい本です。ぜひ折々に繙いて頂きたいものです。

皆さんがこれから取り組まれる相互批評についても、一〇五頁と一一七頁に記述があり、「歌の創作と批評を通じて人の心と心をつなげていく」といふことがここでも強調されてゐます。「現代人の生活から遠ざかってしまった短歌を今一度身近なものにしたい」「短歌の本来の性格である人の心と心の相互の交流といふ側面を甦らせたい」といふことの二点を意識しながら相互批評に取り組んで頂きたいと思ひます。

さて、短歌相互批評の目的は、基本的には輪読と同じです。このわづか数日の間にも同じ文章を巡って、これほど読み方が違ふものかと思はれるほど、友達の言葉に驚かされた経験が多々あらうかと思ひます。書物を読むことにおいては、独りよがりの理解の仕方になつてはいけないので、輪読といふ方法で言葉の正しい受け止め方の訓練を行ふ訳ですが、表現についても、独りよがりの表現では自分の意思は相手に正確に伝はりませんので、相互批評といふ方法で、正しい表現の仕方を訓練することになります。どちらも他の人の力を借りなければできないのです。



そのためには「腹を割って語る」といふ姿勢が必要になります。自分をさらけ出すといふことは気恥かしいことですが、本音で言葉を交すことがなければ、人と人とを繋ぐ力にはならないし、友情を育むことなどできません。短歌創作そのものがある面です。すでに自分をさらけ出すことにほかならない訳ですが、それなくして自己改革はありえないと言っているいでせう。

短歌創作に完全といふものはありません。それはもともと人そのものが不完全なものであり、また、言葉といふものの宿命によるものと言ってよいかと思ひます。言葉は「ことのは」とも言ひますが、それは「ことのはしっこ」といふ意味であるといふ説があるやうに、「こと」そのものを示すものではないからです。夕焼けの美しさを言葉で説明するのが極め

て困難であることは皆さんも御経験のあることだらうと思ひますが、「こと(事実)」と「ことのは」の間には大きな宿命的な開きがあるといふことを認識しておかなければならないだらうと思ひます。

そのことを踏まへて考へますと「ことのは」がおろそかになればなるほど「こと」そのものを伝えることはいよいよ怪しくなる訳ですから、「ことのは」には必然的に高い厳密性が求められるといふことになります。間違つた言葉でまともな思索はできません。正しい言葉は正しい思想を育み、正しい生き方をもたらしめます。美しい言葉は美しい心を育み、美しい生き方をもたらしめます。しかしながら、それを独りで修練することは現実的に困難です。そこに短歌を詠み交し、批評し合ふことの重要性があります。短歌は作りっぱなしではだめで、周りの人の意見を聞いて、可能な限りよりよい表現に近付ける努力をして頂きたいものです。

### 批評と添削

短歌の作り方については、昨日庭本秀一郎先生が丁寧にお話し下さったところですが、私の批評も、皆さんのお歌が先生がご指摘になつた幾つかのポイントに沿つて作られてゐるか



どうかをチェックして行くといふ作業になります。

大山に登りしをりに

先に行く友らのもとへ行きたくとも己の足が言ふこと利かぬ

幾度も足を止めつつ登る先に我が名を呼びつつ待つ友四人

一首目の「己の足が言ふこと利かぬ」は、仰々しく力みがあります。短歌であると思ふと思はず構へた表現になってしまひがちですが、読む人に普通に語りかけるやうな表現にすれば無理がないのです。

二首目は体言止めになってみますが、述語の「あり」が省略されてをり、納まりが悪くなつてゐます。韻律も整へて、次のやうにしてみました。

先に行く友らのもとへ行きたくもわが足疲れて（萎えて）ままならぬなり

幾度も足を止めつつ登る先に我が名呼びつつ友ら待ちをり

○  
大山阿夫利神社で

神社から厚木一帯見渡せば遠くに来たなとしみじみ思ふ

土産屋で声張り上げるおばちゃんの気迫に押されだんご買ったる

作者は、だんごを買ったのはおばちゃんの気迫のせみにしてゐるのですが、売り手は買ひ気のありさうな人にとりわけ強く勧めるのが常ですから、私にはおばちゃんの声よりもむしろだんごに向けられてゐる作者の目線の方が気になってしまひます。

それはさておき、一首目の「一带」は漢語で硬い感じがしますし、「来たな」は口語です。二首目の「張り上げる」も口語で、結句は敢へて連体止めにする必要はないでせう。それらを修正して、次のやうにしてみました。

神社から厚木国原見渡せば遠くに来たりとしみじみ思ふ

土産屋で声張り上ぐるおばちゃんの気迫に押されだんご買ひたり



隆大たかしろは勉学励むその姿日頃の自分即見直すよ

この歌は、必要な助詞が省略されてゐるためにしなやかさがなく積み木のやうな歌になつてゐます。「見直すよ」は口語です。それらを修正すると、

隆大が勉学に励むその姿に日頃の自分を即見直さむ

となりますが、今度は韻律が乱れてしまひます。友達を「隆大」と呼ぶのも、親しみはあ

るものの、歌の主題である敬愛の心情を含めることができませぬ。短歌は具体的に詠むことが基本ですが、その目的は、内容を分かりやすく適切に伝えることにあります。具体的過ぎると却ってくだくだしくなる恐れがありますから注意しなければなりません。それらを踏まへて、次のやうにしました。

我が友が学び勉むるその姿見れば我が身の省みらるる

○ 大山の頂き前でおばちゃんが甘い誘惑されにけり

前出の短歌がありますので、「甘い誘惑」が団子を売ることであるのは明らかですが、この歌だけではとんでもない誤解を受ける恐れがあります。独りよがりの不正確な表現であると言はなければなりません。しかも、字足らずになってゐます。短歌は文字どほり歌ふものであつて、調べがよくないといけません。読む人に正確に伝えるやうな言葉で五七五七七の調べに乗せて詠む。そのことを銘記しておいて頂きたいと思ひます。

大山の頂き前でおばちゃんが団子売らむと声をかけくる

○ としてはどうでせうか。

カレー<sup>カレ</sup>食<sup>シ</sup>み腹<sup>ハ</sup>ふくれたりて大山での心の動き歌にぞできず

先づ歌を作ってから食事をすべきではなかつたかと思ひますが、この歌の最大の難点は、散策の折の思ひを「心の動き」といふ概括的な表現にしてしまったことです。そのために、作者の心情を推し量ることができません。具体的に詠んでおかなければ、作者自身でも経験を回顧することができなくなります。また、結句は係結びになつてゐますが、ことさら強調すべき内容でなければ、却つておかしいことになつてしまひます。

カレー<sup>カレ</sup>食<sup>シ</sup>み腹<sup>ハ</sup>のふかれて大山での心の動き歌にならざり

としてみましたが、肝心な「心の動き」が不明なのでこれ以上の添削は困難です。再度、「心の動き」の内容に焦点を当てて作り直してみてもほしいと思ひます。

きついても思へど無心で登り行き頂上皆で記念写真

この歌も必要な助詞と述語が省略され、一文になつてゐません。結句が字足らずで、時制にも問題があります。短歌も国文法の制約を外す訳にはいきませんので、時間の経過も含めて一つの文章として全体のつながりを整へる必要があります。この歌のポイントは、皆で揃つて写真を撮つたときの一体感でせうから、

大山の険しき山路登り来て皆で撮りたり記念写真を  
あるいは、

山坂をひたすら登り頂上で友らと撮りぬ記念写真を

あるいは、

山坂を息切らしつつ登り来て友らとともにうつし糸を撮る

などの表現を参考にして、再度、推敲して頂ければ幸ひです。

○ 国武先生の御講義を拝聴して

活き活きと源氏物語を誦み給ふ師の君の声のほがらかに聴こゆ

懸命に心見つめて言の葉をのぶる友らを得るはたふとし

心のこもったいい歌です。一首目の「聴こゆ」は、受動的な状態ですから「聞こゆ」でよいと思ひます。韻律の関係から「声の」の「の」は省略してもよいかと思ひます。二首目の「言の葉を」は「思ふこと」又は「その思ひ」に、「得る」は「得たる」にした方が正確でせう。全体的により具体性があると、もっとよい歌ができると思ひます。

山道の脇に流るるせせらぎの音聞こゆるは涼しく思はる

大山を息切らしつつ登りゆき見えし社の美しかりけり

体験が具体的に詠まれてゐて、分かりやすいいい歌です。一首目の「聞こゆるは」は「聞こえて」に、二首目の「見えし」は「登りゆき」との主体を統一して「見たる」にした方がつながりがよくなります。

○

日の本の國の姿をふり返りもののはれに気付く嬉しさ

「ふり返り」は正確さを欠きますから「思ひつつ」とすべきでせうが、「國の姿を思ひつつ」とするよりも「古き昔を訪ねつつ」とした方がより歌の主題に近づけるやうに思ひます。内容は源氏物語のこととせうから、

日の本の古きみふみをたどりつつもののはれに気付く嬉しさ

とすれば、更に具体的な詠み方になるのではないでせうか。

「しきしまの道」について

万葉集に代表されるやうに、わが国では古い時代から短歌を詠み交す伝統がありました。万葉集は世界の奇跡と言はれますが、それは、あらゆる階層の国民が短歌を詠んでゐるといふ事実です。わが国の識字率が高いことに外国人が驚嘆してゐる事例が戦国時代以降の資料に多々あることはご存じの方もをられるでせう。江戸時代の武士階級の識字率はほぼ一〇〇%、庶民も寺子屋等のおかげで五〇%は読み書きができたと言はれてゐます。同時代のイギリスの識字率は一五%であつたと言はれてゐますから、それが当り前であつたのは驚異的なことです。

漢字の伝来は四世紀、二世紀、紀元前と多説ありますが、異文化との交流の中で漢字仮名混じり文といふ独特な表現形態が確立していったことも含めて、私たちの祖先はかなり古い時代から言葉に対して極めて繊細で鋭敏な感覚を持ち、それを大事に守り育ててきたといふことが随所に窺はれます。

例へば、万葉の歌人・山上憶良（六六〇—七三三）の「好去好來の歌」（遣唐使・多治比広成への饞の歌）には、「神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 倭の国は 皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ継がひけり 今の世の 人もことごと 目の前に 見たり 知りたり…」といふ件があります。

これについて夜久正雄先生は「皇神の厳しき国、言霊の幸はふ国」とは「天皇統治の国がらのさかんな国、和歌による人の心の通ひあふ国」といふので、これが日本の国家生活の独自性でもあり特質でもあり信念でもある、と憶良は考へたのである。しかもこの二つのことは別々のことではなくて、日本といふ国がらの表裏両面である、といふのがこの神代から言ひ伝へたコトバの深い意味合ひなのである。『万葉集』はこの信念の所産である。その後、この道は広くなり狭くなりながら一すぢにつたへられ、千年の後に至つて、明治天皇さまはこの道を一語で『敷島の道』とおほせられたのである。」と解説してをられます（『しきしまの道』研究）六八頁）。

このやうな文化的土壌を背景として、我国には膨大な数の短歌が随所に遺されてゐます。それは、無数の祖先の命の証であり、個性に満ちた様々な生き方を示し、折々の瑞々しい感性を窺はしめるものであります。それらは、我々をよりよい人生に導く珠玉の言葉の数々であり、まさに宝の山であると言はなければならぬでせう。

「しきしまの道」とは日本人として生きる道と言つてよいかと思ひますが、現代においても、短歌が果たすべき役割は少しも変はつてはゐないのではないでせうか。我々の祖先は生き方を統べる手立てとして、営々として短歌に親しみ、大いなる言葉の大河を形成し、互ひにそ



の流れの中で身を清め、心を正して来たのです。しかも、皇室が率先してそのことにお取り組みになって来たことは、これまでの各講義の中でも紹介されてきたとほりです。

『短歌のすすめ』にも多くの御製が紹介されてゐますが（二七五頁）、そこには「国民とともに」との大御心が常に拝察されるやうに思ひます。国民もまた短歌を互ひに詠み交すことの根底に、ともに生きることの喜びを共有することが推察されるのであり、それが「しきしまの道」の基本的な姿ではないかと思ふのです。

をはりに

私達にとって、誰かのために生きるといふことはある面では自己犠牲を伴ひますから実際はとても難しいことですが、誰かとともに生きることには自然にできることではないでせうか。友達は何かを共にするから友達なのであって、共に生きるとは何と素晴らしいことではありませんか。個人と個人は元々異なる存在ではあるけれども、心を寄せ合ひ通はせ合ふことによつて、共に生き、共感することができるといふことが出来る。それを助けて来たのが短歌であり、その共感の世界が「しきしまの道」です。それは、我々の祖先の偉大なる知恵であり、我々日本人の

莫大なる遺産でもあります。『短歌のすすめ』の冒頭にありましたやうに、短歌を真に「しきしまの道」として甦らせることの意義を今一度お考へ頂きたいと思ひます。

皆さんはこれから各班に戻られて相互批評に取り組まれる訳ですが、真剣な中にもしみじみとした心の交流が図れる時間にして頂ければ幸ひです。お互ひに知恵を出し合ひ、ともに心を寄せ合つて素晴らしい広やかな世界の扉を開いて頂きたいものです。

# 一年の歩み

——第五十四回合宿教室までの一年——

第五十四回合宿教室運営委員長

若築建設(株)九州支店

池松伸典





## 運営委員会の動き

三重県伊勢市の「神宮会館」で開催された第五十三回全国学生青年合宿教室は、平成二十年八月二十四日、三泊四日間の充実した研鑽を終へて閉幕。各参加者は再び始まる日常の生活に新たな期待と希望を抱きつつ家路に着いた。合宿二日目の深夜に開かれた国文研の臨時拡大理事会で、次回（平成二十一年）の第五十四回合宿教室の開催地を神奈川県厚木市とすることが決まり、合宿運営委員長を私が務めることとなった。かうして伊勢での合宿閉会と時同じくして翌夏の厚木合宿へ向けた活動が開始された。

活動の中心となる運営委員と指揮班長を決定することからまづ始まったが、運営委員には合宿開催地の関東地区から飯島隆史氏、最知浩一氏、北浜道氏の三氏、関西地区から北村公一氏、九州地区から酒村聰一郎氏（福岡）、久保田真氏（熊本）、指揮班長には澤部和道氏にお願いし、それぞれ快諾を得た。各人とも社会人として仕事を抱へながらの取り組みであり、その任の重さを承知しながら、互ひに連絡を取り合ひつつこの一年を歩んでゆくことになった。十月四日から五日にかけて、第一回運営委員会が合宿地となる厚木市七沢の市立「七沢自

然ふれあいセンター」で持たれた。この場所はこれまでにも四度にわたって合宿教室が開催されてをり、国文研究会員の多くにとって思ひ出深い所でもある。これまで半世紀以上の長きに渡って続けられてきたこの合宿教室への諸先生、諸先輩方の切なる願ひと思ひを偲びつつ、どの様な合宿を目指すのかについて、合宿教室の意義を再確認再検討しながら協議がなされた。

折から生起したリーマン・ブラザーズの経営破綻（九月十五日）は、アメリカ経済に対する不安を一挙に広げることとなり、世界経済を大きく揺るがす発端となったが、日本国内でも企業倒産の増加や株価の下落をもたらし生活に対する不安感が急速に拡大した。今後の日本の国を背負って立つべき学生にとっても就職難といふ問題が大きく取り上げられるらるやうになってゐた。ただその議論も単に個人的問題として目先を見ただけのものが多く、かういふ時であればこそ我々が生きて行く上で大切なものは何なのか、守っていくべきものは何なのかといふ根本的な問題がなほざりにされてはならないと思はれた。さうであればこそこの合宿教室の持つ意味合ひの深さがしみじみと感ぜられてきた。

この第一回の運営委員会では各地の活動状況、合宿教室日程素案検討、招聘講師、参加者勧誘など様々な協議を行ったが、その合間に緑豊かな七沢自然ふれあいセンター内の諸施設

を見学した。中でも厚木の市街を遠く眺める位置に設けられたジューク・ボックス付きの「童謡の丘」では、この景観を目にしながら「朝の集ひ」で小学唱歌・童謡を唱ひ味はふことが良からうといふことになった。実際の合宿では、宝辺矢太郎氏の解説の下、参加者一同で合唱して、爽やかな気持ちで一日をスタートさせることが出来た。

十一月二十九日には、合宿第二日目に予定されてゐる短歌創作を兼ねた「野外研修」(レクレーション)の候補地調査に関東の運営委員と一緒に見て回った。深い緑に包まれた七沢周辺には野外研修に格好の場所がいくつもあつた。その中で時間的制約の問題も抱へてゐたが古くから霊山として信仰されてゐる大山阿夫利神社(下社)へ行くこととなった。その後さらに細部の協議を重ね翌年一月十日には澤部指揮班長と実際に大山阿夫利神社(下社)にお参りして所要時間などを確認して最終的に決定した。澤部指揮班長の綿密な計画により諸問題を解決しつつ当日を迎へたが、実際にはバスの出発時刻が予定より遅れるなどのハプニングはあつたが無事予定通りの実施することが出来、さらに短歌にも多く詠まれて、参加者それぞれに残るものとなつたことを嬉しく思ふ。

その後十二月廿日に第二回運営委員会を最知浩一運営委員の手配で東京駅前の新丸の内センタービルディング会議室で行つた。招聘講師については運営委員会の素案を踏まへて既に

十一月二十四日の国文研理事会において長谷川三千子先生、ペマ・ギャルポ先生のお二方にお願ひすることに決まつてをり、ここでは内部講師を含め合宿全体の流れを再検討した。中でも勧誘ピラに掲げる大テーマを「日本は必ず復活する、国語がある限り！」としたいとの提案がなされ後日これに決定した。発案者の北村公一運営委員は「世界的な不況、混迷する世情に際してわが国の行く末を考へた時、立ち戻るべき思想の原点は何か？といふやうな合宿テーマにしたい」と語ってくれた。厚木合宿で目指すべき方向が見えてくるやうになつた。

その後も、適宜メールや電話、書簡で、細部を詰めるため連絡を取り合ひながら準備作業をすすめた。

翌年四月十八日には、「七沢自然ふれあいセンター」で開催された「関東地区国文研会員の交流合宿」（四月十八日・十九日）に合はせ関東地区運営委員が集まり、合宿日程の確認・微調整、合宿勧誘について各地区の現状報告及び今後の方策について協議を行った。

また六月廿日には「七沢自然ふれあいセンター」において稲津利比古国文研事務局長を交へ、合宿会場を含め運営全般についての最終確認調整を行ふとともに、さらに参加者勧誘について協議を重ねた。



この間、三月二日にはペマ・ギャルポ先生をその事務所に山内健生国文研常務理事、稲津利比古国文研事務局長（常務理事）と一緒に訪ねて、御講義への要望をお伝へし、先生から故小田村寅二郎先生、故倉前盛通先生の思ひ出など貴重なお話を伺ふことが出来た。

### 各地での活動

日頃より休日や平日夕刻からの時間を活用して各地で研鑽が行はれてゐる。

関東地区では、短歌会（会員と学生による自作の短歌相互批評の会）、四土会（黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読）、正大寮読書会、国文研塾（会員と学生による勉強会）、防衛大学校輪読会、柴田会（小林秀雄著『本居宣長』輪読、論考集『葦芽』の発行）、太子会（聖徳太子『法華経義疏』の講読）、調つづの会（本居宣長『古事記伝』の輪読）、円覚寺伝宗庵での読書会（名歌でたどる日本の心』の輪読）などが継続して実施されてゐる。

九州地区では、九州工業大学学生による週一回開催の『孟子』『講孟笥記』輪読会、福岡大学勉強会、国民文化懇話会、八雲会（短歌の会）、古川会（時事問題の勉強会）、久留米会（古典の輪読）、熊本地区での例会（週一回）、鹿児島地区での会員勉強会（月一回）などが続けられてゐる。

る。

また関西信和会では月一回の「輪読、歴史散策、会員の発表」を行つてゐる。

福岡大学では福岡大学経済学部教授阿比留正弘先生のゼミ学生を中心に毎週内村鑑三の「代表的日本人」の輪読が行はれてゐた。五月十四日には国文研常務理事・(株)寺子屋モデル代表取締役社長山口秀範氏の講義が福岡大学内で行はれ、これらを契機として多くの学生が厚木合宿に参加してくれた。

その他主なものについては国文研ホームページでも明らかにしてゐるが、国文研の活動の基本としては、故小田村寅二郎先生がかねて大切にされてきたマン・ツー・マン運動、一人の人間が一人の人間といかに付き合ふかといふことを思ふ時、二人が集まれば輪読が出来る、短歌の相互批評の研鑽が出来る。

多くの人が集まる研鑽もあれば個人の自宅に集まり研鑽を積むことも各地で行はれてゐる。七沢合宿で御講話をお願いすることになる岸本弘氏の富山県小矢部市の自宅では「かたかこの会」の例会が行はれてをり、さらに伊勢合宿で共に学んだ班員とのやりとりを「伊勢に集ひて」に纏められてメール発信されてゐる。また熊本在住の折田豊生氏からは各地の会員が詠んだ短歌を収載した「短歌通信」が全国に文書でメールで発信されてゐる。

かうした各地区での勉強会で一人一人の心の籠もった言葉に触れる活動は、日常の職業生活の中にあつて、大切なものは何なのかについて考へさせられるものとなつてゐる。

地区合宿

日頃の勉強会をさらに深めるために各地区で寝食を共にして学ぶ小合宿が開催された。

合宿名	年月日	場所
関東地区秋季学生合宿	平成二十年十一月八〜九日	川崎市青年の家
九州工業大学秋季学生合宿	平成二十年十一月二十九〜三十日	梅鶯塾（福岡県宮若市）
熊本大学秋季学生合宿	平成二十年十二月十三〜十四日	富田屋旅館（山口県萩市）
九州工業大学春季輪読合宿	平成二十一年四月四〜五日	梅鶯塾（福岡県宮若市）
関東地区会員交流合宿	平成二十一年四月十八〜十九日	七沢自然ふれあいセンター

関東地区秋季学生合宿では、「美を求める心」を合宿テーマとして初日は東京・上野の国立博物館で美術展を鑑賞し、そこから川崎市に場所を移して、学生発表、社会人発表、輪読、短

歌創作等の内容で学生を中心にした合宿が行はれた。丁度合宿開催前日に発売された『新潮』十二月号に小林秀雄先生の未発表講演の一部がCD付録として付いてゐて急遽皆と一緒に小林秀雄先生の肉声に耳を澄ませる時間を持った。さらに九州工業大学から鷲頭祥平君、谷口耕平君が参加し学生発表を行った。研鑽する場所は離れてゐても志を同じくするものとして互ひに語り合つた。

また九州工業大学学生合宿は週末に梅鶯塾で続けられてゐる輪読会の延長上に持たれたもので、秋と春に開催された。この梅鶯塾は小野吉宣氏が学生研鑽のために設けられたブレハブ造りのもので、木々に囲まれた閑静なところで、研鑽を積むには格好の場所である。秋季合宿では合宿教室でも御講義して頂いた占部賢志先生から「再考 吉田松陰の体験と思想」といふ演題でお話をして頂き参加者一同感銘を受けた。さらに翌春の四月合宿では学生発表と共に、長谷川三千子先生の「言霊のさきはふ国」の文章を輪読した。

他にも熊本大学では吉田松陰ゆかりの地山口県萩市で合宿を行ひ、吉田松陰「戊午幽室文稿」を輪読し、さらに松陰神社に参拝して、野山獄跡などを見学した。

関東地区会員交流合宿は磯貝保博副理事長を中心に企画されたもので、会員中心の勉強会であった。折から業務で上京中の福岡市在住の藤新成信理事も参加して、八月の厚木合宿に

向けての心構へも確認し合った。

これらの合宿は、日頃の読書会等の研鑽とはまた違った意味合ひで、寝食を共にしながら夜遅くまで語り合ふ中から自分の心の中に確かなものを見いだしていく契機となつてゐる。

### 講演会

四月二十五日には、明治神宮参集殿において国文研主催の国民文化講座が開催され、藤原正彦先生（お茶の水大学名誉教授）に「祖国とは国語」の演題でご講演して頂いた。激しい降雨に関はず学生参加者数十名を含む総数二百三十余名の来場があり、国語を読み味はふことの大切さを改めて気づかされ、合宿教室で行はれる「輪読」や「短歌創作」が混迷する現代において如何に重要であるかを再認識させられたが、参会者には厚木合宿の案内ビラが配られて参加の呼び掛けも行はれた。

また四月十八日には熊本大学で「大学時代に何をすべきか」数学者岡潔に学ぶ」の演題で九州大学大学院准教授高瀬正仁先生にご講演して頂いた。また一方で関西地区では五月に講演会を計画してゐたが、新型インフルエンザの影響で残念ながら直前に中止せざるを得なく

なった。他にも国文研会員が講演する他団体主催の講演会に参加して、厚木合宿への案内ビラを配布して同志を見いだすべく努めた。

四月に入ると大学では新入生を迎へ、知人を通じてまた講演会等を通じて知り合った仲間達に各地の勉強会・読書会への勧誘が行はれ、厚木合宿教室への参加に向けたマン・ツー・マン運動が展開された。

合宿教室のあらし







第一日目（八月二十日・木曜日）

第五十四回全国学生青年合宿教室は、神奈川県厚木市七沢の「市立七沢自然ふれあいセンター」で開催された。当施設は、本会創立以来の会員であった故足立原茂徳氏が厚木市長時代に、「人と人との触れ合ひ、心の交流ができる施設を」といふことで市内小中学校の児童生徒などを対象にした宿泊研修施設として建設されたもので（当初の名称は「市立七沢自然教室」といった）、文部省認可の社団法人である本会も、これまで平成三年（第三十六回）、五年（第三十八回）、七年（第四十回）、九年（第四十二回）と過去四度の合宿教室で使用させてもらったが、この度は十二年振り、五度目の厚木開催であった。厚木市七沢の地は丹沢の山々の東に位置し、濃き緑に幾重にも囲まれた静寂の地であつて、しばしは日頃の喧噪を忘れさせてくれる宿泊研修にはもってこいの場所であつた。

全国から集ひ来たつた参加者はそれぞれの思ひを胸に、受付を済ませて開会式へ臨み、三泊四日の合宿教室は幕を開けた。

開会式では、國學院大学文学部二年相澤守君の開会宣言の後、主催者を代表して上村和男理事長が「若い時に、将来どう生きようか、どう生きるべきかといふ自らの志を立てること

が大切である。諸先生方の御講義を正確に聴き、班別研修では自分の思ひを率直に述べ合つて、日本はどうあつたら良いのかを共に考へて欲しい」と挨拶した。続いて参加学生を代表して九州工業大学四年谷口耕平君は「毎年合宿に参加して、そのたびにこれから一年頑張るぞといふエネルギーを得てゐる。それは同世代の人達と真剣に考へ、慰霊祭で日本を良くしていかうといふ誓ひを新たに作るからだと思ふ。皆で素晴らしい合宿にしていきませう」と呼び掛けた。式後、オリエンテーションが行はれ、池松伸典合宿教室運営委員長（若築建設（株）九州支店）から合宿の趣旨説明がなされ、澤部和道指揮班長（アサヒ飲料（株））から合宿日程上の留意事項が伝達された。

小休憩のあと、直ちに講義に移り、本会副理事長今林賢郁先生による合宿導入講義「一人一人が国を支へる柱とならう」が行はれた。初めに、二千年來の国の歴史の最先端に生きる日本人として祖先に対しても子孫に対しても恥かしくない生き方をしよう、その学びの場として提供されたのがこの合宿教室であると語り、福沢諭吉の「独立の氣力なき者は国を思ふこと深切ならず」の語を引かれて、一身の独立自立があればこそ「国の独立如何に係る所の事」に「心身共に鋭敏ならむこと」になると説かれた。そして大東亜戦争の歴史を知ることがわが国の眞の自立回復に不可欠であると指摘され、戦歿学徒の遺文遺歌などに拠りながら、

当時の学生の細やかな友情の世界を仰がれ、「かうした遺文遺歌を読めば、今の皆さんの心にも伝はるものがある筈である。それは所謂『八月十五日』で歴史が切れずに連続してゐる証に他ならない。歴史の真実を身に沁みて知ることは自分自身を取戻す第一歩であり、国を支へることに繋がる」と説かれて、合宿教室での学びの根本を提示された。

講義終了後、各班室に戻った参加者は聴講した講義について班別研修を行った（参加者は七、八名）この班に分けられてゐた。まづ皆で講義の内容をたどりながら、講師の最も伝へたかったことは何か、講義で重要なことは何であつたかを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて語り合つた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも行はれた。お互ひ初対面のせゐか、初めのうちは発言は少な目だったが、次第に討論も活発となつて、発言の疑問点やその真意をさらに質して、共感し合ひながら、相互の交流が深められていった。

夕食休憩の後、昭和音楽大学名誉教授國武忠彦先生（本会参与）によつて、「源氏物語ものあはれを知る」と題する講義が行はれた。冒頭で藤原正彦先生、岡潔先生お二人の数学者の「国語は全ての教科の基礎である」「数学の基礎は情緒である」との言葉に触れ、豊かな感情を養ふ「ものあはれ」について一緒に考へていきたいと述べ、本居宣長の言葉を引かれつ

つ、「古事記、万葉集の世界における本当の人の心とは善か悪かで割り切れるものではなく、分析的、知的に考察されるものでもない」、「外から眺めるのではなく、心の中に目を移し入れるやうにして内から見るやうに努めることで感じられ見えるものがある」、さらに「今学問において大事なことは、自分を捨てて共感すること、相手に飛び込むといふことである。源氏物語のものあはれを知ることの意味はそこにある」と述べられ、柏木の巻を取り上げ、奥深く細やかな日本人の心の世界をお示しになった。

## 第二日目（八月二十一日・金曜日）

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。早朝六時半に起床した参加者は洗顔を済ませて直ちに、爽やか朝の冷気に包まれた広場に整列した。先づ国旗掲揚が参加者による国歌斉唱とともに行はれ、ついで互ひに「イッチ、ニツ、サン！」と号令を掛け合ひながらラヂオ体操を行った。そして山口県立熊毛南高校教諭寶邊矢太郎先生（本会理事）の解説と音頭によって、朝ごとに「文部省唱歌」「童謡」を合唱した。第二日目の朝は「とんがり帽子」、第三日目の朝は「里の秋」、第四日目の朝は「われは海の子」。参加者は心身を整へて一日の研修に取り

組んだ。

午前は「国体と民主主義」と題する講義が埼玉大学学養学部教授長谷川三千子先生によって行はれた。最初に、今日、自明のこととなってゐる「民主主義」について、「人民の、人民による、人民のための政治」によって代表されるその「一見真つ当で穏やかな顔」の皮を一枚剥ぐと、本当は怖い「民主主義」の原理が控へてゐると問題提起された。フランス革命の思想的背景と実際の推移を検証され、デモクラシーの語源である「民衆の力」が持つ危険な側面に触れつつ、フランスとイギリスの差異を説かれて、さらに「五箇条の御誓文」に見られる「日本流民主主義の精神的伝統は神話にも見え、上に立つ天皇が国民を『おほみたから』（大きな宝）と呼んでゐる、かうした日本流の政治理念を世界に発信すること」にこ



そ意味がある」と根本に立ち帰って物事を見極めることの大切さを説かれた。

午後はまづ、短歌創作を兼ねた野外研修を前に、東洋紡績(株)勤務の庭本秀一郎先生によって短歌創作導入講義が行はれた。初めに、昨年の合宿教室で実際に短歌を創作した参加者の感想文を紹介しながら、短歌を詠むに当たっての心得を「感じたことを素直に詠むこと」など分りやすく説明された。また小学校五年の児童が母の日にちなんだ母のために作った短歌などの実例を挙げながら、「感動を率直に具体的かつ正確に詠むこと」で伝はる短歌の世界の広がりについても述べられた。

このあと参加者は短歌の創作に取り組むため、合宿所から貸切バスに分乗して大山へと向った。古くから雨降山あふりやまとも呼ばれた信仰の山で、阿夫利神社あふりは延喜式にも載ってゐる古いお宮である。麓には土産物屋や休憩処が軒を連ねてゐる。山頂にお社があるが、時間の制約もあつて参加者は中腹の阿夫利神社下社までを、班ごとに徒歩で、あるいはケーブルカーを使って上り、参拝した。再び合宿所に戻った参加者は夕食休憩の時間までを有効に使って短歌の創作に勤しんだ。

夜は桐蔭横浜大学大学院教授のペマ・ギャルポ先生による「アジアにおける日本の役割」と題する講義が行はれた。最初に「アジアの一員として、もっと存在感・発言力を高め、ア

アジアの国々から一致して応援されるやうでなくてはならない」と述べられ、「八月六日（広島）・九日（長崎）の被爆の日を迎へるたび日本から発せられる、まるで日本が加害者であるかのやうな声にアジア諸国は戸惑ひを感じてゐる」と日本国内にみえては分らない問題点を指摘された。ついで第二次大戦前、アジアにおける真の独立国は日本だけであつて、当時の日本人は今よりも地球的規模で物を見てゐたと振り返られ、戦後のアジア諸国の経済発展は日本の協力と援助なくしてはあり得なかつた。日本はアジア諸国の憧れとお手本であつたし、日本人の公共心、仕事に対する態度、思ひやり、お蔭さまといふ姿勢が、「日本に学べ」の声となつたと述べられ、日本人は自分の国に自信と誇りを持つべきだと強く説かれた。

### 第三日目（八月二十二日・土曜日）

午前は「体験と思想―千秋の人 吉田松陰に学ぶ―」と題する講義が福岡県立太宰府高校教諭占部賢志先生（本会理事）によつて行はれた。冒頭で「吉田松陰は明治の指導者を育てた立派な教育者とよく言はれるが、さう規定してレッテルを貼つた瞬間、その人は松陰の内面を知らうとしなくなる」と述べ、歴史上の人物に学ぶとは如何なることなのかといふ根本問題

を提示された。そして兵学者・松陰が国史の真姿（国柄の把握）へと開眼して行く過程を松陰自身の言葉で辿られ、国史の勉強に悪戦苦闘をして行った松陰の直向きな研鑽の様子を述べられた。長崎に来たプチャーチンの率あるロシア軍艦に乗らうとして江戸から長崎へ急行した松陰は、その途中、初めて京都を訪れ、孝明天皇が国の行く末を案じて日々早朝沐浴齋戒されてゐることを聞いて深く心を動かされ、翌朝御所を訪れて「鳳闕を拝す」といふ詩を詠んでゐる。「これは松陰の痛切な体験がそのまま文字になつたもので、『野人悲泣して行くこと能はず』と詠んだ一人の日本人松陰の切実な体験なくして日本の歴史、維新を知ることはいかならない」と熱く語られた。

午後は、前日の大山阿夫利神社への野外研修の折に参加者が詠んだ短歌をプリントしたホチキス留め冊子に拠りながら、創作短歌全体批評が熊本市環境保全局環境事業部東部環境工場長の折田豊生先生（本会参与）によつて行はれた。最初に、短歌は心と心を結びつけるものだが、「正しくものを見るためには正しい言葉を使はないといけない」、「美しく正しい言葉は正しい思想、美しい生き方に繋がる」と述べられ、短歌創作は言葉の修練でもあり相互批評はその大切な一歩であると相互批評の意義を語られて、参加者の歌の批評に入つて行かれた。うまく表現できてゐない詠者のもどかしさを的確に衝かれた添削に思はず笑ひが起り、会場



は和やかな雰囲気にも包まれた。

その後、各班室に戻った参加者は班別短歌相互批評に臨んだ。順番に自作の短歌を取り上げられたことで、各参加者は己の心の動きを言葉にすることの難しさ、人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。詠者の感動に相応しい表現を求めて予定の時間を超過する班もあったが、相手の心に思ひを凝らして心を砕くといふ余所ではなかなか体験できない貴重な時間ともなった。

夕食後は学生時代に合宿教室参加経験を持つ二名の若手会員が日頃の思ひを語る会員発表が行はれた。初めは(株)寺子屋モデル講師の横畑雄基氏が、現下の学校教育の欠陥を少しでも補ふべく各地の幼稚園や企業、神社などで展開してきた偉人伝講座が、昨



年秋は初めて海外（ドイツ・ミュンヘンの日本人学校）で実施されたといふ。その実現に至るまでの苦しかったプロセスと子供達に感動が伝はった時の喜びとを語った。そして将来は家庭や学校であふれるやうな思ひで先人の生き方が語られ折々に偉人の言葉が行き交ふやうな、そんな国にして行きたいと抱負を語った。続いて（株）伊佐ホームズの小柳雄平氏が、「石ばしる垂水の上のさわらびのもえ出づる春になりにけるかも」（万葉集、志貴皇子）を朗詠して、自分の建築設計の仕事もこの歌のやうに美しく流れ出るものになりたいと語り、仕事をする上で力となった岡倉天心・正岡子規等の言葉を紹介した。最後に自分を支へてくれた明治天皇の御製「いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ」と倭建命の「はしけやし吾家の方よ雲居起ち来も」の二首を朗詠して、日本の歴史に生かされてゐることへの感謝の思ひを語った。

ついで平時戦時を問はず生涯を祖国に捧げた全ての御祖先のみ霊をお祀りする慰霊祭が行はれた。祭儀に先立ち元新潟工業大学教授大岡弘先生（本会理事）から慰霊祭齋行の趣旨が述べられその次第と手順が説明された。ついで参加者は屋外に設へられた齋庭へと移動。祭儀では祓詞に代へて三井甲之の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の歌が（株）寺子屋モデル代表取締役社長の山口秀範氏（本会常務理事）により朗詠され、

また東急建設（株）技師長奥富修一氏（本会理事）によって御製拝誦、磯貝保博副理事長によつて祭詞奏上が行はれた。星空の下、祭儀は古式を尊びつつしめやかに執り行はれた。

左は拝誦された御製（と御歌）と奏上された祭詞である。

### 明治天皇

述懐（明治三十七年）

國をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にはにたつもたたぬも

子（明治四十年）

かなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし親のいさをを

歌（明治三十八年）

かぎりなきものと聞くなる言の葉の道の高ねをいつか越ゆべき

### 昭和天皇

折にふれて（昭和二十三年）

悲しくもたたかひのためきられつる文の林をしげらしめばや

靖国神社百年祭（昭和四十四年）

國のためのちささげし人々をまつれる宮はももとせへたり

明治神宮鎮座六十年大祭にあたり明治天皇を偲びまつりて（昭和五十五年）

外國とつくにの人もたたふるおほみうたいまさらにおもふむそぢの祭に

今上天皇

明治神宮御鎮座八十周年にあたり賜った御製（平成十四年）

しろしめしし御代かへりみて日の本のもとる成りたる様をしのびぬ

歌会始お題「幸」（平成十六年）

人々の幸願ひつつ国の内めぐりきたりて十五年経つ

歌会始お題「生」（平成二十一年）

生きものの織りなして生なまくる様見つつ皇居に住みて十五年経へぬ

※（「続きました、本年平成二十一年は天皇皇后両陛下には、御成婚満五十年といふ記念すべき年で

あり、ここに皇后様の御歌を拝誦しようとするものであります」

### 皇后陛下

明治神宮御鎮座七十年にあたり（平成三年）

聖なる帝に在して越ゆるべき心の山のありと宣らしき

歌会始お題「幸」（平成十六年）

幸くませ真幸くませと人びとの声渡りゆく御幸の町に

歌会始お題「生」（平成二十一年）

生命あるものかなし早春の光のなかに揺り蚊の舞ふ

### 祭詞

我らここ さねさし相模大山の麓 緑に囲まれし厚木市立「七沢自然ふれあいセンター」に  
十二年ふりに集ひ来たりて 第五十四回全国学生青年合宿教室を営み 研鑽かさねて は  
や三日目の夜を迎へぬ  
今し 天つ日は沈み 夜のしじまに包まれし 今宵涼けき広庭を 斎庭と定め浄めまつりて

とこしへにみ国を守り続けまします遠つみ祖たちのみ霊　み国の守りにみ命を捧げまししあまたはらからのみ霊を招ぎまつりなくさめまつらむと　海の幸山の幸御食御酒ささげみ祭り仕へまつらむとす

「内平らかに外成る」の深きみ祈りのこめられし平成の　御世始まりたるも激動の時のはや二十年過ぎにける　外つ国のあまたの国に狂信のやからはびこりて恐ろしき爆弾テロを頻発せしめ　罪なき人の命をば　次々奪ひ止むこともなし　み国におきては　阪神淡路に新渇に　と大きな地震の起り来たりて　あまたの命失ひし自然災害ありて後　さらにまた世界規模なる金融の危機の襲ひ来たりて　み国の経済は不況の波をかがふりたり

加へて　北朝鮮のふるまひは　拉致家族の悲痛この上なき思ひに応へるそぶりさへなく　あまつさへ核実験を強行し　み国の空を侵しつつ　弾道ミサイル発射せり

内外に対処すべきは多かるも　国政荷なふ要の国会は　選挙を前に政党の　かけひきに奔ることのみ多くして　重き議事残せしまま　解散とはなりぬ　自民党民主党ともにマニフェストなる公約をかかげし中に　生活や経済改革うたひしも　進むべきあるべきみ国の姿をば　語りかくなることわづかなるは嘆はしきことなりき

自虐史観にとらはれ日の本の歴史を恥る人あれど　み国守りみ国愛せし先人の　残せし文に

み言葉に 思ひたどればおのづから 米国の姿美しと 心の内にしかと見え来たりぬ 我もまた 米国の民の一人なれば この日の本に生れしを 誇りと思ふ念ひの起り来たりて 同胞感ぞ生れける 国民くわんたみの心の裡に 同胞感のなかりせば 自立の道はあるはずもなかるべし

ここ厚本市七沢の地に集ひたる 我らがために語られし

長谷川三千子先生 ペマ・ギャルボ先生 さらにまた國武忠彦先生 今林賢郁先生 占部賢志先生の み心のこもりし御講義の み言葉固く心に刻みて 合宿の終りてのちも米國守らむと 心を定め学び励まむ

さはあれど 我らは 我らの努めのいたらなさ まことの心の足らざるを恥ぢつつも 今よりは いよよ心合はせてもろともに 心を鍛へ言葉を修め み祖たちに連らなりて 祖国日本をとことには 榮えゆかしめむと努め行かむと誓ひまつらむ

かしこかれども み祖たちのみ靈の大き導きにより 米國のゆくて守らせ給へ 我らが願ひを導き給へと 参加者一同に代はり 磯貝保博 謹み敬つつしひ恐うやまかこ申す

平成二十一年八月二十二日

慰霊祭の後、各班室では合宿最後の夜を迎へて班別懇談が行はれた。さし入れの清涼飲料や茶菓子を手に、旧知のやうに打ち解けた楽しい語らひが夜の更けるまで続いた。

#### 第四日目（八月二十三日・日曜日）

最終日の朝を迎へて、まづ元富山県立富山工業高校教諭岸本弘先生の講話「学問と友情」が行はれた。初めに本居宣長の『うひ山ふみ』の一節を引用され「自分が今まで学んできたことはここで宣長がはつきりと言ひ切つてゐた」と語られ、『古事記』には古き時代の明き直き日本人の心が記されてをり、この日本の国こそ自分にとつて掛け替へのないものであると実感が必要ならばどんな議論も意味をなさないと力強く述べられ、かつて教員時代に「母」といふ題で生徒たちが詠んだ短歌を紹介されて、それはまるで一人が詠んだの連作のやうであり、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の中の一節にある「個人的特異性を留め」ないほどに「没我的」であると評された。そして、勝鬘經義疏「我が子の稱は自他を別たす…」の箇所に触れながら、「親が子供と接するやうに、教員であれば生徒と、会社であれば同僚・部下と接することである」と御体験を交へて話された。



続いて合宿運営委員長挨拶で池松伸典委員長は「この四日間を振り返ると様々な場面が蘇り、また先生方からお聞きした多くのお話の中を駆け巡ってゐるが、私自身一人の日本人として生きてゐるといふ充実感を覚えてゐる」と述べ、かつて加納祐五先生（元本会監事）が話された「この合宿で実現できた事は、お互ひに心を開いて相手の心を本当に偲び合はうと懸命の努力をした事、そしてお互ひに語り合つた友の真心については少しも疑ふ事がなかつたといふ事。さういふ切実な気持ちを持つて生きていく中で、国のいのち、日本のいのちといふものも自ら見えてくる」とのお言葉を紹介した。「合宿が終れば再び現実の生活に戻る事になつて合宿で体験した感動も薄れがちになる。むしろそこからが大事なのであつて、合宿での体験を思ひ起してここで出会つた仲間と様々な交流を深めて行つて欲しい」と語つた。

ついで合宿教室参加者が「ここで何を思ひ、何を感じたか」を全参加者の前で語る全体感想自由発表の時間に移つた。次々と挙手をして登壇した参加者は合宿の日々を振り返つて、その感想を率直に披瀝した。「日本の国の素晴らしさと、その日本を守るために戦つた人々の思ひに触れることができた」、「若い人々の学ぶ姿に安心した、世界に誇れる日本のために皆さんに期待したい」、「松陰の言葉に直に触れて、彼の苦悩と体験が偉大な人格を作つたと実感した」歴史を学ぶとはレッテルを貼ることではなく、直に言葉に触れて人物と交はることだ

と感じた」、「慰霊祭の厳肅な雰囲気に今までになく緊張し、言ひ様のない感動を覚えた」、「孝明天皇のお心を偲ばれる吉田松陰先生のお姿に感動した」、「短歌相互批評を通じて、思ひを正確に表現することの難しさと同時に言葉と心を一致させることの大切さを学んだ」、「様々な講義や班別研修の中で、日本をいろいろな観点から捉へることができた」、「参加者の志と意識の高さに驚き、さういふ友を得たことを嬉しく思ふ」、「日本人本来の素晴らしい精神文化、伝統を取り戻さねばといふ思ひを強くし、今こそ深い勉強が必要だと感じた」……。

予定した日程が進み、いよいよ閉会式を迎へた。主催者を代表して澤部壽孫副理事長は「皆さんが体験した『心を働かせる』といふことが互ひの信頼関係を築き、伝統文化を継承することに深く繋がつてゐる。この『心を働かせる』といふことに意を留め、合宿で出会つた友と共に勉強して行つて欲しい。ここで学んだことを日常生活の中では非生かして行つて欲しい」と挨拶した。続いて参加学生を代表して福岡大学経済学部二年の岡松侑希君が「日本人としての自覚を持つことや良き友を作ることの大切さを学んだ。各地で同じ思ひを持った仲間がゐることを思ひ出しながら勉強を続けて行きたい」と今後の抱負を語り、来年の合宿教室への参加を呼び掛けた。そして、埼玉大学教養学部一年の山中利郎君の閉会宣言を以て第五十四回全国学生青年合宿教室の全日程は終了した。

参加者

(学生班 三十五大学) (洋数字は参加学生数)

東北大学1 埼玉大学1 東京大学3 東京芸術大学1 学習院大学1

国学院大学3 成蹊大学1 日本大学2 亜細亜大学1 日本歯科大学1

早稲田大学2 桐蔭横浜大学1 正眼短期大学1 大阪工業大学1 九州工業大学2

福岡教育大学2 九州女子大学2 福岡大学13 筑紫女学園大学1 西南学院大学2

中村学園大学2 総合学園ヒューマンアカデミー福岡校1 熊本大学2 高校生1

計 四十八名 (うち女子十七名)

(社会人参加者) 二十八名 (うち女子七名)

(招聘講師) 二名

(国民文化研究会) 七十名

(事務局・アルバイト) 五名

(見学者・慰霊祭協力) 七名

総計 百六十名

第五十四回(平成二十一年)全国学生青年合宿教室「日程表」

8月22日(土)	8月23日(日)
起床・洗面	起床・洗面
朝の集ひ	朝の集ひ
朝食	朝食
講義 占部賢志 先生	講話 岸本 弘 先生
	合宿運営委員長挨拶
班別研修	全体感想自由発表
	地区別懇談
	感想文執筆 第2回短歌創作 班別懇談
昼食	清掃
創作短歌全体批評 折田豊生 先生	閉会式 澤部壽孫 副理事長
	(閉会式終了後、昼食・解散)
班別短歌相互批評 (短歌再提出)	
夕食 入浴 休憩	
会員発表 横畑雄基 氏 小柳雄平 氏	
慰霊祭の説明 大岡 弘 先生	
慰霊祭	
班別懇談	
就寝	
消灯	

	8月20日(木)	8月21日(金)
6:00		起床・洗面
7:00		朝の集ひ
8:00		朝食
9:00		講義 長谷川三千子先生
10:00		質疑応答
11:00		班別研修 (写真撮影)
12:00	<b>開会式</b> 上村和男 理事長 <b>オリエンテーション</b> 池松伸典 合宿教室運営委員長 澤部和道 合宿教室指揮班長	昼食
13:00		短歌創作導入講義 庭本秀一郎先生
14:00	小休憩	野外研修・短歌創作 「大山」散策 (短歌提出)
15:00	合宿導入講義 今林賢郁先生	
16:00	班別研修	
17:00	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩
18:00	講義 国武忠彦先生	講義 ペマ・ギャルボ先生
19:00	班別研修	班別研修
20:00	就寝	就寝
21:00	消灯	消灯
22:00		
23:00		



合宿詠草抄







講義

國武忠彦先生の御講義をお聴きして

ゆれうごくく人の心をそのままに観ずる心尊かりけり

長谷川三千子先生の御講義

書物にてあこがれをりし先生のお声を聞ける今日のうれしさ

ペマ・ギヤルポ先生の御講義を聞きて

「美しき日本の国は今いづこ」問はれて悲し外つ国の人に

国学院大 文四 坂本匡史

九州発言者塾 西川美里

北陸電力エネルギー科学館 戸田一郎

班別研修

知らざりきウイグル族の住む地にて核実験のあまたありきと

福岡大 経一 山崎智貴

あまりにも祖国の事を知らざりき会ひ得し友と共に学べば

(学) 中村学園 佐藤啓介

埼玉大 教養一 山中利郎

すなほなる思ひをかざらず語りたる友らの言葉胸に残りぬ

亜細亜大 国際関係二 三輪夏美

合宿に初めて出会ひし友どちと日の本のこと語り合ひけり

(株) ビッグ・エー 梶原岳海

合宿で友といっしょに語らひて先人たちの心偲びゆく

野外研修 大山阿夫利神社

福岡教育大 大学院二 平田無為

大山の御社みやしろにのほりてふりむけば厚木の町は遠くかすみぬ

九州工業大 情報工四 谷口耕平

「疲れた」と言ひつつも友らは階段みたりを三人ならびて駆け登りゆく

蟬わの音や川のせせらぎに包まるる山路をたどる一步一步と  
学習院大 法三 藤尾允泰

大山の険しき道を登り切り遥けき眺めに疲れ忘れたり  
東京大 文Ⅱ二 豊増隆宏

友達と語りあひつつ踏み行けば険しき道も楽しかりけり  
西南学院大 三 平島賢次

大山を息切らしつつ登り来て下界を見ればここちよきかな  
(株) ビッグ・エー 浦野洋介

息きらし険しき道を登りきり宮より見ゆる景色うつくし  
日本歯科大 歯四 小泉喜代子

かくまでも登るにけはしき岩の道をつくりし人の苦しさいかに  
東北大 法一 齋藤瑠奈

「かき氷あるよ」としきりに誘ひ来るおばちゃんの声ふりきり登る  
中村学園大 三 赤峰大輝

合宿終る

知らざること多しと気付きしこの気持ち山を降りても忘れじと思ふ  
福岡大 経一 松井 豊

いざ故郷へ帰る道こそ違へども過ごせじ日々の友情は忘れじ  
東京大 法三 室園 隆大

七沢で出会ひし友と打ち解けて語りしことの忘れられずも  
大阪工業大 大学院二 川口 亮

妻子らにまづは伝へん合宿にて友と学びしわが国のこと  
NPO 法人教育オンブズマン 日下部 晃志

自らの無知と無力を恥かしく思へば学びにさらに励まむ  
早稲田大 政経三 池上 晃平

無知こそが恥となりしを心にし自ら進み学びてゆきたし  
国学院大 文二 梶島 明実

(株) はせがわ 石原 学

明日からは素直な気持ちで歌にして心に留めん素敵な毎日

九州女子大 人間科学三 西山志織

自らの心のうちに留めたるやまと心を言葉にしたし

大学教官有志協議会・国民文化研究会

大山（阿夫利神社）に登る

国民文化研究会理事長 上村和男

石段を登りゆけども御社は遠くにありてなほ登りゆく

若き等も息はづませつ石段を御社めざし登りゆきけり

全体感想自由発表を聞いて

元（株）講談社 磯貝保博

壇上で言葉つままるも合宿で得られたる感激伝はりてこし

がんばれと心の中で幾くたびも声のかけたき友あまたあり

今林賢郁兄の合宿導入講義を聴きて

元日商岩井（株） 澤部壽孫

若きらの心にとどけとひたむきに友の語れば胸を打たるる

何処にゐて何をなすとも国のこと忘るるなかれと雄叫ぶ友は

國武忠彦先生の御講義を聴きて

折々にうなづきたまひ古の文たどります友樂しげに

こまやかにやさしく豊かに飾り無き大和心の胸に沁み来る

(株) 寺子屋モデル代表取締役社長 山口 秀範

第四十回合宿(厚木)で小田村寅二郎前理事長の下、

運営委員長を勤めしことを思ひ出しつつ

合宿の運営の任に與りて努めし彼の日ゆ<sup>しほまりよしせ</sup>十四年

建物も往時さながら師の君の陣取り給ひし部屋もそのままに

報告のその都度伺ひ細々と指示受けしこと今甦へる

窓の外の森深くして夏の陽は強く照れども涼やかに見ゆ

窓の外の緑は彼の日に変らねど我らの慕ふ師ははやまさず

半世紀を超ゆる集ひの時々に力尽せし人ら偲ばゆ

受け継ぎて伝へ行かばや縁得て今年も若きら集ひ来たれば

長谷川三千子先生の御講義をお聴きして

多数派が数の少なき者達を圧殺し尽すその主義恐ろし

元新潟工科大学教授 大岡 弘

古ゆ祖宗の教へ承け継ぎて国統べらるる皇御国は

ペマ・ギヤルポ先生の講義聞きつつ

福岡県立大宰府高等学校教諭

占部賢志

遠き日の君なつかしく思ひ出づ霧島の里に集ひしかの日の  
ただひたにモラル・サポート乞ふのみと語りたまひき若き日の君  
今ふたたび日本の使命問ひ迫る言葉は強しかの日のごとく

山口県立熊毛南高等学校教諭 寶邊 矢太郎

乙女らのかざらぬことばに久しくも忘れたる心よびさまさるる  
ときをりに舟こぎたるもまた負けずとメモとらんとすけなげなるかも  
気負はずにおのが体験語りたることば友らの胸にとどきぬ

庭本秀一郎君の短歌創作導入講義を聴きて

興銀リース(株) 小柳 志乃夫

懇切に歌よむすべを説き示す君が言葉は身にしむ如し

作歌体験と人生体験を重ね合はせ説きゆく話聞くにあかなく  
親と子の一世ひとよの思ひ出となりにけむ歌よみかはしつなく絆は  
物のあはれを知るとふ道は生き生きと息づきてあり君の姿に  
歌を詠み心通はず日の本の国のまさ道忘れて思へや

緑濃き相模のみ山にいだかれて三泊四日をむつみ過ごしぬ

学生が掲揚しゆく日の丸を「君が代」唱ひ仰ぐかしこさ

「里の秋」かなしき歌ぞ母と娘は父の帰りを祈り待ちをり

長谷川三千子先生の御講義を拝聴して

熊本市役所 折田豊生

世の人が信じてやまぬ民主主義のあやふさつばらに説き給ふなり

ことのははしづかなれども説き給ふことごとくなべて力こもれり

五箇条の御誓文こそまつりごとこのまことの道と師は説き給ふ

野外活動

NPO法人教育オンブズマン 稲田健二

大山の阿夫利の社に湧きいづる霊水もお神酒とともにいたたく

「丹沢山塊」の東端にそびゆる大山は相模の国の神と仰がるる

宮前に市場なす店は古ゆ参詣途絶えぬ証なるらむ

靖國神社参詣（八月十五日）

品質・環境システム審査員 山本博資

遺されし文をら読めば国守る眞直くなる思ひ我忘れめや

ますらをのまことごころに守られて六十余年を過しきつらむ



今林賢郁先輩の御講義を聞きて

神奈川県立秦野曾屋高等学校教諭 原川 猛雄

あふれ出づる思ひのたけを語ります先輩の姿の尊く思ほゆ

地下室（早大信和会）で学問のすすめ輪読せし昔なつかしく思ひ出さるる

長谷川三千子女史

九州大学総合理工学研究院教授 清水 昭比呂

国柄を尋ねきはめて説く君の言の葉重しみ姿清し

台宿運営本部に山根清兄の遺影のあれば

若築建設（株） 池松 伸典

亡き友の遺影を飾り台宿の営み進むる友のかしこし

なつかしき友の写し絵見つむれば今いますこと思ほゆるかも

暖かき友のまなざしに見守られゆらく心も安らぎにけり

閉会式にて

共々に過ごせし友らと「君が代」を歌ふ声音の屋内にこだます

IMSグループ本部 最知 浩一

昨年の秋から友らといくたびも七沢訪ひ準備すすめ来し

十二年の年月を経て七沢に再び営む夏の合宿

全国ゆ七沢に集ふみ友らの顔ながむればうれしかりけり

血みどろの革命の歴史つみかさね「デモクラシー」なる言葉生まるる

「民主」なる言葉の裏にひそみたるおぞましきまがを師は語ります

五箇条の御誓文かけ昭和天皇は御国の再建導きたまふ

「民主主義は輸入にあらず」と五箇条の明治の帝の大道示さる

アサヒ飲料(株) 澤部和道

をちこちゆ集まり来てはひたすらに指揮班支へます先輩ありがたし

## あとがき

第五十四回「合宿教室」は、昨年（一九三三年）の八月二十日（金）～二十三日（月）の間、神奈川県厚木市七沢の「市立七沢自然ふれあいセンター」において、大学生・社会人及び関係者、合計百六十名の参加者によって、学問・人生・祖国の姿を心ゆくまで語り合ふ真剣な研鑽が行はれた。本書は、その合宿研修において繰り広げられた各種講義等を中心にしてその要旨を収録したものである。編集に当っては国文研会員の山本伸治、藤井貢、稲津利比古氏に校正・写真整理の労をとって頂いた。心より感謝申しあげるとともに、合宿参加者の皆様にはこの合宿記録をあらためて味読いただき、人生の糧として、また日本のあるべき姿をもとめるための指針として活用されんことを願ふ次第である。

さて、今夏の「合宿教室」は、来たる八月二十日（金）から二十三日（月）までの三泊四日間の日程で、熊本県阿蘇の「国立阿蘇青少年交流の家」で開催される。招聘講師として、京都大学大学院教授 中西輝政先生（演題「この国はどこへ行くのか」）にご出講いただく予定です。

全国の学生、青年諸氏多数のご参加を願ひつつあとがきとする。

平成二十二年二月

編集委員

山内 健生  
磯貝 保博

——日本への回帰——  
(第45集)

平成二十二年二月二十八日発行 定価 九〇〇円

送料 二二〇円

編者

大学教官有志協議会  
社団法人国民文化研究会

編集委員代表

上村和男

発行所

社団法人国民文化研究会

〒一五〇—〇〇一二 東京都渋谷区東

一—二二—四〇二

TEL (〇三三) 五四六八—六二三〇

振替〇〇一七〇—一六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします







大学教官有志協議会 | 編  
社団法人 国民文化研究会

